
ATES OF STORY ~ Grant Realization For Dream ~

カイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P I R A T E S O F S T O R Y } G r a n t R e a l i z
a t i o n F o r D r e a m }

【Nコード】

N 1 3 9 2 C

【作者名】

カイン

【あらすじ】

青髪のカインとその仲間達が夢を叶えるために、海賊になり、一人ひとりの夢を叶えていく。

序章：星の歴

惑星エレイズア

この星は三つの大陸、七つの海、二つの空がある。

そして人、竜人、魚人、鳥人、エルフと五種類の人種が存在する。

亜種同士での接触はあまり多いものではなかった。

歴史で語るに

暦が誕生して五百年……

まず亜人大戦という大きな戦争があり、

その戦争で人は兵器を使い、他の種族を根絶やしにしようとまでしていた。

兵器のせいで、竜人は絶滅寸前まで追い詰められ、魚人は都市を破壊された。

エルフと鳥人は中立の立場で見えていたが、襲われる危機があった。

勝者となった人は地上の八割で暮らし、他の種族は肩身の狭い思いをしていた。

それがきっかけで人と亜人は接触を拒んでいた。

それともう一つ巨大な戦争がある。

暦が誕生して七百年……

それはある科学者が悪人滅ぼしのために作り出した生物兵器が突然の暴走を始め、大きな戦争が起きた。

被害は二つの大国、十の小国、小さな村や街が五十も潰されてしまった。

被害を食らった大国はただ見ていただけではない。

沢山の軍隊が出動し、倒そうとしたのだが、攻撃は無駄に終わってしまい、

虫のように蹴散らされてしまった。

この暴走を止めるべく、選り抜かれた七人の戦士。

戦争の状況はあまり伝書に残ってはいないが、

彼らは死に物狂いで、暴走を止め、七人の戦士は一人を残し、姿を消してしまった。

その一人はその戦争で重罪を犯してしまったため、「時の牢獄」という、牢獄に永久に捕らえられ、今もなお捕らえられている。

そして三百年後、暦が誕生して、千年が経った。

あの戦争以来、人々は戦いの恐怖を見に覚え、皆家には最低でも一つの武器を置いた。

二度と戦争を起こさぬよう、それぞれの国がどのような文化、どのような技術が優れていることなど、

国と国との交流が多く深めて、それぞれの国はお互いを認め合っていた。

化学や魔学も進歩していて、人、亜人、機械が共存する平和な世界になるはずだった。

しかしある研究隊が作り出した機械博士ラグーの誕生によって、現実とは異なることになった。

ラグーは機械皇帝となる存在を作り出し、人々を奴隷のように扱い出した。

逆らうもの機械皇帝により感情も無く、人を八つ裂きにした。

世界の人々は、この事件を「機械の反乱」と呼んでいた。

人も抵抗をしないわけではない。

だが皇帝の破壊力に惜しみも無く、崩されていくだけなのだ。皇帝は世界支配を進めている。

同時に海賊たちが罵り合い、海ではいつものように大砲の音が鳴り

響き、海戦が行われている。

そんな日々が毎日のように繰り返されている。

そしてそんな世界に新たなる一子が誕生した。その子は生まれてま

もなく、両親と離され、知り合いの元へ。

母親もどこか遠くへと行かねばならなかった。

その日から十八年がたった…

序章：星の歴（後書き）

自分が中学生の時に作った作品です。
投稿しようと思えば、すぐにできるのですが、
多少矛盾している点があるので、訂正しつつ
投稿していきたいと思います。

第一章：船出

ここはヘイド村。

とんでもなく田舎で、まだ機械に侵略さていなく、人がまだ安心して暮らせている。

そこに十八歳になる青年がいた。

その青年が大きく息をした。汗を拭い、再び畑作業に戻った。すぐ近くの小さな家からひげの濃い、太っているおじさんが出てきた。

「調子はどうだ。いいものはできてるか？」

おじさんはばかにでかい声で青い髪 of 青年に話しかける。

「はい。今年も良作です。」

青年は手に持つ芋を眺め、はつきりと答えた。

「そうか。楽しみだな。期待してるぞカイン。」

おじさんは笑いながら、ノシノシと、奥の畑に歩いて行った。

青い髪の青年の名前は、カインと言う。フルネーム、カイン・F・ハルド。

カインは髪が綺麗に青く、瞳も青い。

見た目には悪いところが全くと言っていいほど見られない。

右手首には、地味な黒い鉄製のブレスレットをつけている。

若く元気な好青年だ。すると後ろから、カインの頭上を石が通り過ぎる。

「おい、カイン！仕事の方はどうだ？」

と言って、その男はもう一つ石を投げた。その石は近くに流れている川の方へ飛び、

カインと音をたてて、川岸に置いてあった空き缶に当たった。

「ガンスト、何かようかい？」

カインがガンストに話し始めた。ガンストと言う男は茶髪で、目ははつきりしている。彼とは幼馴染だ。

「お前の命中率は、相変わらず百発百中だな」

それを聞くと、ガnstはフツと笑った。

「今日はお前に、大事な話があるんだ。」

大事な話と少し動揺しながら聞いた。

ガnstが周りを警戒しながら口を開けた。

「驚かずに聞いてくれ。俺は村を出ようと思う。そんでどっか遠いところへ行く。」

驚くと言われたが、カインは驚いてしまった。海に出たことはないが、おじさんに聞いたことがある。

そしてこう言われていた。

――村の外に出てはいけない。出たら死ぬと思え。――

ガnstが、まさかこんなに危険な旅に出ようと言い出してきた。

どう答えてよいか、このときはわからなかった。

「返事は来週までに言ってくれ。船は小さいけど、ある程度準備はしてある。後は食料だけだからな。俺はもう一人ぐらいあたってみるけど、まっそういうこつちゃ、じゃーな。」

話しは勝手に進められながらも聞いていた。

「チーッス！何やってるの？」

突然、誰かが首を突っ込んできた。その声に二人とも少し飛び上がってしまった。

ゆっくりと振り向くと、そこには女の子がいた。

名前をリーシャといって、黒色の真っ直ぐ伸びる髪をしていて、背は二人より低い。

この村ーかわいい女の子だ。二人はリーシャとも幼馴染だった。誰かとわかると、ガnstは再び話し始める。

「なんだリーシャか。何しに来た？」

リーシャは、ここに来たわけを簡単に言った。

「買い物途中なんだけどね、あんたたちの話し声聞こえちゃって

ね。黙っててあげるから、あたしも一緒に連れてって！」

頭を傾げ、二人は顔を見合わせた。カインが、リーシャに話しかけた。

「なんで行きたいの？理由を教えてよ。」

リーシャは、何のためらいも無く、教えてくれた。

「ちつとお父さんとけんかしてね…それで家出という事で、よろしくつす。」

「そんなことか！？俺たちはもっと大きな野望を持ってだな……」話し続けようとすると、畑からおじさんが帰ってきた。

「どうした家に入らないで、そんな所でボーっと突っ立ってて、何やってんだ？他のみんなも家に帰りなさい。もうすぐ暗くなるぞ。」

おじさんが三人の前に立った。カインはすぐに返答した。

「わかりました。じゃあなガンスト、リーシャ。」

カインは、そういうとおじさんと一緒に家に入って行った。

他の二人もそれぞれ家に向かって帰って行った。

日は傾き、夜になった。

カインとおじさんは暗くなると、すぐに食事にした。

おじさんの料理の味は、うまいと言えるものは数少なかった。

カインは、子供のときから、深く気にしていることを言い出した。

「おじさん。僕の両親は、本当にこの世にいないのですか？」

「カイン！子供のときに約束しただろ。お前の両親の話をするなと！」

おじさんは、機嫌を悪くしてしまった。なぜかおじさんは僕の両親を毛嫌いする。

「すいません。だけとおじさん、家族なんですよ。写真の一枚や二枚はないの？」

またおじさんの頭に血を上らせてしまった。

間もなく、遠くで悲鳴が聞こえた。

その声を聞くとカインは、すぐさま家を出て、真っ先に悲鳴の聞こえる方へ走っていった。

おじさんも小走りでカインについていく。

カインが到着すると、暗くてよく分からないが謎の大きな物体がそこにはいた。

三十歳ぐらいの女性を一人、四十歳ぐらいの男性を二人、捕らえていた。謎の大きな物の照準がカインに変わった。

カインはおどおどしながら後ろに引いていた。謎の大きな物は、目が一つしかなく、ぎらぎら光っている。とても大きそうだ。

謎の大きな物がこちらに一步一步近づいて来る。ちょうどそのときおじさんが到着した。

「機械兵め！ついにこの村にもきたか。」

腰元にある刀を抜き、機械兵と呼んだ物に攻撃をした。出ている腹が大きく揺れる。

それでも斬れ味は凄まじく、機械兵と呼ばれる物の腕は、ガタンと音をたてて落ちた。

機械兵と呼ばれる物は失った片腕に、二人の男性を捕らえていたが落としてしまった。もう片腕で捕まえた人間をつれてどこか遠くへ逃げられてしまった。

少しおびえながら機械兵の片腕に捕まっていた人が、一言。

「ありがとう。」

声をかけるとすぐに村の方に走っていった。

生涯初めてのことにカインは足がすくんで、へなへなと倒れていた。幼い時から、この村に住んでいたが、こんなことが起きたのは初めてだ。おじさんが声をかけてきた。

「家に帰るぞ。それと一つ注意をする。お前がもうすぐ大人になるからって、こんな夜遅くに家を出て行つてはならんぞ。いいか？」息を切らしながら話した。カインは何も言わず、おじさんにくっついて、小さな家に帰っていった。

帰り道にカインはおじさんに今現れた機械兵について聞いた。

「おじさん今のあれは何なの？それとおじさん、そんなの持ってたっけ？」

カインが話したとたんおじさんはちよつと怒り気味に話した。

「そのことについては、触れるな！良いな約束だ。」

「あ、はい。わかりました。」

カインは素直に答えた。

カインはガンストに話されたことを言う決意をした。そして海へ行くことを自分では決意した。

「おじさん…あのー…」

話を切り出そうとすると扉がバンツと勢いよく開いた。デネザー村長がやってきた。

デネザーは身長が高いが、がりがりに痩せている。それにこの村長はガンストの父親でもある。

「セザブル。ちよつと私の家まで来てくれないか？話があるんだが。」

「

へい。なんですか？」

言われると、おじさんは家を出て行った。カインは、ここで一つ気づいたことがある。

相違えば、おじさんの名前って知らなかったなと思った。

おじさんが家から出て、一時間ぐらいしても帰ってこないのので、暇で退屈していた。

退屈で辺りを見回していると、神棚にさっきおじさんが使っていた刀が置いてあった。

「そういえばおじさん。これ置いていったな…」

この刀はさっき機械兵を斬った刀である。

あんなに硬そうな装甲をいとも簡単に斬ってしまうものすごい斬れ味のいい刀だ。

カインは刀を鞘から少し抜いてみた。

カチャツと言う音と共に刃が現れた。

汚れの無いとてもきれいな刃だった。柄のところには、この刀の名

前が彫られているようだった。

――斬鉄剣――

少し読みづらいが斬鉄剣と掘られていた。さらに柄の方には誰かの薄く名前が名前が書かれていた。

「斬鉄剣？なんでおじさんがこんなものを持っていたのだろう？」
文字を眺めていたらもう一つ、くクロド・F・シーラーと書かれていた。

おじさんの字とは全くちがう字だ。すると扉が大きな音を立ててと開いた。

おじさんが帰ってきたのだ。すぐにおじさんは、カインの行動を見つけた。

「お前！何いじっているんだ。それを戻して、神棚に置け。」

カインはすぐにおじさんの指示に従った。

「そうそれでいいんだ。そのままにしておけ。お前、話を聞いたぞ。村長の息子と村を出るつもりらしいな。いいか！この村を出ることは許さんぞ。いいな？村長の息子さんにも話した。二度とそんな話をするなよ。」

おじさんはものすごく機嫌が悪かった。

おじさんは怒ったまま、自分の部屋に入っていった。今日はもう出てくることはなかった。

おじさんが、あんなに怒った顔をみたのは、久しぶりに見た。

はじめてみたのはあの時だった……

カインが５歳のころ、ガンストとリーシャと遊んでいると、ガンストが不意に聞いてきた。

「ねーカイン。カインのお父さんとお母さんはどこにいるの？」

子供のころのガンストにこの話を聞いたとき、始めはなんだと思った。

「なにそれ？」

そのときの自分はあまりに物知らずで、言葉の意味は良くわからなかった。

「お父さんとお母さんって言うのは、あなたを生んでくれた人のこと。あとでおいさんに聞くといいよ。」

子供のころのリーシャは、カインより頭が良かった。

「わかった。聞いてみるよ。」

そのあと、子供のころの僕は、おいさんに話を聞いた。

このころのおいさんは、まだ太ってもいなく、まだ三十代で今とは比べ物にならない。

「ねえおいさん。僕のお父さんとお母さんって誰？どこにいるの？」
そう言うと、すぐにおいさんは、子供の僕をビンタした。その痛さで涙が出てしまった。

「カイン！二度とそのことを聞くな！分かったな？」

……このときと、今のおいさんと同じくらい怒ってた。

今でも両親を嫌う理由はわからない。

カインは食事をすましたが、あまり食べた気がしない。

カインも自分の部屋に行き、ベッドに横になりそのまま眠りについた。

そして次の日の朝、おいさんはすでに起床していた。

朝一番から、おいさんは畑仕事をしていた。おいさんはまだ怒っているのか、力まかせに仕事をしている。カインはおいさんに話しかけた。

「あのーおいさん。僕は何を手伝えればいいでしょうか？」

「そうだな……そういえば、村長のところが、力仕事を頼んでいたぞ。やることないから行って来い。」

おいさんはやっぱり機嫌が悪かった。おいさんに言われたとおり、村長の家へ向かった。

村長の家へ向かう途中、ある老人が帽子を深くかぶりながら、長い杖を突いてゆっくり歩いている。

「すまぬが、そちは、どこへ行くつもりかな？」

老人が話しかけてきた。その老人のひげはとても長く白かった。身長はカインより頭一つは高そうだ。

「この村の村長の所へ向かいます。失礼ですけど、何方ですか？」

カインは老人の質問にさつさと答え、さらに質問を出した。

「わしか、わしの名はフロウ・ウェンと申す。フロウと呼んでおくれ。」

フロウは名前を優しく教えてくれた。僕も教えようとしたそのとき、
「待て待て。そちの名は知っておる。カイン・F・ハルドと申すじやろう。」

フロウが名前を当てたことに、カインの頭はこんがらがってしまった。

この人は、会って間もないというのに即座に言い当てた。

「なぜあなたは、僕の名前を知っているのですか？」

カインはおそろおそろ聞いてみた。フロウはにっこり笑って教えてくれた。

「それはな、カイン君。わしは魔法使いだからじゃ。炎の魔法、氷の魔法、雷の魔法……」

それはさておき、なぜわかったかという、わしは、少し先の未来を見る魔法で、知ることが

できたのじゃ。じゃからこの道で、そちと会うことも少し前にわかっただけだ。」

フロウの話を聞いて、カインは開いた口が、ふさがらなかった。

この老人は魔法使いだと言う。未来を見れるという。それならカインは聞いてみた。

「それではフロウさん。僕のこれからの未来はどうなっていますか？それでどこにいますか？」

カインはガンストと一緒に海へ出ているのか聞きたくなってたまら

なく聞いた。

「うむ。では、見てしんぜよう。」

フロウは、小さな声でうなり始めた。カインはそれをじっと眺めていた。

「見えたぞ……そちは数名の仲間と海へ出ておる。だが、激しい疲労で顔が疲れておった。わしが見えるのはそこまでじゃ。これから先は、自分で切り開きたまえ。」

フロウはそういつて去って行った。カインはフロウに大声で叫んだ。「また、会えたら良いですね。」

フロウは、声に気づいて大きく手を振ってくれた。それからカインは、いつもより嬉しそうに歩いて行った。こうして村長の家に到着した。

玄関にはガンストが立っていた。ガンストが話しかけてきた。

「おい、カインどうした？今頃行く気になったのか？けどな、行けなくなっちまったよ。」

うちの親父が、海に出るのは許さないってよ。」

ガンストの声が、だんだん小さくなっていった。

「うちのおじさんにも言われたよ。」

カインは軽く肩を落としている。始め言われたときは、なに言っているんだ、こいつはと思ったが、日がたつにことなんだかワクワクしていた。だが昨日の事件でその話は、消されてしまった。しかしフロウのおかげで少し海へ行ける自信があった

ガンストが小さな声で話しかけてきた。

「なあカイン、海へいける策が思いついたぞ。」

うなずきながら、ガンストの話を聞いていた。

「夜こっそり抜け出して、船に乗って出ちまおう。つまり強行突破だ。」

リーシャには内緒にな。もう出て行けば、追って来ることは出来ないだろうし……どうだ、この話のるか、のらないか？」

カインは考えず、すぐに答えを出した。

「よしのるよ！」

「そうこなくっちゃな。」

そういうとガンストの父親の手伝いをした。五時間ほど手伝いをした。

その手伝いをしながら、時々村長が見えなくなると、二人はこっそりは話し合った。

仕事が終わるとカインは、立つのがいっぱいいっぱいになるぐらい疲れていた。

帰ろうとすると、ガンストはカインにウインクをした。それを見つけると、すぐにウインクをやり返した。

カインが家に向かっていると、先程の長身の老人フロウがカインの家の前に立っていた。

おじさんと話しているようだった。

「カイン、すぐ家に入れ。俺はこの老人と話があるんでな。」

機嫌は直ったみたいだった。いつものやさしい口調に戻っている。

フロウはまたにっこり笑って、こっちに向いてくれた。

カインも笑い返し、家に入っていた。フロウはおじさんを連れて村長の家へ話しながら歩いていった。フロウは多分あのときに、このときの未来も見えていたのだと思う。カインが、海に確実に出れるというわけは、フロウのおかげで分かっただろう。

その間にカインは準備をちやくちやくと進めていた。もちろん海に出て行くための準備である。

食料・水・その他必要なものは全て持った。全て荷物をそろえたとき、あの刀斬鉄剣が目についた。

「おじさん、借ります……」

その刀を手に取り、荷物を入れたカバンを背負い、家を飛び出した。待ち合わせの場所、海へとつながってるザマワ川に向かった。この川に決めたのは、この村で海へ出られる道はこの一つだからだ。

ガンストはもうすでに船に乗り込み準備をしていた。船は小さいとは聞いていたが、本当に小さかった。

人が3人乗ったら沈みそうだ。この船には、エンジンがついていた。エンジンをつけると、ブロロロ…と音が周り響いた。

「これでやっとここを出発できるな。」

カインがガンストに話しかけた。

「んっ？そうだな。ところで何か変った物、持ってきたか？俺は親父のタンスの引き出しに

入っていたマグナムを二丁とも持ってきた。それとよ、金はどうくらい持ってきた

た？俺は貯金全部持ってきた、ジェネラル二千五百」

「とは、この世界の共通のお金の単位のことだ。カインは手に持っていた刀、斬鉄剣を見せた。それとポケットに手をつ突っ込んで、出せるだけの金を出した。

「俺が持ってきた変ったものはこれだ。金は…これだけ。」

カインの手には、三百。それよりガンストは、斬鉄剣のほうに驚いていた。

「お前、すごいな。確かこれ名刀百科典に、この刀が載ってたけど、これが何で、お前のおじさんが、持ってるんだか？まーそんなことはどうでもいい。さあ出発だ！」

ガンストの掛け声と、船はゆっくりと進み始めた。本当にゆっくりとだが確実に前進している。でも歩いたほうが早いかもしれない。これでこの村ともおさらばだと思つと、カインは目がちよつと涙ぐんでいた。時には厳しかったが、優しくつたおじさんともしばらく会えない。ガンストの目を見ると、これからの冒険へ向かうのに誇らしげに向こうの海を見つめていた。

「ちよつと待つて！止まってよ。」

遠くから二人に呼びかける大きな声がした。

振り向くとリーシャが後ろに、あわてて船を止めた。

「あたしも行く！いろんなところを見たいし、見たことないもの食べたし…」

「あのなあ。」

「そんなこと言うと、バラしちゃうよ。今までやった悪さを全部。」
それをやられるといくつかまずいモノがあると思った二人は、仕方なくリーシャを連れて行くことにした。

「やったあ！じゃ行こう！早く早く。」

再びエンジンを掛けて、進み海へと進みだした。

出た日が特別悪く、外は今まで見たことの無いような嵐だった。

雨はザーザーと降り、顔にバシャバシャと打ち続ける。

さらに風は強く、この小さな船が転覆しそうになる。

波はというと、津波ぐらい大きい波が何度も何度も打ちつけてくる。

そして最後の大きな波で、三人は海へ出され、波に飲まれてしまった。

嵐はだんだんと止んでいき、日の出が見えようとしていた。

しかし海へ出たのはいいがこの三人は、航海術と言う術を全く持っていないかったのだ。

どこに着くことやら……

- - - - -
- - - - -
- - - - -

これは僕が中学生の時に作った作品です。

投稿しようと思えば、連続で投稿できるのですが、

おかしいところがあつたりするので、いろいろ訂正しながら、全話出したいと思っています。

第二章：夢（前書き）

多少下手な部分は見えてしまいましたが、
大目に見てください

第二章：夢

カインが目を覚ましたとき、砂浜にいた。

右手には落とさぬよう斬鉄剣をしっかりと握っていた。

カインは疲れていて、すぐには立ち上がれなかった。

「ここは……どこなんだ？」

少しして、立ち上がるとこの砂浜を見回した。

そこで一枚の看板を見つけた。島の名前が書いてあった。この島の名前はバーグというらしい。

どんな文化が盛んなのかよく分からない。

でもこの島はわりと静かで平和そうに見える。機械に支配されている様子はなかった。

「ガンストとリーシャはどこだ？」

砂浜を歩いていると、ガンストが砂浜に横たわっているのを見つけた。

ガンストを起こすと次は、リーシャを探した。

リーシャは、まだ海の中に居た。

力が抜けているため、波と一緒に体が動いている。リーシャを救い出し、意識を取り戻させた。

リーシャは特に荷物を持たず、カインとガンストはそれぞれの武器を隠し持ち、島に入っていた。

武器が堂々と見えていると、何か言われると思って、心配だったからだ。

まず三人はレストランへ向かった。食料は、流されてしまったため昨日の夜から何も食べてはいなかった。

注文するだけして、料理がとどくなりガツガツ食い始めた。

「うまい！」

昨日の大惨事でガンストは体力を使い果たし、空腹だったため、とても感動していた。

「半日ぶりに食べるけど、うまいな。」

カインも同じように感動していた。

「ねえ食べ終わったらどこ行く？」

リーシャは最初に食事を済ましていた。次の段取りを考えていたし、
ている。

「さあな。とりあえず食おうぜ。」

「ふいほわっはは、あははひいはかまはがそうへ（食い終わったら、
新しい仲間探そうぜ）。」

口に食べ物が入っているためもごもご言っている。リーシャには
良く聞き取れなかった。

周りの席の人々は、二人の食欲に驚いて、自分たちの食事が止まっ
ていた。

その頃、島のはずれで、機械兵が四機ほど到着した。

すぐさま、その機械兵は島の森を燃やしていた。

レストランの食事が済んだ三人は、請求書を見て、瞬きをしなくな
ってしまった。

こんなに食べたかと思いつながら請求書をみていた。

カインとガンストが金額を見て、話しあっていると、急にレストラ
ンにいた人たちが騒ぎ出し、逃げ出した。

ガンストは、何かと思って窓の外を見た。そこには機械兵が外にい
たのだ。

「なんだ、こいつらは……」

ガンストのあいた口がふさがらなくなってしまった。

「きゃっー！逃げよ逃げよ。速く！」

カインは一度村で、あれを見ている。あのおじさんが、腕を切
った機械兵に似ていた。

いや似ているというよりも本物だが、暗かったから正確にはわから
ない。カインの胸は鼓動を高めていた。

自分が何かと戦うということは初めてだった。

この三人は、旅に出て初めての戦闘だった。

カインは、斬鉄剣を鞘から刀を抜き、構えた。

「戦う気なの？」

リーシャが聞くと、カインはうなずいた。

「もちろん。剣術としては、外に落ちていた棒を振り回して、大きな木に、切ってるまねごとをした経験があるから、なんとかする」

それを聞いて、リーシャは愕然とした。

ガンストもカインが構えたのを見て、マグナムを取り出した。

「俺もやるぞ。狙撃は任しとけ」

手に一丁のマグナムを取った。機械兵が動き出し、攻撃を仕掛けてきた。

「いくぞ！」

その攻撃を回避し、カインは反撃に出た。

あの時おじさんが切ったみたいにみたいに斬れるはずだと思い、一気に振り下ろした。

だがカンッと音が鳴り、攻撃は弾かれ、機械兵の繰り出される攻撃で、殴られ、思い切り飛ばされてしまった。

カインは壁に勢い良くぶつかって、気を失ってしまった。

リーシャはやられたカインに急いで近寄った。

「カイン！大丈夫？ねえ！！」

体を揺するが、気が戻りそうに無い。

カインを見届けると、ガンストは機械兵に向けて、適当にマグナムを撃った。

だが何処に当たっても、カンカンとダメージにはならず、あまり効いてないようだった。

そして機械兵はガンストに照準を定めた。そのときだった。一本の

槍を持った男が、機械兵のレンズを突き刺した。
その攻撃で視界を失った機械兵は、混乱して味方に攻撃していた。
機械同士で攻撃しあい二機ともこわれてしまった。
ガンストはその光景を見て、気を失ってしまった。

数時間後…

カインは目を覚ました。

どこかの部屋に寝ていた。隣には、ガンストがグーグー眠っている。
窓から外を見ると、この家の庭がまず見えた。遠くには町があり、
他の場所を見ると、火で焦げた森が見える。

さらに、一人の男性が木の前に立っていた。自分の武術の特訓をしているようだった。

その男性が話しかけてきた。

「おつ、やつと目覚めたか？大丈夫だったか？」

その男性はカインよりやや背が高く、特徴的な低い声をしていた。
腕には深い傷を負っていた。

カインが痛みが走る右肩を抑えながら話した。

「ありがとうございます。あなたのお名前は？」

その男は突然怒鳴り、ビンタしてきた。

「馬鹿者！名前を言うときは、己の名前から言うものだ。」

「すいませんでした……僕の名前は……」

話すと肩がズキズキして痛い。

「私の名は、イーザ・デント・カスガ。この町の漁師だ。あとお前に付いてた女の子は、買ひ物を頼んだ。それより大丈夫かその肩？」

「あのさ……」

ついあきれてしまい、イーザを無視した。周りを見て、自分のそばから斬鉄剣が無いことに気づいた。

「ところで僕の刀はどこにありますか？斬鉄剣と掘られている刀、
なんですか？」

部屋のタンスの上をイーザは指を指した。

「あそこにある。彼の銃も一緒に置いてあるよ。」

確かにタンスの上にあった。確認させるとイーザが続けて、

「あんたらは、どこから来た？この物騒な世の中、武器を持っても攻撃がちゃんと通らなければ意味のないものだ。よし少し鍛えてやろう。」

「頼んでないんですけど……」

「木刀を貸してやる。これで俺に一回でも攻撃を当ててみる。」

勝手に話は進んでいった。カインは渡された木刀を眺め、しっかりと握った。

二人とも外へ出た。イーザは木刀を持ち、構えていた。カインは機械兵と戦ったときと同じように構えた。

肩の痛みをこらえて、飛び掛かり攻撃をした。

何の問題も無く、イーザは簡単にカインの攻撃を防いだ。機械兵と戦ったときよりは弾かれなかった。

「むやみに攻撃をするものではない。相手の動きをよく見るんだ。」

カインは立ち上がり、再び構えた。

なぜか次第に肩の痛みが癒えていく。

カインは心の中で相手の動きというものを考えながら、イーザの攻撃を待った。イーザが仕掛けてくるのを待った。

「攻撃をしないのであれば、こちらから行くぞ！」

「んがつ！？」

驚くのもつかの間、イーザは走ってきた。カインは今まで以上に強く握った。

イーザの攻撃をなんとか防ぐことができた。手がジーンと痺れている。

このことにイーザはよくやったという様な、顔を見せてくれた。

「では次に連続でいくぞ。」

また走ってきた。カインはさっきの防いだことを考えながら、守りの体制に入った。

一回、二回と続けて守り、三回目は守るのに失敗してしまった。当たったと思ったとき、木刀は寸前のところで止まった。

イーザが寸止めしてくれた。カインの体は、緊張感やら恐怖で固まっていた。

「遅いぞ。そんなことでは、先程と同じようにやられてしまうぞ。では最後に一撃必殺の攻撃だ。」

力はある木を切り倒すくらいのもんだ。刀がすぐくても、使用する本人が、こんなんでは刀に負けて、何でも斬れるものでも斬れなくなってしまう。

それでは、斬鉄剣であの大木を一回で切るのだ。まだ無理だと思うから、少し練習をしろ。まずあの小さな木を切るのだ。」

大木は、ヘイド村一の大木よりもでかく、それが何本もあるのだ。小さい木といっても、ヘイド村の普通に生えている木よりは大きい。カインは木刀を置き、箆笥の上から持ってきた斬鉄剣を握った。

ちょうどその頃、ガンストが目覚まし、ほぼ同時にリーシャがイーザの家に帰ってきた。

「あ……ガンスト…生きてたんだ。」

今の一言で、ガンストは頭に血が頭に上りかけた。

「んだと！生きてちゃ悪いのか？」

「別に。」

ガンストとリーシャで話していると、後ろからまた別の声が聞こえた。

家には誰か居たらしく、次第にその人と話していた。カインは気を取られたが、すぐに集中した。

ガンストが、カインに気づき、話しかけてきた。

「カイン！そんなところで何やってんだ？」

イーザは、ガンストに近寄り、話を止めさせた。

続けてイーザは、ガンストにカインが何をやっているかを説明をすると、ガンストも外に出させた。

ガンストの場合は命中率を極めるために、的に小さな黒い点がつい

ている。

そこから、5メートル離れたところでその黒い点に当てる練習をした。

二発、三発と打ったが、的には当たったものの、黒い点に全く当たらなかった。

練習中のカインは木に向かって、切りかかった。見事小さな木はものの見事に切ることができた。イーザが、熱く話してきた。

「そんなもので浮かれていてはダメだ。本番はこの大木なんだからな。」

確かに本番の木は、今切った木の十倍以上ある太さで、今切ったのは始まりに過ぎなかった。

一方、ガnstは5、6メートル地点では簡単に当たったが、徐々に距離がのび、今じゃ十メートルのところでの的に当てるのが精一杯になってしまった。

家の中で二人この特訓を見ている人がいた。イーザが呼んだ。

「おい、ギン。こっちに来い！お前も一緒に特訓を受けるか？」

その言葉を聞いてギンは喜んで、すぐに準備を始めていた。とカインが、

「誰です。あの家の中の人たちは？」

イーザに尋ねると、

「んっ。あゝ、あいつは、私の息子でな。あいつもお前らさんと、同じように海に出たがっている。もう一人は、私の妻だ。」

そういえば、お前らさんの親は、海に出すのを決めたとき、どんな気持ちだったのかな？知っているか？」

「いいえ。分かりません。」

カインは分からないと言うしかなかった。

夜黙って、船に乗り込み勝手にあの村から出てきたのだから。ギンがイーザの前にやってきた。

ギンは、髪の毛が短く、田舎の町に居そうな人の格好をしている。頭には帽子をつけている。

「父さん。僕には、どんなことを教えてくれるの？」

イーザは倉から槍を取り出した。

「お前は、乱れ突きの実習だ。この木に向かって何十回、何百回同じ所を突け。わかったな？」

ギンは槍を受け取り大木に向かって乱れ突きを始めた。リーシャも続けて、似た質問をした。

「ねえおじさん！私にも武術教えてよ。シュツシュツてな感じでさ！」

リーシャはパンチの動きに効果音をつけた。イーザはリーシャに、長い棒を渡した。

それを受け取ると、何も言われずに木に向かって、かんかん当て始めた。カインはその光景をボーッと眺めている。

「お前は何をやっている？早くあの木を切ってみたまえ。」

そういうと、後ろにあつた小さなイスに座った。カインは言われたとおりに再び構えた。

今度はとてつもなくでかい大木に向かった。心を精神を集中させた。そしてあの木を切ったことをイメージして切りかかった。

木に刀は刺さったが、切れるどころか、刺さったまま動けない状態だった。いくら押してもそれ以上切れることはなかった。

「切れない……さっきの木なんて比べ物にならない。」

やけになり、その木をたたき、そのまま寝転んでしまった。

「どうした！そんなことでは、海に勝てんぞ。」

その言葉を聞き、イーザの方へ顔を向けた。

「どうすれば切れるでしょうか？」

イーザは答えをすぐに出した。

「力だけではダメだ。心の目で木を見ろ！いくら丈夫なものでも、弱点があるはずなのだ。それを見つけることが先決だ。」

そう言葉を残すと、ガンストたちを監督しに歩き出した。

カインは、言われると「心の目」を考えた。目をつぶって考えた。とりあえず立ち上がり、目を開けた。木に刺さりっぱなしの刀を抜

き、構えた。

だが構え方はさっきまでとは違っていた。そして再び目をつぶった。

長い沈黙の中黙って、考えていた。

耳を澄ますと、周りからいろいろな音が聞こえた。

ガンストが的に向けて撃つ銃の音、ギンが槍の練習で木に打ち続ける音、

リーシャの持っている棒で木を叩く音、イーザがまた座ったらしいイスのキーキーする音、

それに小さいが葉と葉がこすりあう音、波の音、風の音が聞こえた。

カインの考えた出した心の目とは……

……音……

今度は何も考えず、斬鉄剣を鞘にしまつて何かをずっと待っていた。少しの間そうしていると、背中を押す突風が起きたそのとき、

カインは動き出し、鞘から斬鉄剣を抜いた。

そのとき奇跡が起きた。

カインが、スパツとあの大木を切った。

いつの間にかカインは大木に向こう側に立っていた。

鞘に刀を入れると大木は斜めにずれていき、木は倒れた。ものすごい音と地響きで、他の四人は気がついた。

カインが目を開けて、後ろに振り向いたとき、完全に木は倒れていた。そのことにガンストとリーシャとギンが驚いていた。

イーザは切れた大木の切り後を見て、なおさら驚いた。なんとほかの傷がひとつもなく、キレイに切れていた。

「すごいぞ！驚いたよ。まさかこんな短時間でこの刀を使いこなし、この大木を切ることができるだなんて……」

才能があるんだなお前にはきつと才能が……」

「そんなことはありません。イーザさんのお陰です。あの言葉が、この木を切るヒントになったんです。」

ガンストとリーシャとギンは、イーザのあとにやってきた。まず最初にギンが話しかけてくれた。

「すごいよ。君なんていうの？そうだ！父さん……僕この人たちと一緒に海へ出たい。一緒に海へ出て、世界の地図を描きたい。」

ギンの性格はイーザに似ていた。ギンの言葉にイーザは怒らなかつた。

「いいだろう。海へ出てよい。」

ギンは目からうれし涙をこぼし、カインたちと何度も握手をした。そのつかの間イーザが話を続けた。

「その代わり条件がある。今度この町に機械兵が出てきたら、そいつをお前ら四人で倒せれば、海へ行くことを許す。」

ギンの喜びはぬか喜びおさまった。

いつ出てくるかわからない、機械兵を倒せばって、いつになることやら……とギンは考えて、肩を落として家に戻っていった。ガンストがしかけた。

「おいおい。なんで条件つき何だよ。無条件でいいじゃないか。」

ガンストは怒り気味だった。イーザは口を開けた

「たしかに無条件でいかしてやりたい。しかしな、万が一海へ出て死んでみる。」

俺は、ギンが俺より先に死んで欲しくないのだよ。もし四人で一機でも倒せれば、俺は行って来い！って言ってやれんだ。」

イーザは、そのままイスへ向かい、イスに座り黙り込んでしまった。ガンストは怒りながら、さっきまでやっていた練習の続をした。

リーシャは、ギンを見に家に入っていた。

カインは黙ってその光景を見ていた。心の中でギンが仲間に入るま

で、この町を出ないことを決意もした。

今は船がなくて出れる状態ではないが……

カインはイーザの隣へ座った。すると、イーザが話してくれた。

「お前さんは、なぜ海へ出たのだ……」

カインは考えた。確かに海へでてやろうと思ったことなど何もなかった。カインは一つの答えを出した。

「世界で一番の海賊になるためです。機械の反乱を止めること、まだ見ぬ両親に会うこと、そして誰もが笑える世界を創るためです。」

イーザは苦笑いをした。

「機械の反乱を止めるだと？世界のみんなを笑わせるだと？革命を起こそうというのか？」

そんなことは無理だよ。何十人、何百人、いや何千人とも君と同じことやろうと人は、みな戻ってこなかったよ。

今はその人たちは、地の下で寝ていると思うがね。それに君たちはその人数で、やろうとしているのかい？ギンが入ったとして四人で……

たった四人で止められれば、世界はもつと早く直っていたよ。両親に会うことぐらいはすぐできるんじゃないか？」

イーザは言うだけ言うと、立ち上がって家に戻った。カインは心で思いを告げた。

まだこれは通過点いやスタート地点にすぎない。

これから仲間をたくさん増やし、でかい船を持ち、機械の反乱を止める。

世界から戦いを消すために……

そのために今をがんばっているんだ。

そして僕の両親に会うために海へ出たんだ。

目標の事をガンストに話にいった。勝手に世界一の海賊になるって言っちゃたし、機械の反乱を止めるとも言ってしまった。

ガンストにそのことを話した。ガンストは海賊になって金儲けをすることしか考えていなかった。

ガンストは、今まで打ち明けることができなくて、すまんと謝ってくれた。

それに対してリーシャは、何も考えてなさそうだった。

「どうしたのカイン？」

「いやなんでもない。」

だんだん日が暮れて夜になった。今日は、イーザが家に泊めてくれることになった。

「イーザさんすいません。泊まって食事も出してくれるなんて。ちよつと楽しい会話を作ろうと必死でカインは話をする。」

「ホントにありがとね！おじさん。」

リーシャも話を盛り上げようとしているが誰も話しに乗らない。

「あなた、食べ終わったら流しに出しといてくださいね。」

イーザの奥さんも、まったく弾まない話ばかりしている。

ガンストはイライラしながら、食を進めている。

ギンはまだ肩を落として、食があまり進んでいない。

イーザは無表情で黙々と食べていた。

食事が終わると、イーザは真っ先に部屋向かった。四人は負けたやつが、皿洗いと言う罰ゲーム付きで、じゃんけんをした。

ガンストとリーシャはじゃんけんをして負けてしまい、皿洗いをしている。

ギンとカインは外に出た。夜の海を眺めながら話し合おうとしていた。

気持ちいい風を浴びながら、まずカインから話かけた。

「なあギン。お前は海に行って何がやりたいんだ。」

ギンは空を見上げて話してくれた。

「えーと僕は世界の地図をこの手で書きたい。この世界のいろいろな大陸の形、どれだけ広いのか、とか計測してみたいんだ。今歴史上でも、世界地図をきちんと書いた人が誰一人としていないんだ。」

この星が広すぎて、書けないらしい。

それに今は機械の反乱が起きて、さらに書きづらくなっている。僕は世界で一番最初の、世界地図を書きたいんだ。」

ギンはわかりやすく詳しく話してくれた。ともにカインも海へ出てやりたいことを話した。

「そっぴいえば君の名前は？」

「僕はカインだ。カイン・F・ハルド、よろしくな。」

カインも自分の夢について話した。ギンは、あんどりと口をあけて驚いた。

ギンもやはり親子か、イーザと同じようなことを言ってきた。機械の反乱は止めたものは誰一人いないと。

話しているとリーシャが加わってきた。皿洗いが終わったらしい。カインは、リーシャにも聞いてみた。

「あたしはね、うーんと、初めはうちの御父さんがいやで家出だったんだけど、みんなの話しを聞いてね。」

あたしも夢を言いたいけど、今は……考えとく。でもついてきたわけは他にあるのだけど今は秘密。」

二人はなんだと思っっている、後ろからガンストもやってきた。

「何やってるんだ？こんなところで、暴露会か？」

そのことをさらにガンストにも聞いてみた。

「俺はな海へ出て、たくさん仲間と海賊同士で戦って、がっばり宝を見つけてよ。」

どこでも遊べるようにしたいんだ。その夢をカインと一緒に叶えようかなと思っで連れてきたわけよ。」

ガンストも潔く話してくれた。

ガンストの話が終わった途端、町からものすごい爆発音が聞こえた。

顔を町の方へ向けると、赤くゴーゴーと家が燃えている。イーザも家から跳び出てきた。

急いで四人は戦う準備をした。準備が終わった途端、家を猛スピードで飛び出した。

イーザは止めようとしたが、全く声が届かなかった。

四人が町に到着すると、家は半分ほど壊されていた。町の人々は山へと逃げた。

すると、一機の機械兵が、カインたちを見つけたらしく照準をこっちに向けた。

あのときは、あの時の夜では姿が分からなかったが、今は周りの炎などでしっかりと姿が見える。

顔は大きな目だけで、口や鼻がない。腕は足よりも長く、足は、歩くぐらいしか使えなそうだ。

「いたよ！みんないた！」

リーシャが見つけると、他の三人は武器を構えた。見つけるとリーシャは、近くの岩の影に隠れてしまった。

カインとガンストは心の中に二度と負けないと強く叩き込んだ。

まずガンストは機械兵のレンズを狙った。あの時イーザは目を狙い、一突きで貫通した。

あの練習が、役に立ったか分からないが、とにかくレンズの中心を狙った。だが今度は的が動くため、全然照準が定まらない。

カインは大木を切ったときのことを思い出して、音を聞いた。だが聞こえる音は、

恐くて悲鳴をあげている声と、家が燃える音、さらに機械兵の足音・手を振り上げる音。

カインは隙をついて、足を攻撃した。今回は弾かれることなく斬ることができた。

「よし！頼むぞギン！」

機械兵はバランスを崩し倒れこんだ。

「了解！」

ギンは、倒れこんだ機械兵の腕を突き刺さそうとした。何度か突いていると刺すことに成功した。

その後、とどめを刺すようにカインが機械兵のレンズを斬鉄剣で突き刺した。

ガンストは一人で、別の機械兵を一体を相手にしていた。ついにガンストの照準が合うと、バーンと一発撃ちこんだ。その一撃は機械兵のレンズをものの見事に割った。

「ビンゴ！」

機械兵を動かすための脳に当たる部分に当たったらしく、動かなくなってしまった。

機械兵を二体倒し、イーザが来たときには四人は、初勝利に騒いでいた。

ギンは、イーザを見つけるなり近寄り話しかけた。

「父さん。いいんだよね。機械兵を倒したよ。条件は達したから、カインたちと一緒に海へ行っていいいんだよね？」

イーザは腕を組み、ゆっくりとうなずいた。笑顔を見せながらカインたちに話した。

「君たち、ギンをよろしく頼むよ。話は変わるが、船はどこにあるのかな？明日見送らせせてもらうよ。」

だが三人は困り、顔を見合わせた。

ここに来るとき船は嵐によって、海に放り出されてしまった。ガンストは機械兵を倒したことで、機嫌を取り戻したらしく、イーザに話しかけた。

「すまないがイーザさん。船を一隻頂けないでしょうか？実は、始めに乗ってきた船で、荒波に飲まれちゃって……お願いします。船を一隻ください！」

ガンストは深く頭を下げた。カインとギンそれにリーシャもガンス

トの横に来て、一緒に頭を下げた。

「分かった。私の家の近くの洞窟に、帆船が一隻あるぞ。それを使うがよい。食料と水も準備しよう。」

では私とリーシャとギンで船を動かすから、カインとガンストは、家に帰って妻から、食料と水をもらってきて欲しい。

そのあとあの砂浜に行けよ。だがその前に、火事を止める方が先決だ。よろしいかな？」

カインたちは顔を上げて、すぐに火事の火を消すのを手伝った。

町の人も山から下りてきて、協力しあい、二時間かけて、火を消すことが出来た。

火を消し終わると先程言ったとおりに、二手に分かれた。イーザとギンとリーシャは、暗い洞窟をとおり船のある場所まで向かった。カインとガンストは、イーザの家の倉庫からありったけの水と食料を持ち、船が来るのを待った。

リーシャたちは船のある広い場所に着いた。

すごく大きな船だ。初めに乗ってきたものと比べ物にならなかった。人は最高で30人ぐらい乗れそうだ。

「これはドリーマーズ号。私が結婚するまで、使っていた船だ。ちゃんと整備されてあるから、いきなり沈むこともない。万全だぞ。」

「すごい大きい。本当にいいの？」

リーシャは驚き、また聞いてしまった。

「いいんだよ、リーシャ。君と君の仲間が、世界を救ってくれるなら。こんなことしか出来ないが、ありがたくもらってくれ。」

イーザは、カインたちが世界を救えると思ったらしい。

そして船に乗り込み、カインとガンストがいる砂浜へ向かった。

始めはイーザが舵を取り、リーシャが船の中をいろいろと見ている。

大砲が三つあり、大砲の弾は九つもあった。

キッチンもあり、料理が出来てみんなで食べられる部屋があった。

寝室ももちろんあった。二部屋しか見ていないが、さらに二部屋も

ある。最初の二部屋はとても広かった。

奥の部屋は個人で眠る部屋で小さかった。隅々くまなく探検し終えると、甲板に出た。

「うわあ。まぶしい。」

朝日の日差しがまぶしかった。手で陰を作らないと先が見えないぐら이었다。

そしてガンストたちが待っている砂浜へ向かった。ガンストたちはもう砂浜にいた。

イーザは船を降りて、ガンストたちが乗り込んだ。食料なども運び入れた。最後に四人はイーザに、別れを告げた。

「イーザさん。次にあつたときは、世界が平和になったときです。」

カインがイーザと固い握手を交わして、乗船した。

「父さん！僕、夢に一步近づいたんだ！これからもカインたちと一緒に夢を達成するよ！楽しみにまつてね！」

ギンの目は涙ぐんでいた。

「おじさん！またね！」

リーシャは元気よく手を振る。ガンストは何も言わず手を振った。

イーザも手を振り返してくれた。

それからあの島を離れて十分後……

雲ひとつない青空の中を進んでいると、島が見えなくなると、ガンストはあたりを何回も見回した。

「あつやば！航海士を探すのを忘れてた！！」

ガンストがとんと大声を上げた。リーシャもその顔色を隠せないでいると、後ろからギンが一言。

「なんだ。僕を誰だと思つてたの？」

僕はこう見えても、風向き、方角、潮の流れなんかすぐわかるんだから。この船の針路は任しな！」

ガンストはキョトンとしていた。カインは何となくそんな気がして

いたので、そこまで驚かなかった。

機械兵と戦う前、ギンの夢を聞いていた夢の内容が、世界地図を作ることだと聞いていたので、

この人は航海士もしくは地図測量士だと思っていた。

船の中でリーシャを探すと、リーシャはキッチンでフライパンや鍋、食材など調理器具を確認していた。

女の子らしいところは、あまり見られなかったリーシャも少しはあることがわかったのである意味ほっとした。

安心すると、急激に眠気が襲ってきた。

四人はイーザのいる島から少し離れた無人島で、碇を下ろし、昨日、いろいろと忙しくて寝れなかったので、そこでぐっすりと眠った。

第三章：結成！青髪海賊団

新しい船ドリーマーズ号を手に入れて、島を離れるとすぐ四人は、カチャカチャとこの船にいろいろ改造し始めた。

ガンストは、大砲を出す窓をもう少し大きくして、広範囲に攻撃できるようにした。

ギンは、リーシャが見ていなかった四部屋のひとつを豪快に改造して、自分の部屋にしていた。

リーシャも、四部屋のひとつを自分の部屋にしていた。

カインは、簡単な食料庫を作っていた。

カインは自分の仕事が終わると、ギンの部屋をのぞいた。

ギンは自分の持ってきた荷物から、出してはなにかゴソゴソとやっていた。

カインが話しかけた。

「何をしているんだい？」

ギンは、カインの方を向いて、手に持っていたものを見せた。

それはこの前倒した機械兵の左腕だった。

「ちよつとした発明をしようと思って、それでこの部屋をもらったんだよ。」

部屋を見るとスパナやドライバーなどいろいろな工具が落ちていた。設計図のような紙が机の上に広がっていた。

パーツは左腕以外にもゴロゴロ転がっていた。

頭の中で組み立ててみると、人のような形になった。

それに良く見ると、機械兵のパーツがほとんど全部だった。

「何を作ろうとしているんだい？」

ギンは、何かを作りながら答えた。

「僕は、ロボットを作ろうとしている。でもあんな兵隊じゃないぞ。人間と同じように、考えることが出来て、話すことも出来る。そんなロボットを目指して作っているんだ。」

航海士なのになんでこんなことをするのだろうとカインは考えた。

「何か手伝うことはある？」

ギンは横に首を振った。

「完成を待っててよ！さあ出てって。あと舵は任せた。天候も悪くないし、何かあったら連絡するよ。」

そのままカインは、部屋を押し出されてしまった。

次にガnstの方を見に行った。大砲の先を動かしやすいする窓の工事は、終わっていたようで、新しい船の床に寝転んでいた。

「ガnstのほうは、工事終わったのかい？」

カインが聞くと、ガnstはすつと起き上がった。

「おう、終わったよ。あー疲れた。もともと漁船だったのになんで大砲が付いてんだか？ギンとリーシャは何やってんだ？」

今度はギンとリーシャのことを聞いてきた。

「あいつは、アンドロイドを作るって、完成するまで部屋に入っちゃダメらしいよ。僕たち今、押し出されちゃったから。」

それを聞いてガnstは、耳を疑った。

「えっ！？おいおい、あいつは航海士じゃなかったのか？」

「よくわからないけど。きつと手先が器用なんだ。たぶんあの島に時、住んでた町でも何か作ってたんじゃないの？」

カインは、完成するのを少し楽しみに待っていた。

「それでリーシャは？」

ガnstはリーシャが何をやっているか聞いてきた。

「わかんないけど、ちよつと見に行く？」

ガnstはうなずき、ギンがいる部屋の反対側の扉をノックした。すると返事が返ってきた。

「ちよつと今入らないで！部屋が汚いから。」

女の子はデリケートなものだと思い、仕方なくリーシャの部屋から離れ、二人は甲板へ出た。

海を見ると、見渡す限り、青い海だった。穏やかな時間が流れた。

「そうだ！海賊旗にマークを入れようぜ！俺達のマークを！」

ガンストの突然の提案。しかし悪い物ではない。

カインとガンストは、船の旗を降ろした。二人はマークに悩み、時間をかけすぎてしまった。

「じゃあさ、今俺達二人だけだからさ。ドクロの右目にカインの青い色の目、その後ろに俺のマグナムの絵ってのはどうよ？」

カインは、他の二人には悪いような気はしているが、まあいいやと決めた。

「よしこれでいいな！」

旗と帆に先ほど提案したドクロのマークを描いた。

完成してわいわい騒がしくしていると、突然食堂からドタバタ音が聞こえた。

二人は顔を見合わせ、おそろおそろ武器を持って向かった。部屋に入ると一人誰かが倒れていた。ガンストがマグナムを向けて怒鳴った。

「誰だ！そこにいるやつ。ゆっくり立って、手を頭につける。」

その人はゆっくりと立ち上がった。すぐに誰だか分かったカインは、ガンストの持つマグナムを下ろした。

その人は、白いひげなのに、ちよつとほこりで黒くなりかけているが、間違いなくフロウだった。

フロウは魔法使いで、カインが海へ出る前に少し先の未来を見てもらった。ガンストとは会っていないかったようだ。

「誰だ。この老人は？カインのじいちゃんか？」

マグナムをしまいながら、ガンストが聞いてきた。

「ちがうよ。この人はフロウといって、魔法使いなんだ。この前、村であつたんだよ。でもなんで、こんなところにいたの？」

フロウは、白いひげについたほこりを払いながら話してくれた。

「カイン君、久しぶりじゃな。そちらのものは……ガnst君かな？
実はな、移動呪文で甲板に出るつもりじゃったがの。失敗して、こ
こに出てしまったようじゃ。動いているものに移動するのは苦手で
の。」

ガnstは、フロウに名前を言い当てられた。

「じいさん。なんで初対面の人の名前が分かるんだよ！」

カインのときもそうだった。カインも始めてあったときは、そう思
った。

フロウは、カインのときと同じようにガnstにも説明をした。

「それはじゃな、ガnst君。私は少し先の未来を見ることの出来
る魔法が出来るのじゃ。信じていないようじゃから、今見てしんぜ
よう。」

またあの時と同じようにうなり始めた。

「大丈夫か？このじいさん。」

ガnstは、フロウにあきれていた。老人の遊びかとも思い始めた。
「見えたぞ。もうすぐギンという者が、ここに来る。それとリーシ
ヤという娘が一度こちらにやってきて、すぐにキッチンに戻る。」
ガnstは、姿も見えないのにそういう名のものが、船に乗ってい
るということに驚いていた。

「何で知ってんだよじいさん！この船にギンとかリーシャが乗って
いるのを――」

話していると、廊下を走ってきてこの部屋のドアを思いきり開けた。
「フロウー！」

ギンが叫んだ。カインとガnstが驚いた。ガnstは当たったこ
とに驚き、開いた口がふさがらず、カインは逆にギンが、フロウの
名前を知っていることに驚いた。そのあとゆっくりリーシャがやつ
てきた。それをガnstは、一度確認した。

「なんでフロウの名前を知ってるの？」

カインがギンに聞くと、

「僕が小さいとき、そうだな……四歳くらいのときにあったことが

あるんだ。僕の父さんと、仲がよかつたらしくて、前にはもつと会っていただけ僕が生まれてからはあの一回きりしか会ってないけど、すごい特徴が多くて忘れられないんだ。魔法が使えたり、白いひげが目立つし――」

ギンはフロウに会えて、たまらなく抱きついた。

「もう会えないかと思いましたよ。」

「そんなことはない。会いたいという気持ちが強ければまた会える。そのことを忘れてはいけないぞ。」

フロウは笑いながら話してくれた。ガnstが大声で叫んだ

「俺が話してる途中に割り込むな、ギン！！でも何で、いるってわかつたんだ？」

たしかに、ギンは走ってきていた。

「それはね、初めはドタバタしたのが上から聞こえてね。こっちの方に歩いてきたんだ。フロウの声が聞こえたから、一気に走ってきたの？」

リーシャは詰まんない顔をして、部屋の扉からどこかへ戻っていった。もしかすると思いがnstは、部屋を出て、キッチンに向かった。到着すると、キッチンには、フロウの話したとおり、リーシャが料理を作っていた。

「リーシャ……なに作ってるの？」

リーシャは、フライパンの中身を見せた。中身の食べ物は、黄色いが、所々黒くこげていた。ガnstは今気づいたことがある。リーシャが料理が下手ということに気づいた。

「これから昼食にしようと思って、ご飯作ってるの。今、玉子焼き焼いてるから待ってて！」

ガnstは苦笑いして、甲板に出た。ギンは、さらに話を続けた。「フロウ！見せたいものがあるんだ。来てくれる？いいだろう？」

「よいぞ。連れて行っておくれ。」

ギンはフロウを連れて、あの発明部屋に入って行った。そのまま力インも一緒に入ろうとしたが、部屋に入るのを断られ、入れてくれ

なかった。カインは、ゆつくりと甲板に出た。ガンストがカインに向かつて話した。

「新しい島だ！島が見えたぞ。」

カインも調子上がり、

「よし、上陸だ！」

この船での初航海も終わった。カインとガンストは、協力して錨を下ろした。カインはギンの発明部屋へ向かい、声をかけた。

「島に着いたぞ！」

「やつとか。僕の島から出て、だいたい七時間ぐらいだから……食の町ジューバか。ま、それでもパーツはあるかな。」

ギンの地理的能力は、予想もなかったほどだ。

声をかけるとギンとフロウは部屋から出てきた。三人とも甲板に上がるとフロウが、三人に声をかけた。

「島へ行くのならば、船番を決めなくてはな。誰が行くのじゃ？」

三人とも行く気満々だった。

「フロウ。あんたに留守番をしてもらえばいいじゃないか？」

それを言くと、ガンストがフロウに指を指した。

「わしは、もうじき行かねばならぬ場所があるのだ。そこへ向かうのじゃ。うーむ……そうじゃな、よくじを使おう。一本だけ先端が赤くなっておる。赤いの抜いたものが船番をして、他を引いたものが町へ行け。これでどうじゃ？」

フロウの意見にみんなが賛成した。そして、みんなが引いた結果は、ガンストが留守番という結果になった。しづぶガンストは留守番をした。

「カイン、ギン、ガンスト。さらばじゃ。」

フロウは、再び移動呪文でどこか遠くへ飛んでいってしまった。

カインとギンは船を下りて、ジューバの町へ歩いて行った。

入って町を見回すと、いたるところにレストランがある。

ギンの言った通り、食の文化がとても強い島だ。その二十分後ぐら

いに、リーシャが甲板に上がった。

「あれ、みんなは？せっかく昼食作ったのに。」

イライラしていたガnstは、リーシャの顔を見るなり、

「あの町に行ったぞ。そうだリーシャ！ちよつと留……」

留守番を変わってもらおうとしたら、すでにリーシャはその場になかった。ガnstは自分の足元にあった、置手紙を見つけた。内容はこうだ。

「ご飯作ったから、食べてていいよ。キッチンにあるから。」

あたしは町に行ってくるから！船番よろしくね。

ーシャー

リ

「あ……つたくもう！」

ガnstは、再びイライラしながら誰かが、帰ってくるのを待っていた。

仕方なくキッチンに行って見ると、先ほど作っていた玉子焼きがあった。も

うそれは黒い焦げの塊になっていた。卵の黄色い部分が全くとっていいほど見えない。

一口食べてみると、砂糖、塩、唐辛子などの味が一拳にあふれ出た。ガnstは、すぐに水を飲んで、悲しくもその場に座り込んだ。

カインとギンは別々に行動をした。

ギンはアンドロイドを作るために足りないパーツがあるらしく、工場、パーツ売り場に行きに行った。

「なんだあれは？」

カインは坂道の途中で見つけたヤジウマのたかっているフランシエという料理屋の前で止まった。中をのぞこうとすると皿が割れる音

が聞こえた。カインは、がんばってヤジウマの間を切り抜けていった。切り抜けて、すっかり立ち上がって見ると、中で店長と銀髪のコックが喧嘩していた。喧嘩が、終わったと思うと、今度はコック同士でもめごとを起こしている。カインは、その店に入り、銀髪コックのもとへ向かった。カインが話しかけようとすると別のコックが止めた。

「今あいつに近づかない方がいい。あいつは今とっても腹の虫の居所が悪い。話したら俺が聞いてやるよ」

別のコックに止められてしまった。

「いや結構。止めてくれたのはありがとう。でも、僕が用があるのは、あの銀髪のコックだ。」

カインは止めてくれたコックから離れて、銀髪コックに話しかけた。「おい銀髪、何でもめてるんだ？」

カインが聞くと銀髪コックは、タバコに火をつけ吸い始めた。

銀髪のコックの特徴は、しっかりとした黒いスーツを着ている。その上にコックの服。さらにコック独特の長い帽子。それなのに耳には剣の模型のピアス、それと額に丸いピアスをしている。

「ここは客が入る場所じゃねえ。今すぐ出て行け！」
後ろの方から店長が怒った。

「ここは厨房だぞ！タバコを吸う場所じゃねえぞ。それに背中 of 長いのも捨てちまいな。いつもそれで連邦警察に迷惑をかけてるようじゃねえか？」

店長の声を無視し、銀髪コックは舌打ちして、厨房から出て行った。

「あーあ、出てっちゃったよ。」

コックの一人がぶつぶつ独りごとを言い出した。カインはそのコックに話しかけた。

「なあーあいつなんて、名前なんだ？」

カインが聞くと詳しく話してきた。

「あいつは、このレストランの店長とともに旅をしていたお方なんだ。昔は移動しながら、こういうレストランを展開してたみたいだ。」

けど、店長が年を取ったから、ここにちゃんと店を立てたんだ。始めは誰も近寄ってこなくて困っていたらしいよ。顔が顔だからね。それに喧嘩は毎日のようにやってるよ。それから―」

カインはうんざりしてきて別のコックに話しかけた。

「あの銀髪コックなんて名前なの？」

「んっ、あー今出て行った人の名前？あの人の名前は、アーガス。うちの料理長が、海賊のときに見つけた孤児だったんだ。今アーガスに近づかない方がいい。機械兵にいつも反発している。連邦警察にもうすぐ捕ってしまうぞ。きつと…」

カインは話を聞いて、すぐに店を出てアーガスを探した。

そのアーガスは、少し先で機械兵を見つけていた。

機械兵が攻撃してきたので、タバコを捨て、自分の背中に背負っていた長い剣で、機械兵を破壊した。

その爆発音を聞いたカインは急いでその方向へ向かった。

アーガスは、さらにもう一機壊した。カインが見つけたときには、二つの炎上が起きていた。

「アーガス。頼みがある。」

アーガスの気にさわったらしく、さらに怒りを増した。長い剣の刃先をカインに向けた。

「なんなんだてめーは、俺の店に入ってきたり、わざわざ追って来やがってよ。」

一体何の用なんだ。飯だったら、さっきのレストランへいけ！」

カインはアーガスに笑顔を見せた。

「いや、お前に用があるんだ。仲間になって欲しい。」

僕はこう見えても海賊なんだ。うちの海賊には、料理人がいなくてさあ、お願いだ！」

「断る！うちの店は、俺がいねえとダメなんだ。まず俺が許可してやっても、孤児だった俺を引き取ってくれた、あの店長に許可をもらわねえとだめだ。」

アーガスは、頭から煙が出るくらい怒っていた。怒りながら、レス

トランへ戻っていった。アーガスを追いかけていると、誰かと肩がぶつかってしまった。

「すいません。」

ぶつかった人にカインは謝った。相手はウエスタンハットを深くをかぶり、黒いマントで体を纏っていた。

それに少し変わった形の刀を持っている。その人は声もかけず、逃げるようにどこかへ行ってしまった。

カインは再びアーガスを追いかけた。その途中でギンに出くわした。「ギン、なんだその荷物？」

「これか？これは僕が発明中のアンドロイドのパーツだ。分けてもらおうと思ったけど、無理みたいで、ちょっと高かったけど奮発して買ったんだ。僕は、そろそろ船に戻るけど、カインはどうする？」カインはアーガスがそんなに離れていないことを確認した。

「いやまだいるつもりだ。それだったら、ガンストと代わってあげてくれないか？」

「そうだな！じゃあ。」

そのまま荷物を持ち、船の方へギンは向かった。カインはアーガスを追いかけた。アーガスがレストランに戻ったので、急いでレストランに入った。今度はちゃんと客が座るところへ向かった。中にはリーシャがすでにいた。

「カイン！こっちくれば？」

リーシャが声をかけると、カインは、リーシャのいる席に座った。途中ウェイターが注文を聞いてきたのでカインはハンバーグを頼んだ。

そのあとすぐにガンストが腹を減らして、レストランに入ってきた。レストランに入ってきて、カインたちを見つけるとその席へ向かった。

ガンストはすぐに大きなステーキを注文した。

先にカインが頼んだ料理が出てきて、カインは先に食べ始めた。ガンストの料理はその五分後に届いた。ガンストが料理のおいしさに

感激した。

「うまい！なんてうまいんだこの店は！変なもん食ったせいかな。厨房でものぞいてこようかな？」

ガンストはペロリとたいらげた。立ち上がり、厨房へ入ってしまった。

また怒られると思ったカインは後追った。リーシャに止められたが、手を払い、ガンストが進む方へ向かった。

本当はアーガスに会いたいただがその理由を隠して向かった。ガンストはアーガスと話していた。

「いやーあなたの料理には感激しました。なんてあなたは名前なんだ？」

アーガスは照れを隠しながら、話していた。

「そんなにうまかったか？俺の名前はアーガスだ。そんなに感動してくれたのか？珍しい客だ。」

機嫌が直っていたみたいだった。二人が話している間にカインは入った。

「そうだろ！こいつの料理はうまいよな！」

カインも話しに加わった。途端に、アーガスが態度を変えた。

「またためーか、勝手に入ってくるな！」

そのまま店からつまみ出されてしまった。

今度は、レストランの料理長に話しに向かった。

リーシャもレストランから出てきて、一緒に付いて来た。

なんとしてもこれから航海のためにアーガスを仲間にさせてくれと、そう考えながら料理長の部屋へ向かった。

あけるとすぐさま、蹴りだされてしまった。すぐにドアは、閉められてしまい、壁に叩きつけられてしまった。

「大丈夫カイン？」

リーシャが、すぐに小さなバックからバンソウコウを取り出し、蹴られたところに貼り付けた。

料理長が部屋の中から大声で叫んだ。

「おいアーガス！おめー、いくら機械兵を破壊すれば気が済むんだ。もう捕まっても知らねえからな！」

どうやらアーガスと間違えられているようだ。痛いところを押さえながらカインはまたドアを開けた。

ドアが開くと、再び攻撃をしようとしていた。

「すいませんが、僕はアーガスではありません。」

声が届いたのか料理長の攻撃は止まった。

そのままカインとリーシャは部屋に入った。

「何のようだてめーは、全く客が勝手にこんなところまで上がってくるな。」

「すいません。話があるのですが……」

カインはおずおず話してみた。

「何のようだ、話してみろ。」

店長はかなりご機嫌ななめだ。

「自己紹介が遅れました。僕はカイン・F・ハルドと申します。」

「初めまして、あたしはリーシャ・V・トライデントと言います。」

店長は、リーシャの自己紹介を聞くと、リーシャの顔をずっと見っぱなしだった。

「アーガスをうちの海賊の仲間になつてもらおうと思ー。」

一言聞くと、店長の顔がピクピクしだした。少々気に障ったようだった。

「あゝ。アーガスを仲間になさせてくれだど……出て行け！今すぐ出て行け！」

言われるがままに出されてしまった。

同時にもう今日はだめだと思い、船に戻った。

「ただいま！カインは今戻りました。」

「リーシャもね。」

甲板には誰もいなかった。日はだんだんと暮れてきた。カインとリーシャは、ギンの発明部屋をノックした。

「ドアを開けていいかい？」

と聞いた。ギンはすぐにドアを開けてくれた。

「見てくれよ。これが今の今まで作っていた、正義のアンドロイド。名前はそーだな、よしゴレムだ。」

「ゴレム？何でゴレム？」

リーシャが名前に不思議がつていると

「ゴレムって言うのはゴーレムって言うモンスターを揅った名前だ。大きいし、あつてるだろ。」

ギンは完成に感動していた。

そのアンドロイドは高さは余裕で人の身長を超えている二メートルから三メートルくらいはあるだろう。

顔は人間に似せた顔をしている。腕は何でも壊すことが出来そうなのでも力強そうだ。

足でしっかり立っていて、空も飛べそうな気がする。

「あとリーシャの武器も作っておいたよ。これだよ。」

リーシャは１メートルくらいの長い棒を投げ渡された。

「これはどういう武器なの？」

聞くとギンは、こう教えた。

「この武器は、名前をバトルロットとつけた。丈夫で、なるべく軽めにつくつてある。それに４つに分けて、小さくしまつことも出来るお手ごろな武器だ。」

リーシャは自分の武器を手に入れて喜んでいた。

「ギンありがとう！これであたしも戦えるね！」

御礼を聞くと、ギンは凄く小さな板を取り出した。

「いまからこのチップと呼ばれるものをゴレムに入れる。このチップは人工頭脳の役割を果たす。それで自分で行動が出るようになる。もちろんしゃべることも出来る。でも本当に出来るかは分からない。なんせ初めて使うからな。」

そういうとその機械の脳となるチップをカインに渡した。

「なんで僕に？」

カインはなぜ僕に渡すんだと思った。

「船長としてやって欲しいんだ。僕は君が船長だって認めてるから、頼むよ。」

この僕が船長……。だが言われて悪いものではない。そう思うと機械の頭にチップを入れるときがきた。

「よ！船長！気合入れてね。」

リーシャが軽いプレッシャーを掛けてくる。

「お……おう。」

ドキドキしながら、頭のはめ込む部分に、カチツとはめ込んだ。すると機械は動き出した。

機械は自分で頭にカバーをかけた。

「ここは何処だ？私は誰だ？」

機械がしゃべりだした。操作もせずに自分の考えで話している。

「成功だ！」

ギンは感動のあまり泣き出した。カインはアンドロイドに話しかけた。

「僕の名前はカイン。この船の船長だ。君の名前はゴレム。ここは船の船室のひとつ。」

アンドロイドがどんな反応をするのか怖かった。

「私の名前はゴレムと言うのですね。初めましてカイン船長。そちらの喜んでいるお方とそこにいる人は？」

すごい。この発明は成功している。機械は記憶することも出来て、考えることも出来ている。

ちゃんと質問の答えを出してあげないと悪いとカインは思った。

「この人は、ギンといって君を作り出した人、こっちは仲間のリーシャ。」

「チーッス！」

リーシャはいつもの挨拶をした。

「ちーっす???」

ゴレムが疑問を持ったところでギンは、そのことに説明をした。

「ごめん。実は解析能力が弱くてね。基本的な言葉は解析できるん

だけど、他がね。

これから機能をどんどん増やそうとおもっているよ。時間がかかるからもうちょっと待ってね。」

まだゴレムは語をぜんぜん知らないようだった。

こうしてゴレムが仲間の一員となった。

完成に沸きあがっていると突然、食料庫からドタバタ音が聞こえた。ギンの部屋を出た。ねずみが出たのか思い、刀をもって、食料庫へ向かった。

するとそこには、先ほど町で肩をぶつけた深い帽子をかぶっていて黒いマントを着ているあの男にであった。

「誰だ！お前は？」

するとなぞの男は、口をもごもごしながらこちらに振り向いた。その人は食料庫で食べ物を食べていた。よほど腹が減っているらしい。

「んっが!？」

食べ物を食べながらこっちのことに気づいた。そのせいで食べ物のどに詰まらせた。

それが通ると、まだモグモグと口を動かしながら、床に置いた変った刀を取り出した。

その男の姿は、遠くから来た旅人のような格好をしている。その男はすぐにその武器を構えてきた。

カインが今もっている、刀に気づいたらしく、構えてきた。カインは刀を床に置き、手を上げた。

「別に争うつもりはないが……なんでここにいるんだい？わけを話してくれないか？」

まだ口をモグモグしているが、後ろの方に指を刺した。後ろにはリーシャが、さつきも

らったばかりの武器を持っている。

「リーシャ、武器を下ろしてくれ。この人はわかってくれる。」

リーシャが武器を床に置くと、謎の男も刀を下ろした。

やっと食べ物を飲み込み、立ち上がって、話しかけてきた。だがまだ腹が減っているらしい。

「勝手に侵入して悪いが、腹が死ぬほど減ってたんでな。……そうだなざつと五日間は食べてねえ。水だけ飲んで今まで生きてきた。もう少し食っていいか？」

カインはとりあえず許した。

そう言う謎の男は再び座り込み、食べ始めた。

カインが名前を聞こうとすると、ガンストが船に戻ってきていた。後ろにはアーガスもいた。

まだ話を続けているらしい。アーガスが、カインに気づいた。

「またてめえか。うちの料理長のところまで来たらしいな。一体何の用があるんだ。しかもなんでここにいんだ！」

アーガスが疑問に思っていると、ガンストは後ろ方で、食べ物をガツガツ食べている人を見つけた。

カインも振り向くと、帽子を取っていた。さっきは、深くかぶっているのをあげて、食べていた。

髪を見ると真紅のように綺麗に紅かった。するとアーガスが叫んだ。

「おいてめーは、店にいた紅髪じゃねえか。五日前に食べた料理の代金が、まだなんですけど！今払ってもらえますか？」

アーガスはさらに怒った。すると紅髪の男は爪楊枝を使いながら、
「んっ？あーその話ならこいつが払ってくれるって。」

そういうとカインに指を刺した。抗議したが、負けてしまいカインはしぶしぶ払った。

「まいどあり。じゃ俺は、一回帰るかな。ガンスト、また明日な。」

ガンストに言い残すとタバコを吸いだし、船を飛び降りた。赤髪の男は満腹になったらしく、帰ろうとしていた。

「さーて帰ろうかな……と行っても行くところねえから、この船に止めてくれ頼む。」

カインは赤髪の剣士に聞いた。

「そういえば、君の名前はなんていうんだ？それにその刀は一体なんだい？」

カインは赤髪の男に聞いた。のどを二度うならせて話した。

「んっそれでは全部の質問に答えよう。俺の名前はライル・ダグニル。ライルと読んでく

れ。続いてこの武器のことだが、我が国に伝わる武器でエクセルドライバーと言う。あ

とおめえらの名前は？」

カインはライルの話す全ての話を聞いて、返答した。

「僕の名前は、カイン・F・ハルド。こっちはリーシャ。

で甲板にいるのがガンスト。あと下の一室にいるのがギンだ。それに刀を見せてくれないか？」

ライルに刀を見せてもらった。

カインの斬鉄剣のようにDESSERTと彫られていた。

刀をライルに返し、ライルに大部屋で寝るならいいと言った。

ライルはそれを認め、大部屋にすぐさま向かいハンモックに横になると、すぐ眠りについてしまった。

ギンは、まだ部屋でゴレムの調整をしている。リーシャも自分の部屋に行き、寝てしまった。

夜になって、カインは、甲板でガンストとコーヒーを飲みながら話していた。

「なーカイン。俺はあのコックをこの船のコックにしたいと思うんだけど。つまり仲間にな

って欲しいんだあいつにな。君はどう思う？」

そのままカインにふった。

「僕は……確かに仲間にはなって欲しいと思う。あれだけの腕があれば、きつとみんなの舌を喜ばすことが出来る。

それに僕は、ライルにも仲間になって欲しいと思う。たぶん彼は、凄腕の剣士なんだ。

腕になんらかの傷跡があつたんだよ。明日その話してみようと思うんだ。

あいつがどんな条件をつけてきても、乗り越えてみせる。」

カインは、どうしてもライルを仲間に入れたいみたいだ。

ガンストは、アーガスをどうしても仲間になりたい。

そんなこんなで話し合いが終わり、大部屋に二人は向かって、ガンストは、ハンモックで眠り、カインは床で眠りについた……

次の日の朝

事態は急変していた。

ガンストはどこかで起きた爆発音で目を覚ました。

船を下りて、町へ行ってみると、町の民家は破壊されていて、残りの民家、店はまだ破壊途中だった。

海を見渡すと昨日はなかった大型の帆船が、海岸に止まっていた。カインたちの船は、別のある砂浜に止めていたため、ばれてはいなかった。

あわててガンストはみんなを起こした。リーシャの部屋のドアとギンの部屋のドアをノックして、最後に大部屋へ向かった。

「みんな起きろ！海賊が島を襲ってるぞ。」

みんな寝ぼけ眼でガンストを見ていた。

「海賊だって？どこにいるんだい？」

「僕らのことか？」

ライルとギンは寝ぼけ眼で話した。すると町の方で爆発音が聞こえた。

その音で、完全に目を覚ました。町の人々は、逃げていると思う。五人と一機はあわてて船を降り、急いで町へ向かった。

戦略として攻撃組のカイン、ライル、ガンストと非攻撃組のギン、ゴレム、リーシャの二手に分かれた。

カインたちのほうの町の状態は、町の半数の人が捕まっていた。その中には、あのレストランのコックもいた。だが、アーガスと店長の姿は見えない。

相手の海賊の下っ端が大声で怒鳴っている。

「これでこの町の間人は全部か？」

「まだいるぞ！」

「ああ？」

そのときだ。アーガスが建物の上から飛び、真っ先に団員を殴った。「ったく、これだから海賊は。みんな今すぐ助けてやるぞ。」

それから町の人たちを縛っていたロープを切ると、町の人々は海賊がいない方向へ逃げて行った。

さっきの団員は、仲間を集めている。一声かけると、あつというまに二十人から三十人ぐらい集まる。

「あのコック。この荒れ果てた海賊にでしゃばるなんてな。」

それを見るとライルは刀を抜き、団員たちに向かって、攻撃を仕掛けた。団員を二人、三人と斬りつけた。

「てめえは、いつかの食い逃げ野郎。」

アーガスは、自分の持つ長剣で攻撃を開始した。

カインにとって、機械兵以外、人に攻撃するのは初めてだ。

初めはつい恐れてしまい勇気が出ず、攻撃をすることができなかった。

豪華な家の奥から、この海賊のボスと幹部みたいな人が二人出てきて大声を上げた。

「町のやつらを捕まえろ。生け捕りにしろ！機械皇帝様に送ってやれ。ジャマなやつらをとっと倒せ！！」

敵のボスらしき人物が大声を上げると、団員たちはいつせいに大声を上げた。

アーガスはその海賊たちを見下していた。

「あんたらに捕まえるやつなんて、この町にはいねえ！」
敵の海賊たちは怒り出した。

「ふつ。われらギザヴェルグ海賊団に勝てるはやつは、ここにはいない。」

そいつらもすぐに死んでしまうさ。おい、ガーベラ！やつらのとどめをさせ。」

ボスが指示を出すすとガーベラという女性は、ショットガンを取り出し、アーガスを狙った。

アーガスを狙ったことに腹が立ったガンストは、すぐさまマグナムを取り出した。

それをガーベラに向けて銃弾を放った。銃弾は見事命中して、ガーベラはショットガンを落としてしまった。

「あんた何すんの！ジャマしないで。ジャマするとあんたもただじやすまないよ」

「俺が仲間にしたいやつを撃とうするなんて許さない。」
ガンストはさらにもう一丁出して、乱射した。

数発は団員などにも当たったが、残りは家の窓などに当たってしまった。

ガーベラが伏せたところを見て、ガンストはガーベラの腕をつかんだ。

その頃カインは、やつと勇気を出し、ついに斬鉄剣を手にした。

特訓で大木を切ったときと同じ構えをして、目をつぶった。

カインの耳にはまた様々な音が、町のあちこちから音が聞こえる。

じつとしていると町に突風が起きた。カインはその瞬間目を開けた。その風を使い、凄まじいスピードで、敵の団員を次々となぎ倒していく。

刀をしまったとき、斬られた人は、次々と倒れていった。それを見て、ギザヴェルグ海賊団のボスが、怒り始めた。

「弱いやつらめ、デバイド！お前の出番だ。」

すると家の奥の暗いところから、また一人出てきた。とてつもなく猫背だった。

その猫背の男の武器は、鉄の長い爪を両腕に装備していた。

「こいつは、ネコよりすばしっこいかもしれないな。気をつけろよ。」

と、ギザヴェルグ海賊団のボスは言い残すと、すぐデバイドというものは見えなくなってしまうた。いなくなっただと思っていたらカインの服に傷跡を残した。

「なんだこれ、速すぎる。」

戦闘に苦しんでいるカインたち。

一方別の場所で、ギンとゴレムとリーシャは、相手の船を攻撃していた。

ギンはゴレムに武器としてハンマーをプレゼントした。重さは百キロ以上あると思われる。ギンはゴレムに話した。

「いいかゴレム。そのハンマーで、あの船のそこに穴を開けろ！僕とリーシャは、船員の相手をしているからいいな？」

そうゴレムに言つと、ギンとリーシャは相手の船に乗り込んだ。

ギンとリーシャは、船に残っている数名の団員たちの相手をした。

ギンは長い槍を振り回して、攻撃をした。

リーシャは、両手で武器を構えていた。相手から攻撃をされるが、すぐに反撃が出来るような体制を取っていた。

だが相手は思ったより強くなかった。ゴレムは船の底のほうに走って向かった。

そして一番そこにつくと、ハンマーでバンバンと何度もたたいた。殴り続けることで、船底にだんだんとひびが入り、割れると海水が入り始めた。急いでゴレムは甲板に向かった。

甲板に出ると、ギンとリーシャは、すでに船の外にいた。

「ゴレム！良くやった。こっちにこーい。」

手招きをしてゴレムを呼んだ。ゴレムがギンのもとにつくと船はブクブクと泡を立てて傾いてしまった。

「よし、カインたちのところへ行こう。大変かもしれないからな。」
急いでギンたちは、カインの元へと急いだ。

その頃カインたちのほうは……

ライルは敵を追い払い、やっと幹部たちと戦える状態になった。

「雑魚どもは片付けた。そっちはどうだ？」

ガンストはガーベラを縄で木に縛り付けた。

「こっちも一人、幹部を倒しましたで。」

アーガスは追い払うのに苦勞していた。カインは、すばやいデバイスと対戦していた。

本当にすばしっこかった。ネコどころかチーターよりも速いかもしれない。

カインは全く手が出せずにいた。

急に走るのをやめて、民家の屋根の上に止まった。

「どうした……青いの？まさか攻撃できないか？」

カインの服には血が染み付き始めた。傷は浅いが何箇所もやられている。

そして再びデバイドは攻撃を仕掛けた。カインはもうだめかと思っただが、ライルがデバイドの攻撃を阻止した。

「だめなやつだな。カイン。」

カインにこう言うとライルは反撃に出た。

デバイドは軽く当たっただけで軽く吹っ飛んでしまった。

スピードは速いが、体重が軽いため、防御力がとてもなく弱くなっている。

アーガスは、相手のボスと話し合っていた。

「さっさとこの町を去れ。でなきゃ斬るぞ。」

「ならば、ガキよ。お前を救ってくれたあの料理長が、どうなってもいいのか？」

一番の反逆者としてもう船へ運ばせてある。追いかけるなら、今のうちだぞ。」

アーガスは脅しだと思ったが、周りを見てみると料理長の姿、声は全くない。

「くそ…あとは頼んだガンストたち！俺は、料理長を助けに行く！お前らは、戦い続けていてくれ。」

そういうとアーガスは全速力で走っていった。ガーベラを木に縛り終えるとガンストは、再び戦闘へ参加した。

その代わりに、カインが後ろへ下がった。

「俺が相手だ。キザヴェルグ海賊団船長、この私ロズが相手しよう。」

大きな金棒を持ち、ガンストに向かって叩き突けてきた。地面がへこんだ。相当深くへこ

んだ。ガンストは一瞬足がすくんでしまった。

マグナムで狙い撃ちをしようとするが、させるかと言わんばかりにすぐ金棒を振って邪魔をする。

重そうな金棒を軽く振り回している。カインは一番痛みのある肩を抑えながら、後ろへ下がった。

アーガスが走っていると、ギンたちとすれ違った。アーガスは、ギンたちに話を聞いた。

「すまないが、あの海賊団の船はどこにある？教えてくれ！それに何だ？そいつは…機械兵か？」

ギンがすぐに答えた。

「ちがうよ！こいつは機械兵じゃない僕が作り出したちゃんと考えることが出来て、話すこ

とが出来るアンドロイドだ。船ってあの海賊団のかい？それだったら今沈めてきたよ。何か

問題でもあったのかい？」

アーガスはその言葉を聞いて、力が抜けた。長剣を落とし、ひざが地面につき前に倒れた。

アーガスは言葉に出さず、うそだろ…うそだろ…と思っていると後ろから、

「なにやってんだ。アーガス。速くてめえも逃げる。俺が戦いに行く。あんたらも避難所へ逃げろ！」

ギンたちの後ろに料理長がいた。それを見て、アーガスは一安心した。

「料理長さん、安心してください。僕たちが、あの海賊団をつぶします。」

「そうだよ！あたしも戦うから、見れたら見てね！」

その言葉を料理長に話すとまた走り出した。アーガスは力を取り戻し、料理長に話した。

「料理長。俺はこの戦いが終わったとき、戦ってくれた御礼としてあいつらの船で、料理を作る。

てめえになんと言われても、俺は行く。そろそろあんたとの契約も終えるしな。

俺はどれだけぼこにされても絶対行くからな。」

そう言つてアーガスはギンたちの後を追いかけた。料理長は、自らが持っていた武器を落とした。

料理長は走ることをやめ、歩いて自分の店の厨房へ向かった。

ギンとゴレムはカインたちが戦っている場についた。

まだロズは金棒を振り回している。大声で笑い始め、しゃべり始めた。

「これが懸賞金一千二百万の実力よ！どうじゃ！！」

ゴレムは、ロズが振り回している金棒を手で止めた。

そしてロズは金棒を持っている腕を動かすことが出来なくなってしまう。

ギンが槍を使い、ロズのもう片腕に乱れ突きをした。そして両方の腕が動けなくなってしまう。

続けてリーシャが、頭を思いっきり強く叩いた。カインは力を振り絞り、ロズの金棒を粉々に切り裂き、最後にガンストが、ロズの頭を狙った。

「これが青髪海賊団の力だ！」

すると、ロズの態度が急変した。

「やめてくれ。すまない。悪気はないんだ……全てあの機械皇帝様のためなんだ。許してくれ……」

ロズは見苦しく命乞いをした。アーガスがやっとのことで、この場についた。

息切れをしながら、アーガスは話し始めた。

「俺にとどめを刺させてくれ。」

頼むと長剣を取り出した。顔に向けて攻撃をした。みんなが目をつぶった。

だが切ったのは髪の毛だけで、顔すれすれだった。ゴレムが手を離すと、ロズはへなへな倒れてしまった。

みんなが目を開けると、首が切れたのかと思っていたが、どこも切れてなさそうだった。

「よしこいつをここの連邦警察の牢獄にぶち込んでやる。」

そういつてアーガスは、キラヴェグ海賊団を連邦警察に渡した。

懸賞金としてかかっていた一千二百万Jを受け取った。アーガスは、その半分の六百万Jを町のためにと置いていった。

カインらは、何かを思い出したかのように急いで船に戻った。

あのままあそこに残っていると今度は、自分たちがつかまってしまいかもしれないと思い、船へ戻った。

カインはガンストの肩を借りて、船へ戻った。一番最初にギンが船に戻った。次にゴレムが入り、その次にリーシャが入るとゴレムは、ギンの発明部屋へ行った。そしてカインとガンストが一緒に入り、甲板のマスに寄りかかった。

最後にライルとアーガスが入ってきた。アーガスはさっきの懸賞金

六百万を、カインたちに差し出した。

「これを受け取ってくれ。それと話がある。この俺をこの船のコックとして、仲間にしてくれ。頼む！」

カインたちはもちろん許可をした。この船にはまだコックは一人もいないし。

「あたしの名前は、リーシャ！ちゃんと覚えなさい！」

「悪いな。リーシャ。」

これで五人目の仲間アーガスが仲間になった。とすぐにライルが話しかけてきた。

「カイン、俺からも話がある。俺もある場所に行くまで、一緒に連れて行ってくれ。お願いだ。」

そういつて手を伸ばした。カインは笑顔を見せ、またその手を強く握り返した。続けて六人目の仲間ライルが仲間になった。

だが、ギンはライルの名前を聞いて少し疑問を抱いていた。船の下から声がした。下には料理長がいた。

「おい、アーガス忘れ物だぞ。」

と謎の包みを投げた。

包みを広げると、包丁のセット一式と手紙が入っていた。

「せいぜいうまいもの作れよ。元気で生きろよ。俺より先に死ぬんじゃないぞ。」

てめえの

レストランの料理長より」

アーガスの目には涙がたまっていた。

「ありがとな…料理長…」

アーガスは料理長には聞こえない声でお礼をぼそぼそと言った。カインたちの船が見えなくなるまで手を振ってくれていた。

カインはリーシャが包帯を巻きながら甲板にライルとアーガスを呼んだ。

「ここで二人に聞く。二人に夢はあるかい。」

ライルより先にアーガスが先に口を開いた。

「そうだな。天下一のコックになってよ。あの料理長の舌の楽しませてやることかな。」

それを聞いたライルは、なんだそんなことかと、黙ってその場を立ち去ろうとした。

「おいっ！剣士。てめえの夢は何なんだよ。」

「この場じゃ言えねえ。だがいずれ話す。」

ライルは、大きな船室に入って行った。ライルが出て行ったかと思つと、続いてリーシャがアーガスに話しかけた。

「あのさあ、気になってたことがあるんだけど、料理長の名前ってなんていうの？」

リーシャが聞くとアーガスは、黙り込んで考えてしまった。

その後も答えは出ることはなかった。

第三章：結成！青髪海賊団（後書き）

更新遅れてすいません。

楽しく読んでくれている方がいてくれれば、嬉しいのですが……
相変わらずの文章で書いてます。

はぁ……

第四章：一夜の決闘

島を出て、アーガスはカインの作った簡易冷蔵庫を弄り始めた。その中を見て、度肝を抜かれたような声を船中に響き渡った。

いろいろと作業をしていたカインたちは一斉に集まった。

「どうしたんだよ！」

「こんなんで本当に俺が必要なのか？」

そういうと、アーガスの後ろにある冷蔵庫の扉をガラツと全開した。中身はほぼカラと言っていいほどのものだった。

それには船員も全員絶句した。アーガスはカインに正座させ、説教を始めた。

「い、いやあ。二人を仲間にするこただけに没頭してたから……つい

……」

「この前、海賊を倒したときの褒賞金は？」

「半分じゃ足りないかなと思って、全部置いてきちゃった……」

カインはなんとかアーガスを怒らせないように言った。

「金も食糧も無く、旅をしようと考えたなお前ら……」

「ど、どうしようかね……」

「とりあえず、釣りでもしてろ！それに次見えた島が大陸で船を止めるぞ。」

そう言つて、釣竿二本とエサを渡された。

アーガスは食堂の椅子にもたれながら、溜息をついた。

「ということ、ライルも一緒に釣りでもしようぜ。」

嫌だの無理だのと言われながらも、無理やりライルを釣りに誘った。カインは針にエサをつけ、針を海に投げた。

ライルも続けて投げた。

ポチャツと言う音が聞こえると、暫く沈黙の時間が流れた。

何時間、釣りをしていたらどうか……

全く当たりが来る気がしてこない。

時々上げてみるが、エサはまだ付いている。

「こんなんで釣れんのか？」

「やってみなきゃわからないよ。」

「やってみなきゃ……もう何時……」

話していると、ライルの竿に物凄い強い引きが現れた。

これはとライルは思い切り竿を引いた。

「凄いぞ！！がんばれ！！」

「だったら網を用意しておけ！」

カインはコクツと頷き、網を取りに行った。

ライルは右に左にと魚を疲れさせようと、動かした。

「畜生、でかい魚め！！」

そして無理やり、竿を引いた。竿のしなりは限界を迎えていた。

ついに魚の頭が、海面から出た。

鮪のようなでかい魚だった。

「こりゃあいい！！」

声を出しながら、目いっぱい力で魚を引き上げた。

甲板に魚はたたきつけられ、ついに魚との戦いを終えた。

カインはようやく網を持ってきた。

「おお！！すげえでけえ！！」

カインの率直な感想が飛び出た。本当に鮪のように馬鹿にでかい魚だった。

「どうだつてんだ。」

二人の大きな喚き声が聞こえたのか、食堂からアーガスが出てきた。

「おーこれは良い魚だ。すぐに調理するか？」

「頼むぜ。」

二人はウキウキと心弾ませながら、三人がかりで魚を抱えて、食堂へ運んだ。

食堂のテーブルに魚を乗せると、アーガスは包みの中から、一際長

い包丁を選んだ。

「これが一流コックの裁き方よ。」

アーガスはダンスをするかのように魚の頭、魚の尾、三枚と次々と切り分けた。

見とれているうちに一品完成した。

「まずは刺身だ。」

そう言われて、食べ始めると再びアーガスは料理を続けた。

流れてくるようにリーシャたちもやってきて、いつのまにかパーティー状態になっていた。

食事を終え、それぞれの腹は満たされていた。

アーガスが地図やコンパスを見ながら、包丁を研ぎながら話した。

「一日、一日の釣りじゃ、今は満たされても、後が続かない。」

ということとで明日の朝には到着する無人島で食料採集をしてもらう。

それにこの島、面白い噂も流れてるんだ。」

「面白い噂？」

その言葉にガンストは引つ掛かった。

「そう。この島には今でも生きていると噂される悪魔と謳われる海賊の宝が眠ってるって話だ。もし見つければ莫大な財宝の山だ。でもなんでここに埋めたんだっけな？理由は昔聞いたことあんだけど、忘れちゃったぜ。」

「そんなことはどうってことねえ。とりあえず、その宝を見つけて一儲けしようじゃないか。」

ライルもその話に乗っかり、地図を剣で机の上に串刺しにした。

カインも口には出さないもの、心の中ではわくわくしていた。

「でもさ、危くない？」

急にギンが盛り上がっている場に口を挟んだ。

「何がだ？」

「だって、悪魔と謳われた海賊でしょ。もし誰かいたら、それはもう危険じゃ？」

「その海賊が流行ったのは、今から四、五十年も前の話だ。今生きてたつて、老いばばかりだよ。それにメインはこれからの食料採集だから。」

アーガスがそういうが、信じられないといわんばかりの表情を浮かべた。

「まあ、お前はゴレムと一緒にいろよ。それなら安心だろ。」

ガンストがマグナムの銃弾を軽く宙に飛ばしながら言うと、ギン是不機嫌気味に頷き、食堂を出て行った。

そんなつまらない話に一言もリーシャは口を出さずにいて、ついには欠伸まで出てしまった。

「そろそろ眠くなってきたから、部屋に行くね。」

リーシャはそういうと、食堂をそそくさと出ていった。

「それじゃあ俺たちも寝るか。後の話は明日。」

そういつてアーガスは食堂に残り、そこで眠りに着いた。

ライルは外にある舵を握り、船の針路を取った。

二人は大部屋へ行き、ハンモックの上に乗って眠りに着いた。

カインが眠ったのを見ると、ガンストはふと起き上がり、リーシャの部屋の前に立った。

暫くの間、扉をノックしようか、しまいかでおどおどとしていたが、小さな物音が聞こえ、トイレに向かった。

トイレに入り、すぐ出るとライルと出会った。

「なあ、そろそろ交代してくれ。」

「わかった。」

そういつて二人は入れ違いにライルは眠り、ガンストは舵を握った。

次の日の朝、船は無人島に到着していた。全員は目覚めると、再び食堂に集まった。

「それじゃあ、二人一組になって行動ということ、カインとリーシャは果物や野菜を、ガンストとライルは肉を、俺とギンは船で魚を釣る。夕方には此处に帰ってくることに。」

アーガスの意見に納得すると、それぞれに行動を始めた。

四人が船から降りると、船は砂浜を離れて、沖に出た。

四人もそこから二手に分かれて、島の中に入っていた。

この島には人の気配は少しも感じられず、鬱蒼としたジャングルになっていた。

「ここなら沢山獲物もいそうだな。」

ライルが夕飯のことを想像し、涎をたらしながら笑っていた。ガンストはライルを無視した。

「さつさと、捕まえようぜ。でかいのをよ。」

ガンストは先頭に出て、ジャングルの中を突き進んでいった。

カインたちは二人とは別にジャングルの中に入っていた。

「なんか食べられそうなものはあるか？」

掌で影を作り、成っている木の実を探した。

いくつか見つけるが、木を昇るうにも滑りやすく、うまくいかなかった。

リーシャも下を見ながら探していると、何かを見つけ、咄嗟に体がかがめた。

「ねえこれは？」

「ん？」

リーシャの指差すものを見てみると、それは余りにも毒のありそうな茸だった。

「それはダメだよ……」

「そうなの？じゃああれは？」

またリーシャは同じような茸を指差していた。

「色の悪い茸より甘くて美味しい木の実を探そうよ。」

そうリーシャに説得し、木の実の搜索を続けた。

暫く何も取れないまま、ジャングルの奥へ奥へと進むと、またリーシャは声を上げた。

「ねえ、何かあるよ。」

「また茸か？」

と振り向いて見ると、そこには頑丈な鎖があった。

それを見た途端、さつとリーシャを自身の背中後ろに隠した。辺りを警戒するが誰もいない。

「こつち行つてみよ。」

リーシャは鎖が続くほうへと足を進めた。カインは止めることもせず、一緒に鎖を追った。

鎖はどんどん急な山を登っていく。それを伝いながら二人も登っていく。鎖は山の天辺に到達すると、なくなっていた。

「良い景色――！」

島の頂上から見る景色は、辺りの海を見渡せる。

沖に浮かんでいる小さな船はたぶんアーガスたちが釣りをしている自分達の船だろう。

山頂には見たことの無い大樹が一本だけ生えていた。景色に見とれていると、後ろから何かが飛び掛ってきた。

カインはそれに気づけず、押し倒されてしまった。

「なんだ――！」

グルルルとキバをむき出しにした大きな獣がこちらを睨んできていた。

立ち上がって、斬鉄剣を鞘から抜こうとすると、リーシャに止められた。

「危な――！」

危ないというつもりだったのだが、リーシャはゆつくりとその獣に近付き、優しく頭を撫でていた。

「大丈夫だよ。危なくない。ここの毛、柔らかくて気持ちいいよ。」

リーシャは獣の毛を優しく撫でていた。大きな獣もむき出しの感情がなくなっていた。猫のようになっていた。

カインがホッと一安心していると、急に体が浮いた。

獣がカインの服をかねで持ち上げて、自らの背中に投げ上げた。獣の背中にはすでにリーシャが乗っていた。

「カインも疲れたでしょ。ダンララに乗って、木の実探しに行こ。」
「ダンララって？」

「この子の名前。可愛いでしょ。」

カインはあっけに取られてしまった。

だけど、この獣のお陰で取りづらかった木の実が簡単に取れるようになった。

それに森中の獣がいろいろなところから木の実を持ってきてくれた。夕方になる前に十日分、それ以上の量を取っていた。

「沢山取れたのはいいけど、ここはどの辺りなんだ？」

「どこなんだろうね？」

二人はダンララに任せて、木の実を取っていたので、今どこにいるのか全くわからなかった。

「適当にあるいてれば、帰れるって。」

「そうだな。」

リーシャの言葉を聞いて、少し気が軽くなっていた。

そして日はだんだん暮れていった。

空には異様に赤い月が浮かんでいた。

一方、船では面白いように釣れる釣りを終えて、四人と約束した砂浜へ戻っていた。

砂浜で火を焚いて、バーベキューができるような準備もしていた。

「遅いな。なんで戻ってこないんだ？」

「迷ってしまったのではないだろうか？」

ギンとゴレムが簡易冷蔵庫に入りきれない魚をその火で焼きながら話していると、

アーガスが不意に呟いていた。

「悪魔……無人島……宝……なんか引つ掛かるな……」

「ギンさん。空を見てください。真っ赤な月ですよ。」

ゴレムの声にギンは焼けた魚にかじりつきながら、空を見た。それと同時にアーガス大声を上げた。

「思い出した……。お前等、武器もつとけ！」

アーガスは背負った長剣を手にした。

「どうしたの？」

「どうして悪魔がこの島に宝を置いたか思い出した。昔、売り出し中の海賊が悪魔の財宝を狙って、この島に来た。

昼間は動物も人懐っこくて、なんともなく財宝を探していた。だが夜になった途端、突然島が顔色を変えたんだ。」

「島が顔色を変えた？どういうこと？」

「この赤い月が出ている夜は島中の動物達が異常に暴走し、その海賊の息の根を一夜にして絶ったんだ。

その動物達の強さと島の迷いやすさを買って、悪魔が此処に財宝を残したんだ。」

アーガスが説明しているさなかにもジャングルから、目が赤く輝いているサル達は何十頭も出てきた。

鋭い牙を露にし、爪を立てていた。

「生き残るにはこの島からでなければねえ。あいつらが帰ってくるまで死ぬなよ。」

サル達を見ると、ギンはあわてて船へ戻った。

「ゴレム。戦うぞ。」

「はい。」

数匹のサルがキーキー声を上げながら、襲い掛かってきた。

アーガスは華麗に剣を振り、襲い掛かってきたサルを斬りおとした。だが、砂浜に下りているサルだけで三十頭以上、それに木の上にはそれを越える数がいた。

「畜生！！かかってこい雑魚共が！！」

動物の異常暴走はアーガスの言うとおり、島中の至る場所で起きていた。

「なんだこいつらは？」

数頭の巨大なヘビが二人の行く手を塞ぎ、赤い目で睨みつけていた。

「昼間はこんなのいなかったのにな。」

牙から垂れる唾液は、シューと木を溶かした。

「あの牙には触れるな。」

マグナムから銃弾を放ち、ヘビの腹を突き破った。だがヘビは恐れることなく、近付いてくる。

「まずいな。」

「道を開け！」

ライルはヘビを二等分に斬り、道を進もうとするが、まだうじゃうじゃとヘビは湧いて出てきた。

「こりゃあ、きりがねえな。さつさとかかってこいや。」

その一言でヘビは一斉に動き出した。

二人はヒョイヒョイと避けては、斬ったり撃ったりしてその場から逃げた。

カインたちのほうは…

ダンララが急に起き上がり、二人を地面に落とした。そのせいで集めた木の実はずっと落ちてしまった。

「どうしたダンララ？」

ダンララはさらに一回り大きくなり、鋭く赤い目を見せた。

「異常事態か？リーシャ下がってるよ。」

「うん。」

ギンに作ってもらったロッドを手にして、木の陰に隠れた。

カインは鞘から斬鉄剣を勢いよく抜いた。

「さつきみたくはいかないぞ。」

カインは真正面から飛び掛ると、簡単に手ではたかれ、木に背中から叩きつけられてしまった。

「まったく、馬鹿力が。」

今度はダンララから飛び掛ってきた。

カインは危ない爪を斬りおとそうと狙うが、爪が異常に硬く、斬鉄剣でも歯が立たず、硬い爪で思い切り引っ掛かれてしまった。胸を抑え、息を切らしながら、必死に立っていた。そんなカインの姿をリーシャは息を呑んでいた。

「お前の攻撃なんかでくたばってたまるか。」

その言葉を発してから普段のカインとは違う感じを漂わせた。

ダンララは爪を鋭く突きたてて、襲い掛かってくる。カインは背中の方へゆつくりと体を傾け、それは倒れる姿に見えた。

倒れながら爪の攻撃を避けて、相手の腹が見えると、そこに目いっぱい力の切り込んだ。

カインが倒れた頃にはダンララは痛みに着地を失敗し、その場でもがき苦しんだ。

「どうだ？」

ダンララは痛みに耐えて、立ち上がった。

カインも負けじと立とうとするのだが、思うように体が動かず、時間がかって立ち上がることが出来た。

「あんときのが相当きてるんだな。だけど負けられねえんだ。」

カインは動物にもゾクツとする気迫を見せた。その気迫にダンララはビクツと体を震わせていた。

「去れ。」

その気迫はリーシャに伝わっていた。怖くて腰が砕けてしまった。倒れたときにその手は何かに触れた。

「何これ？」

それは小さな箱のようなものだった。それをひざの上に乗せて、開けようとした。だがそれを見たダンララが急に標的をリーシャに変えた。

「てめえ!!」

必死に追うが、ダンララの動きの方が断然早い。

リーシャの隠れていた木をなぎ倒して、高い目の位置からリーシャ

をギョツと睨んだ。

それに怯えてしまい、完全に腰が抜けてしまい、動こうにも動けないでいた。

すると急にダンララがガフガフと言い出した。

それで動き止まってるのを見て、カインはリーシャを急いで別の場所避難させた。

「ここにいろよ。」

とどめを刺そうと、ゆつくりと近付くと、急にバックションと大きなくしゃみをした。

するとさっきまで出していた牙や爪を隠した。

「くしゃみ？　どういうことだ？」

斬鉄剣を鞘に戻し、腕を組んで考えていると、

だんだんと鼻がムズムズとして仕方が無く、ついにはハクシユンとくしゃみをした。

別に寒いわけではない。むしろ熱いぐらいだ。

「人の噂か……いや違うか……他に考えられるのは……」

指同士を擦っていると、砂のようなざらざらとした感覚が感じられた。

「花粉？」

カインはハツと思い、木の箱を持つリーシャを連れて、カインは遠くに見える山頂へまた登った。

また暴走するかもしれないダンララの手首に木のつるを巻きつけて、その場にいさせた。

「どうしてまた此処に来たの？」

「ちよつとな。」

カインは山頂に生える木の前に立った。

「この木だけ、ジャングルに生えてる木とは違う木なんだ。」

「だからどうしたの？」

「この木が、島中の動物達の暴走をかりたたせる原因なんだ。」

そういうと、精神を研ぎ澄ませ、静かに切り倒した。

木が倒れると、その衝撃で砂埃のように花粉が舞い上がった。

「これが原因だ。」

「でもどうして夜にだけ？」

「この木が夜行性なんだ。夜の間に花粉を撒く習性があるみたいだ。その箱貸してくれないか？」

カインは斬り倒した木の一部を切り取り、リーシャから借りた箱に入れようとあけると、そこには貝殻が山のように入っていた。

「リーシャ、集めてたのか？」

リーシャに聞くが、首を横に振るばかり。それを中に入っていた貝殻を全部捨てて、木の一部をしまった。

「そんなのしまつてどうするの？」

「色々調べてみたいじゃんよ、こついうのさ。」

「ふーん。」

簡単に足払われてしまったが、カインは木をさらにばらばらにして、花粉がもう出ぬように近くの深い穴に全て投げ入れた。

カインはその木の一部を、リーシャはカインが捨てた貝の中で一番綺麗なものを手にして、山を降りた。

山頂を下りると、まだまだ暴走している獣がいた。

二人は野蛮な獣から逃れながら、海岸へ何とか脱出した。

海岸には瀕死の状態の猿達が何十匹といた。アーガスらがやったと見える。

船の前でアーガスは二人を見つけた。

「早く船に乗れ！！出るぞ。」

その声を聞き、リーシャを背負い、海岸線を走った。

船に飛び乗り、二人が飛び乗るのを見るとアーガスたちも乗り、船を出した。

リーシャを背負って走ったカイン、野蛮になった猿と戦っていたライルとアーガスは、息を切らしバタバタだった。

「しかし、なんつう島だ。あんな猿とかよ……くそ……まだまだ弱いな……俺も……」

ライルは甲板に大の字に横になり、息を整えていた。

「そんなことはひとまず、置いて。お前等、食糧をどんだけ調達してきたんだ？」

アーガスのきれかかっている口調にカインは持ってきた果物を見せようとしたが、肝心の果物が無い。ダンララとの戦いで、どこかに落としてきてしまったようだ。

「俺とライルはこんだけの肉をもってきたよ。」

といって、簡易冷蔵庫を埋め尽くすぐらいの量をバツと見せられた。

「なかなかやるな。俺たちも水槽を埋め尽くすぐらいの量だ。多すぎて少し逃がしたくらいだ。」

三人の視線がカインに止まった。

「こ、こっちはいろいろと戦いで……それどころじゃなくて……でもこの暴走の原因と思われる木は持ってきたんだ。」

そういつて、木の箱を開けて、切り取ってきた木を見せた。箱を見るなり、三人の顔は一拳に変わった。アーガスはカインに問い詰めた。

「おいこれ、何にも入ってなかったのか？」

「ど、どうしたのさ？」

「これは宝箱だぞ。空っぽだったのか？」

「い、いや。貝殻が沢山入ってたよ。ね、リーシャ。」

そう言われると、リーシャはおもむろに拾った貝殻をアーガスに見せた。

「この貝か。じゃあもう宝は無かったな。」

「なんでそんなことが解るの？」

リーシャの疑問にライルが答えた。

「海賊の悪ふざけでな。後から宝を狙ってきた海賊たちに糠喜びをさせるもんだよ。まあ、五十年も前の海賊だ。もう取られてるに決まってる。」

ふーんとリーシャは感心していた。

四人は戦いに疲れて食欲も無くなり、シャワーを浴びると、部屋に入り、眠りについた。

食糧を取ってこれなかったカインには罰として一夜の間、監視をさせられた。

第四章：一夜の決闘（後書き）

文章が読みづらい点が何箇所もあったかもしれませんが。
読んでくださった方は本当に有難うございます。

第五章：バトルーナメント

一夜明けて、まだ暗いうちからアーガスはキッチンに立った。

カインとリーシャ以外の二人が取ってきた材料を使って、なべをコトコトと煮込み、フライパンで料理を宙に浮かしたり、料理を作り出していた。

おいしそうな匂いに釣られて、続々と目を覚まし、食堂へ集まってきた。

その声は見張りをしていたカインにも届いた。

「さあ食ってくれ！今日は鮪の刺し身、海鮮スープ。メインにライルたちの取ってきた肉のステーキだ。

食いたいやつはどんどん食ってくれ。まだまだあるからな。」

レストランだったら今手持ちの金を出しても足りないだろう、でも今じゃ仲間である以上タダだ。

皆は上品な料理に手を伸ばしづらかったが、リーシャが先陣を切つて、箸を伸ばした。

「おいし〜い！！」

その声を聞いて、いても立ってもいられず我も我もと箸を伸ばした。
「うっ……うまい。」

ギンは舌鼓にとっても感動していた。

今までなにを食べていたんだという気がしてくる。アーガスは外にいるゴレムの姿を見て、疑問が浮かんだ。

「おい。あのアンドロイドって何か食べるのか？」

聞かれるとギンはすぐに答えた。

「食べるよ、オイルをね。つまり…油だ。機械油。」

「そうか…じゃあ俺には作れねえな。」

アーガスはカインとライルに目を向けると、カインとライルはいつもの食欲とはいえ、相変わらずガツガツ食べていた。

カインはこの前の戦いでいくらか血を流し過ぎたため、血が足りな

いのか、たくさん食べている。

ライルはただ腹が減っているだけか、ガツガツ食べていた。

「二人とも食べすぎ。太っちゃうよ。」

時々リーシャが二人の食欲に怖がって声をかけるが、無視して食べ続ける。

アーガスは皆が食べ終えるまで、外でタバコを吸っていた。ボーッと空を眺めていると、渡り鳥が飛んできた。

この渡り鳥には新聞が積んであった。実はこの渡り鳥は渡り鳥新聞社という立派な企業、アーガスは渡り鳥に声をかけて、新聞を一部購入した。

「アーガス、何買ったの？」

リーシャが聞くと、買ったものを見せてくれた。

「新聞だよ！この辺りは渡り鳥新聞社飛んでるからな。レストランにいたときは、毎日読んでたぞ。」

アーガスが、新聞をめくりめくり眺めていると、一枚の古めのチラシが落ちた。

リーシャが見ると、心を楽しませるような知らせだった。リーシャはみんなにすぐこのことを伝えた。

「ねえ海賊バトルーナメントだって、みんなも出ようよ！あたしも出たいな。少しは強くなったと思うよ。」

ガンストは耳を疑った。

「海賊バトルーナメントって、あれは懸賞金がかけられている海賊団が主催して、多少名の知れた海賊に直接渡すんじゃないの？こんな新聞に挟むだなんておかしいぞ。」

アーガスは、リーシャからその古めのチラシをとり、黙読した。

海賊バトルーナメント大会開催！！

優勝賞金は三千万。

出場条件は、懸賞金がついていない海賊団だったら誰でも大歓迎！出場には百万を参加金として出してもらいます。チームの一人は狙

撃手がおすすめ。

ですが別に誰でもかまいません。

今回の種目は、狙撃対決・海賊対抗レース・コロシアムの三つです。

・出場選手は レースに三人。他は一人ずつの計五名です。

参加したい人は、開催地まで！

君の挑戦を待っている！！

開催地 デウバート島のスタジアムに来てください。

大海賊遊戯企画委員会 代表コルテウス

アーガスは一通り見たあと、みんなに説明をした。

「ほー今年はコルテウスが主催か。この大会も中々腕が上がったな。」

「コルテウスって？」

リーシャがアーガスに尋ねた。

「コルテウスは懸賞金五千万を突破した海賊の船長だ。銃と剣を巧みに扱うと聞いている。」

アーガスがリーシャに淡々と説明している中、それを聞いてギンが手を上げた。

「僕は降りるよ。こういうのには興味がなくてね。ゴレムと一緒に留守番してるよ。あと進路はここに行くんだったら、このまま西だから。」

と食事を済まして、ゴレムと一緒に自分の発明部屋へ帰ってしまった。

テールではカインとライルはまだ食べ続けていた。

「ってことは参加するのはこの五人で決まりだな。あとは誰がどれに出るかだ。」

ライルはこのチラシをフォークで机に突き刺した。爪楊枝で刃に詰まったカスを取り除きながら、指を指した。

「まあ俺はコロシアムに決定だけだな。」

「待てライル。勝手に話を進めるな。狙撃の競技は、もちろんガン

ストに出てもらうことになるけど……

問題はレースだ。誰が出る？」

カインもようやく食事を食べ終え、話に参加した。レースに誰が参加するといわれ、一人びしつと手を上げた。

「はい！あたし出る。」

あっさりとリーシャは決まった。カインは他に誰を出すか悩んでいた。

ライルの我が儘な声が流れる中、アーガスが口を開いた。

「言っておくがこのゲームにはルールがない。つまりなんでもありだ。」

殺される可能性だってあるってことだ。だからレースで足が遅くても、相手に妨害をすることで、勝てる場合もあるんだよ。

コロシウムは、残った三人で誰が一番強いか決めればいいんだ。」

アーガスが話していると、ライルがやっぱり俺が一番みたいな顔をして、立ち上がった。

「コロシウムはカインだな。俺とライルとリーシャでレースに出る。」

アーガスの言葉にライルは、椅子の背もたれに掛かっていた手が滑っていた。そのままライルは怒り出した。

「なんでそうなんだよ。戦闘では、俺の方が強いぞ。なんなら今此処で。」

ライルは剣を抜こうとしていた。船上での争いを止めるため、カインは仕方なく変わってあげた。

今度はペリカンポストを呼んで出場表を出した。みんなは島に着くまでそれぞればらばらに行動した。

一夜中見張りをしていたカインは眠りに着き、ガンストは舵を握っていた。

ライルはマストに寄りかかり寝ている。アーガスは食べ終わった後の皿を洗っていた。リーシャはアーガスの手伝いをしている。

一時間もすると、誰よりもいち早く、ガンストがデウバート島を見

つけた。みんなに教えて、すぐに船を止めた。

「トーナメント会場がある島ってここか？っていつかこの建物しかないけど。」

「間違ってない。さあみんなそろそろ降りるぞ。」

ひとつの島に膨大なでかさのドーム状の会場があった。

海上の周りの道はレースのコースになりそうだ。中に入るとすぐ受付を受けた。

受付の人に「何海賊団ですか」と聞かれ、すぐには答えることができなかった。

今の今までそんなものは全く決めていなく、五人で考えていると、突然リーシャが勝手に青髪海賊団と名乗りあげた。

そのまま参加料金を払い、選手の控え室へ向かった。

「なんで青髪海賊団？」

カインがリーシャに聞くと、カインの頭を指差した。

「カインの髪が青いからね。ただそれだけ。」

ライルとリーシャ以外は、頭が痛くなってしまった。もし名が売れてしまえば、一生そう呼ばれてしまうのかと……

第五章：バトルトーナメント（後書き）

更新が遅くて、読んでくださっている方、すいません。

これからは苦にならぬよう、一章一章を短くして出して行こうと思っています。

これからもよろしく願います。

第六章：B T 1 回戦くシユーティングく

控え室に入ると、中にはほかの海賊団のさまざまな選手がいた。

自分の背丈の三倍はありそうな大剣を持っている人や、双子で二人とも同じサングラスをかけている仲の良い二人組みもいた。海賊団全員が集まって、作戦会議をしているところもあった。その中でひとつだけ変わったところがあった。背中には翼が生えていて、羽の形をした刀をもった戦士が集まっている。

その戦士に話しかけようとしたとき、審査委員長の言葉がスピーカーから流れた。

「今回の海賊バトルーナメントの総合司会は、エンペ・コルセウスがやるものである。」

君たちにどれくらいの実力があるのか全くわかりません。しかしそこがこの企画の醍醐味です。ではみなさん、第一競技は五分後に始まります。第一競技、狙撃対決に出る方はフィールドの方へ出てください。他の選手は控え室でお待ちください。もしくは、会場に応援に来てください。それでは……」

カインたちはガンストの背中をぽんと押すと、よろよろになりながら歩いていった。

「あたし、応援席行ってるね！」

リーシャは、ガンストと一緒に会場へ向かった。周りを見ると、黒いフードを着たものがあったり、先程の翼を生やした人たちのチームの狙撃手もいた。狙撃手が行ったあとは、会場の応援席もしくは控え室の小さなモニターで応援するしかできなかった。

一方会場では、四つのゲートから出場選手が出てきた。控え室はあの一部屋だけじゃなかったみたいだった。

観客の人数は出場しない海賊の一端にもかかわらず千人は超えていた。ものすごい観客の歓声の中、モニターでルール発表された。

「今回の戦いの形式はサバイバルです。この会場に二百五十の空き缶があります。そのうち当たりは5個です。」

当たりの場合は、このようにビー玉を入れてあります。カラカラ動かしてなるのは本物です。

この出場してくれた五十組ある海賊団から、生き残れるのは一気に五組になってしまいます。

空き缶はこの会場のいたるところにあります。弾はペイントボールを御使いくください。弾数は、一人七発です。何か質問は？」

ガnstに渡されたペイントボールは偶然にも青色だった。誰かがルール説明の人に質問をした。

「おい、あいつらが飲んでいるものと間違えるんじゃない？」
そういつて柄の悪い格好をしている出場者が観客を指差していた。

「安心してください。観客の人にはボトルで、飲み物を飲んでもらっています。空き缶で飲んでるって事はないと思います。」

ルール説明の人はあっさり答えた。

「試合開始まで残り三分です。みなさん中央の白線の円の中にお入りください。」

ガnstは指示されるままに動き、会場の真ん中へと向かった。みんながゾロゾロと円の中に入り、あたりを見回した。

運が悪いことにガnstはまわりに押されてしまい、スタートに遅れが出てしまう円の中心部に入ってしまった。

カインたちも初めての事にドキドキしながら、モニターを見続けている。開始の合図まであと五秒となった。

「まもなく始まります。」

アナウンスがゆっくりと時間を溜める。そしてホイッスルの合図とともに、みんなが一斉に走り出した。

早速出遅れてしまったガnstはゆっくり辺りを見回している。翼を持つ人は、空を飛んで高いところから缶を探している。搜索し

ていると急にバンバンと一斉に撃ち出した。

みんなの視線がいきなりかと撃ち抜かれた缶に釘付けになってしまった。中を確認すると、ダミーだったらしく、がっかりしていた。みんなはふざけんなよといわんばかりに視線をそらした。翼を持つ人は、ショットガンをもって空を飛び、三十メートルほど離れているところに狙いを定めていた。

何の心配をすることもなく、見事缶にヒットした。振ると中からカラカラといった。翼を持つ女性はルールマンのところへ行くと、

「できました！始まって五分もしないのに、素晴らしい。一人目の合格者です。あなたは何海賊団の誰ですか？」

会場の観客はかなり盛り上がっていた。女性は答えた。

「スカイウイング海賊団のジェファです。」

観客から歓声が巻き起こる。答えると、すぐに会場から控え室に戻っていった。

「スカイウイング海賊団は鳥人の海賊団です。戦いをあまり好まないのに海賊になるとは珍しいですね。」

第一試合目がはじまって十分もしないうちに、乱射していたものは弾がなくなってしまう失格になってしまった。

「てめえ、もうなくなっただのか！！この雑魚が！！」

その海賊の船長だと思われる人が、会場で立ち上がり、一丁の銃を出して何の文句も言わせぬまま、撃ち殺した。

自分のところもミスってしまったら、殺されるというプレッシャーに耐えながら、試合を続けるが一人目をスタートに次々に不合格者がでてきた。

「ガンスト！失格したら怒るからね！」

リーシャが応援席から大声で文句を吐いた。ガンストは周りがるさくて、リーシャが声を出しているとしか聞こえない。

「ったく。周りがうるさすぎて、集中できないな。」

ガンストが黒いフードをかぶったものの方を見た。その男の前にいる海賊が撃った缶を拾った。耳の横で缶を降るとカラカラと音が

する。中を見ると、ビーダマが入っていた。

「や、やつ……」

男は歓喜の雄叫びを上げようとしたが、黒いフードを被ったものに口を押さえられてしまった。右の米神に銃を向けられて、抵抗も無力なまま男は殺されてしまった。

黒いフードを被ったものは死んだその男の持っていた缶を男の血で塗りたくり、自分のペイントボールを投げぶつけた。その缶をルールマンに投げ渡すと再びアナウンスをした。ルールマンは血など気にはせず、声を出した。

「二人目の合格者です。あなたの海賊団名と名前はなんですか？」

聞くと、小さく低い声で答えた。

「バルツァグ海賊団のノレイファだ。」

黒いフードをかぶった男は控え室に戻った。弾切れの選手もいっそう増えてきた。だが残っている数名の選手はノレイファのやり方を見て、悪巧みを企んだ。

「さー、残りの缶は三つです。選手もだんだん減ってきました。――」

ガンストはあたりを見て、やっとターゲットの缶を見つけた。すぐさまそれに照準を合わせて撃とうとすると、後ろから銃の柄で後頭部を思い切り殴られて倒されてしまった。

「てめえみたいなのに負けてたまるかよー!!」

その男はガンストの狙った缶を撃った。だがそれは外れだった。

ガンストは歯を食いしばり、頭から流れる血を抑えながら、近くにもないかと頭上を見た。陽の光がまぶしかったが、そこにひとつの空き缶を見つけた。

ガンストはそれを狙うと、すぐさま撃った。一発でヒットして、その缶は宙からゆっくりと落ちてきた。ガンストは中身を見ると、ビーダマが入っていたので、しっかりと握り締めて、ルールマンに渡した。

「できました！三人目の合格者です。あなたの海賊団名はとあなたと名前は？」

「青髪海賊団のガンストだ。みんな、あとは頼んだぞ。」

そういうとモニター越しで見ていた、カインたちは喜んでいて、同時に会場にいたリーシャも喜んでいて。リーシャは会場に飛び降りて、ガンストに飛びついた。

ガンストは照れくさそうにしながら、二人で控え室へ戻ると、カインたちはガンストを胸上げした。

そのあと四人目、五人目を決める戦いの様子は悲惨な殺し合いとなったがなんとか決着が着き、その二組も控え室へと、戻っていった。「試合終了！ たったいま試合が終わりました。今この会場にいる不合格者の選手たちは、控え室に戻り、船へお帰りになるか、合格した海賊団の応援をしてください。」

残った海賊団は順番に、

スカイウイング海賊団、

バルツアグ海賊団、

青髪海賊団、

ファイス海賊団、

ヘルガザン海賊団の五組です。少し休憩をとります。三十分後、レースに参加する選手は会場の外に集まってください。それでは、また後ほど……」

スピーカーの音が消えた。次の試合レースに出場する、カインとアーガスとリーシャは準備をしていた。ライルはゴレムから、借りた重いハンマーを使って素振りをしていた。休憩時間の三十分がなぜだか早く過ぎた感じがした。それに会場の空気が少し重くなったように感じた。会場に選手たちが集まり始めた。

第六章：B T 1 回戦〱シューティング〱（後書き）

更新大分遅くなってますいせん。

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

評価の方もしていただければ、嬉しい限りです。

あまり高評価じゃないのは見えてますが…

第七章：B T 2 回戦くレースく

レースが始まる10分前：

「出場選手は、まずは！スカイウイング海賊団のヴァデハ、ナムル、レルリラ！

続いて！バルツアグ海賊団のジャガ、ルオンバ、ギスカン！

青髪海賊団のカイン、アーガス、リーシャ！

ファイス海賊団のエン、ヒョウ、ツガルバ！

最後にヘルガサン海賊団ベガ、ディカード、ジャツカル！」

五組の選手の名前をあげると、アナウンスは息切れをしていたが、歓声の盛り上がりは異常だった。

「ではルール説明をさせていただきます。このレースはこの島を三人で一周してもらいます。

各自中間地点で交代をしてもらいます。距離にして三十キロメートルです。つまりひとり十キロ。

もちろん空を飛んではいけません。わかりましたね？手にもつバトンを落としてしまったら、そのチームはリタイヤとなります。

私は空から、実況させてもらいます。あと今回のレースで残れるのは三組だけですから、それではがんばってください。」

ルール説明が終わるとカインとアーガスとリーシャは作戦会議のために集まった。誰が何番目に走るかということを決めていた。

話し合いの結果、一番目にカイン、二番目にリーシャ、三番目にアーガスという順番になった。二番目三番目の走者の二人はバトンパスされる自分のポジションに向かった。

カインは斬鉄剣を持ち、スタートラインに立った。

対戦相手の顔を見ると、相変わらずフードをかぶっているもの

と、スカイウイング海賊団の人は良く詳細がわからない。

それと他の二組、まずはファイス海賊団を見た。

相手は双子でまず赤い服の人が走るらしい。もう一人の青い服の人が二番目とみた。もう一人はすでに姿無く、もうスタンバイをしているのだろう。

ヘルガサン海賊団は蛇のような刀の武器を持っていて、準備体操をしていた。刀をもっていた人が近づき刀について、カインに教えてくれた。

「おい青髪、この刀が気になるようだな？教えてやろう。こいつはスネークソードと言って、刀が蛇のように動くからそう名づけられたんだ。

お前の刀は、ただの刀みたいだな。でも中々いいモン持ってんじやねえか。またあとでな。レースで会えたらあおうな。」

そのままにやりと笑って、自分の立ち位置へ戻った。

「青髪！負けねえからな。」

赤い服の男にもなんらか文句言われた。そばに青い服の男はいなかった。

みんなはカインのことを青髪と呼ぶが、そんなに目立つのだろうか。そして再びアナウンスが流れた。

「さー皆さん自分の位置へ立つてください。ではよい……」

ホイッスルがピー！と鳴り響いた。

今回対戦場所は、屋外なので、みんなはモニター越しで応援している。

観客の歓声も大きくなっていく。カインは走り始めた。

なんと赤い服の人が、10kmもあるのに短距離を走るような勢いで走っていった。

おそらく体力に自信があるのだろう。でもきつと今出場している海賊団の中で一番速い。

スカイウイング海賊団は翼があるのにも関わらず、足で走っている。ルールのせいで自慢の翼も生かせない。

ヘルガサン海賊団はスネークソードを使って、スカイウイング海賊団の妨害をすべく、足に絡めた。それに引っかけた。しまった。

「おーっと、レースも序盤だが！！ヘルガサン海賊団の妨害だ。」
スネークソードでこかしたやつ足をスネークソードが巻きつき、そのまま振り回した。

巻きつかれた人はそのまま振り回され続け、バトンを落としてしまった。巻きつくのをとくと、その勢いで飛ばされてしまった。

「バトンを落としてしまって、スカイウイング海賊団失格です。」

ヘルガサン海賊団が次に目をつけたのはフードをかぶった人たちだ。

森のコースに入ると、また同じ手をしようとすると、フードを脱ぎ、鋭い斧を取りだして、スネークソードを破壊した。

壊されたのを確認すると、斧を持った者はヘルガサン海賊団をコース外へと押し倒した。

斧を持った男は再びフードをかぶりレースに復帰したが、ヘルガサン海賊団の選手を見るのはこのレースで二度と見なかった。

「森の中の動きは実況は出来なかったですが、現在トップはファイス海賊団です。二番手は青髪海賊団です。」

あれ？ヘルガサン海賊団ができませんか？どうしたのでしょうか？

カインは走り続けていると、バトンパスの地点でリーシャが待っていた。

リーシャにバトンタッチすると、リーシャは走り出した。あまり速くは無さそうだが、後方から敵はやってこず、そのままの順位で走り続けられた。

ここでは妨害はなく、順位も変わらず、ついにアーガスが見えてきた。

ファイブ海賊団が選手を交代しているところが見えた。走り続け、なんとかアーガスに交代することが出来た。

アーガスが最後のの10kmを走る。途中でアーガスは何か障害物にぶつかった。隣でファイブ海賊団が、苦戦している。何か奇妙な生き物と戦っている。

「では、くじを引いてください。」

アーガスは言われるままに、くじを引くと鳥のマークが、書いてあった。

「はい。あなたの相手は、ガラホークドですね。では少々お待ちを。」

何かと待っていると、大空から、鳥が飛んできて、嘴でつついて攻撃してくる。アーガスは、それを全てよけきると、高くジャンプした。

「食糧がコックに逆らうな。フライドチキンにしてやるよ。」

アーガスは飛んで、鳥が攻撃してきたのものにもかまわず、両方の羽を切ってしまった。鳥は、大きな音を立てて落ちた。

「お前だったら、ホントに巨大なフライドチキンが作れるぜ。さあて次にでもいくか。」

アーガスは敵を倒し、ついにアーガスはトップに立った。

フードの男たちも追いついた。相手は頑丈なうろこをもつ巨大な大蛇だったが、フードを脱ぐと、頑丈そうな斧を取り出し、蛇の攻撃をよけて、真つ二つに切ってしまった。

モニター越しだが、まさかと審査員も驚いていた。

「バルツァグ海賊団すごい！あの鱗をいとも簡単に切ってしまった。あの鱗は、あの有名な名刀、斬鉄剣でしか切れないと思っていましたが、いやはやすこい発見ですね。」

カインは実況の言ったことに、耳がピクツと反応した。この斬鉄剣はそんなに有名なんだと、感心した。またフードをかぶり進んでいった。あのスピードの速いところの人もようやく倒しレースに復帰していた。

「たつたいまゴールしました。一位は青髪海賊団です。二位はバルツァグ海賊団です！！」

……ここで速報です。スカイウイング海賊団とヘルガサン海賊団はレース途中でバトンを失い、失格となりました。

さらにヘルガサン海賊団のベガ選手はレース中行方不明となってしまうました。見つけたら連絡をいただけるとうれしく思います。」

カインたちは一位でゴールした。続いて二位はフードをかぶった者達で、三位は異常に足の速い双子のところだ。スカイウイング海賊団が失格になっているのは知っていたが、ヘルガサン海賊団はどうしたのかと思っていた。

ライルとガンストは実況の言葉を聞いて、お互いのこぶしを軽くぶつけ合っていた。

ライルがスカイウイング海賊団の方を見ると、羽の形をした刀を持っている人は肩を落としていた。

ガンストはバルツァグ海賊の方を見ると、フードをかぶっている人たちは、喜びも悲しみもせず、何に動じもせず無表情だった。

走り終えたカインたちが控え室に戻ると、スカイウイング海賊団の一人が仲間の男の治療に専念している。

包帯がまき終わると、カインたちのもとへやってきて、話しかけて

きた。

「初めまして、私の名前はヨクといいます。スカイウイング海賊団の船長であり、医者資格も有ります。

その青い髪…あなたがカインさんですね。また縁がありましたら会いましょう。

ではみなさん決勝戦をがんばってください。私たちはこれで帰ります。あなたたちに優勝してもらいたいですね。さようなら。」

カインは一切話すことができず、スカイウイング海賊団のヨクに帰られてしまった。

それにああいう、亜種の人を見るのは初めてだった。すると実況の声が聞こえてきた。

「決勝戦は明朝、行います。そのため、部屋を用意しました。そちらの方で御眠りください。

本日の大会はここで終わります。明日を楽しみにしててください。」

と、実況の言葉が流れた。今日はそれ以降流れることはなかった。

一日の仕事を終え、放送室にいたコルセウスと実況は今回の結果について話し合っていた。

するとクーッと嫌な音が響いて、扉が開いた。誰かが部屋に入ってきたのだ。

「誰だお前は！？この部屋に入ってくるな！！」

「お前が懸賞金二千六百万の男か？」

「何だお前は？」

するとコルセウスは上半身と下半身に裂かれるように殺されてしまった。

「弱い。弱すぎる。」

実況をしていた男はヒューヒュー言って、腰を抜かしていた。誰かはなんとも言わず、後を追わせるように実況の男も殺した。

「これで明日は我々が支配することが出来る。」

不敵な笑が放送室に響く。

第七章：BT2回戦〜レース〜（後書き）

いろいろ忙しくて、作るのも忙しくて…
時間もかかると、やる気が…

でも遅くなっても完成まで出し続けたいので
僅かでも応援してください。

第八章：決勝戦の異変？

カインたちは部屋に到着すると思いつき、背中を伸ばし、それぞれ居心地のいい場所を見つけてそこに座った。

「あーあ、つかれた。あとはためえただけだライル。勝てんだろうな？」

アーガスとライルはすっかり仲が悪くなっていた。二人は協議のときに素直に人選をしてくれなかったのかと思っていた。

「うるせえ銀髪！おめえは、さつさと寝てろ！」

カインとガンストとリーシャが止めようとする、突然ギンが入ってきた。ギンは大会に参加せず、船番をしているはずだった。

「どうしたんだ？船は？」

カインが聞くと、ギンは息切れしながら答えた。

「船は、ゴレムが、見てるよ。カイン。船に、変な海賊が、やってきたんだよ。船長を呼んで来いって言ってて。」

確か、名前は、ヘルガン海賊だっけかな？とにかく。そいつら来てるんだ。急いでくれ！」

カインはそんなことにそこまで息が切れるかと思い、呆然としていた。

「なんでそんなに慌ててんだ？」

「早く呼ばないと船を壊すなんていうんだ、頼むよ。行って話してくれよ。」

ギンは息を整えて答えた。

「あたしも行きたい！」

リーシャが、ブーツを履いて準備をしようとする

「ダメだ。僕一人で行くよ。急ごう。」

ギンとカインは部屋を出て、急いで船へ戻った。

リーシャはプンスカ怒って、部屋のベッドの枕に顔を押し付けた。

カインとギン船を止めてある港に着くと、そこにヘルガサン海賊団

の一味がいた。

さきほどレース会場に選手として出場していたのがいて、すぐにかつた。

「あれはヘルガンじゃなくて、ヘルガサンだ。でもなんているんだろ？」

ギンはヘルガサン海賊団の船長らしき人に話した。また息切れをしながら、

「連れてきましたよ。もう…僕を、呼ばないでくださいね。あと…大会がんばれよ、カイン。」

ギンはカインの肩を叩いて、船に戻っていく。カインは生唾をごくりと呑んだ。

「話とは、一体なんでしょう？」

ヘルガサン海賊団の船長らしき人が口を開いた。手がないのか、右手は黄金のフックの形をしていた。

「私の名はクライシス。覚えていてくれたまえ。お前に一つ頼みたことがある。私の大切な仲間、ベガがどこかに消えてしまったのだ。」

だが犯人はわかっていて。あのフードをかぶったものたちだ。競技中にフードの男を倒して欲しいのだ。」

冷静で平然としているが、声には隠し切れていない怒りがあふれ出ている。もしもベガと言う人が生きていたら、ライルはこの人と戦うのかもしれない。

クライシスは身長が高く、片足は義足で、左手の手は服のすそに隠れていた。

「僕は次のゲームに出ませんよ。次のゲームに出るのは、ライルという者ですが。」

おどおどしながら言うと、クライシスはその怒りを露にした。

「そんなことは分かっておる！お前を通して、その者に伝えて欲しいと思っているのだ。」

私はお前のうわさを知っている。少人数で一つの海賊を潰したのだ

ろう。そのとき、倒したのは機械に従っている者たちだ。」

その声の大きさにカインは飛ばされそうになった。なんとか聞いたことを整理し、述べたいことをまとめた。

「機械に従っている？それはどういうことですか？」

クライシスは先ほどの声と、打って変わって格段にやさしく答えた。

「お前たちは海に出て、浅そうだから答えてやろう。今、海賊には二種類ある。機械に手を貸しているものと、機械に反対しているものだ。」

無論、私は反機械のほうだ。機械に手を貸すバルツアグ海賊団を潰してくれ。」

そういうと自分たちに船に戻ろうとしたが、何かを思い出し、クライシスは部下に何か渡し、その部下はカインに渡した。

「船長が渡してくれと。」

カインはその物を受け取った。何重もの包みに包まれていた。包みを開けると、とても立派な盾だった。

カインは高そうなものを貰って、少し引き気味だった。

「これを、僕に？」

部下がうなずくと、自分達の船へ戻って行った。全員が戻ると船に明かりがついた。カインは受け取った盾をギンに渡し、急いでライルたちのいる休み部屋まで戻った。

着くと部屋にはライルはいなかった。ガンストとアーガスはいびきをかいて寝ていた。隣の部屋では、静かにリーシャが寝ていた。

どこにいるのかと探していると、屋上からブンブンと素振りの音が聞こえる。行ってみると、ライルがゴレムの持つ重いハンマーを振っていた。

「寝なくていいのか？」

カインが聞こえるか聞こえないかぐらいの声で話しかけた。その声が聞こえたのかライルは素振りをやめた。ハンマーを置き、カインの隣に座った。

「この方がいい。あいつの顔を見なくていいしな。」

ライルとアーガスはまだケンカをしているようだ。

「ライル、お願いがあるんだ。さっきヘルガサン海賊団の船長がきて、話してくれたんだ。」

仲間を殺されたんだって。僕はそれで頼まれちゃったんだ。明日の試合でフードの海賊団を倒して欲しいって。

「これは海賊のゲームだろ。殺されて当然だ。」

「まあ、明日は好きなだけ暴れてくれ。僕も寝るから。しっかり寝るよ。」

ライルにそのことを話すと、カインは立ち上がって部屋へむかった。

いなくなったのを見るとライルはハンマーを手に持ち、再び素振りを始めた。

そして次の日の朝、カインは目覚めて屋上へ上がると、ライルはまた屋上にいた。

「一度部屋に戻ったのかい？」

ライルは横に首を振った。

「あいつの顔をみたくなえからな。けどどしっかり寝たぞ。ここで寝たんだ。腹が減った。飯を食いに行くぞ！」

二人は食堂へ向かうと、ガンストとアーガスはすでに食堂にいた。ライルを見ると、アーガスは窓のほうを向いた。

ライルを見るのもいやらしい。ライルもちよつとむかつきながら、席へ座ると、朝食を頼んだ。ライルはガンストの隣、カインはアーガスの隣へ座った。

「いい加減に、仲良くしたらいいだろうお前ら……」

ガンストが二人の間にはいった。ライルは黙々と、食事を続けている。アーガスは外の景色を見て食事をしていた。ガンストの話には加わろうとしない。

「ホントだよ！早く仲直りしてよね！なんでこんなことになっちゃったの？」

リーシャは、二人の仲が悪い理由を知っているのか知らないのかわからなかった。しかしなぜ、ここまで仲が悪くなってしまったか…

それはこの大会が始まる前の船の中で…

それぞれが各自作業に着いている中、ライルは目を覚まし、冷蔵庫の中にあるすぐに食べれそうなものを物色していた。

「おい、ライル！勝手に冷蔵庫の物をあさるな！あれは、俺の唯一の領域だ！勝手に手だすんじゃない！」

冷蔵庫を漁られアーガスはライルに怒っていた。ライルはにらみつけて、しゃべりだした。

「うつせーな！腹が減っているときに食べる。満腹になったらやめる。常識だろ。この銀髪野郎！」

今の一言でアーガスの怒りはいつそう増した。

「ああ？んなもの、答えになってねえよ！それに常識でもねえ。しかも、おまえがやってることは釣りだろ！

何勝手に自分の飯と釣りの餌にしてんだ。この雑魚剣士が、文句あったら、なんか言ってみろ。」

この言葉にライルも完全にぶち切れた。

「なんだダメコックが、いいじゃねえか、釣りぐらいしても、別にかまわねえだろ。あんだだけ、あんだからよ。」

そのまま二人は喧嘩をし続けた。あれ以来この二人は仲が悪い。

なにか二人に強い衝撃がないと仲は良くなならないだろう。

みんなで朝食をとっているとアナウンスが流れた。だが昨日とは別の声だった。ライルは会場へ向かった。

「今日は決勝戦。残っている海賊団は三組！」

まずは狙撃では2位、レースでも2位の海賊団バルツァグ海賊団。
選手はディアッカ！」

観客から歓声が、鳴り響いた。

「では続いて狙撃では3位の記録レースでは一位の青髪海……つとまだ来てませんね。どうしたのでしょうか？」

カインは控え室に行き、モニター越しでヘルガサン海賊団を探した。

やつのことで見つけたが、あの時、盾を渡してくれた部下しかおらず、船長のクライシスや他の団員の姿はなかった。

「では最後の三組目、ファイス海賊団のシバート！ここで奇跡の第一位があります。」

今回のルールは、サバイバル方式なので、三人のうち二人が倒れて残った一人の海賊団が優勝者となります。

今回は制限時間があり、その時間内に倒せなければ、サドンデスとなります。その場合、一回でも攻撃が当たれば、勝ちとなります。それでは最後の選手が登場するまでもう少しお待ち下さい。」

ライルは駆け込んで会場に到着すると、他の二人はすでに会場にいた。

「到着しました！青髪海賊団です。選手はライルです！では皆さん、武器をお持ちください。まもなく始まります。」

言われるがままに、ライルは武器を取り出した。

ファイス海賊団のほうを見ると、刃が炎と氷の刀を手に持っていた。見るからに特殊な武器だ。

フードの男の方を見ると、恐竜の爪のような大きな爪を片手に装備していた。先端は鋭く尖っていた。リーシャとカインとガンストの三人で会場の客席で応援を始めた。

アーガスも誘ったが、控え室のモニターで応援すると動かなかった。

スタートの時間が迫ってきた。

「さあ始まります。カウントダウン5秒前!…4!…3!…2!…1!……」

ホイッスルがピーツとなり響いた。ホイッスルが鳴り終わると同時に、ファイス海賊団はすぐにフードの者を狙った。

フードの男は大きな爪を一振りすると、風が起き、シバートは軽く吹っ飛んでしまった。その風で被っていたフードが飛んでしまった。顔を見ると、人らしい顔なのだが、両眼が青く輝いている男だった。ニヤリと笑うと、シバートに攻撃をした。

「じゃあやるかな。バツと決めて、大金貰って、酒でも買うとするか。」

ライルが動こうとしたとき、すでにディアツカにはシバートを殺す意を悟った。

ライルは刀を構え、駆けた。狙いはもちろんディアツカだ。すでにディアツカは、シバートの首を絞めて、体を持ち上げていた。首元に爪まで構えていた。

ライルは後ろから、ディアツカの背中を攻撃しようとしたが、後ろ蹴りで飛ばされてしまった。

カインはモニターで会場でディアツカの眼を見ていたら、なにかおかしいことに気づいた。

会場の入り口を守っているガードマンも目の奥が光っている。何か不安を感じ、急いで会場の前の方へ向かった。

この大会が昨日とは雰囲気がちがうと思いつながら、会場の前方へ向かった。

「どこ行くのカイン?」

リーシャが声をかけるが、全く聞こえていなかった。

向かっている途中、何か大きいものが落ちていた。青いビニールシートで巻かれていたが、足元に血が流れている。

それを開いてみると、カインは息を呑んだ。人が体のヘソぐらいの

ところで分断され、それをまとめて、包んであった。顔をよく見ると、どこかで見たことのあるような顔。

「この…人って…まさかコルセウスさん？」

このトーナメントの指揮を取るコルセウスであった。動揺していると、会場の方から実況が吠えた。

「おーっとピンチだシバート。さあどうする？ライルは攻撃が届かないぞ！このまま、ディアツカの優勝か！！」

よく聞くと以前と実況も違っていた。コルセウスの遺体をその場に置き、カインは会場へ走った。

応援席に着くと、観客は昨日のような騒ぎはなぜかしない。意味不明な言葉を発しながら応援をし続けている。カインは実況に大声で訴えた。

「この大会を中止しろ！二人が殺されてしまう！」

その言葉は周りがうるさく聞こえなかったらしい。

ライルが立ち上がると、シバートは大きな爪の傷を腹のあたりにつけられて、ライルの横まで滑ってきた。

ディアツカは、シバートに飽きたのかライルを標的にした。大きな爪を構えると、そのまま刺すように突っ込んでいった。

カインは再び叫んだ。

「あいつは人間じゃない！機械だ！他の競技の出場選手だつてきつとそうだ！」

そのカインのその言葉に実況は気づいた。実況はマイクでカインに文句を言った。

「自分のところが負けそうだからって、そういうことをいうのを良くないよ。それに海賊なんだから死とは常に隣り合わせでしょ。」

実況の目の奥が青く輝いていた。それを見た途端、カインはあいつもグルだとわかった。

会場に乗り込もうとすると、今まで黙っていた観客席の人らが急に動き出した。カインをどんどん囲んで、追い込んでいく。

「みんなそうなのか…。本気で行くぞ！」

そう思ったとたん、カインは持っていた斬鉄剣を鞘から抜いた……

第八章：決勝戦の異変？（後書き）

いつのまにかページのレイアウトが変わって書きづらくなっていました。のんびり更新ですいませんが、まだまだ続いていきます。

第九章：機械皇帝

カインは斬鉄剣を抜くと、試合会場に飛び出た。だが実況に止められた。

「だめですよ！ちゃんと観客席で、見ていてください。」

実況が文句を言っ、周りの者が行動を止めようと動き出した。

「うるさい！どけ！」

カインの暴走を見て、ガンストとモニターを見ていたアーガスが動き出した。カインは押さえつけようとしてくる相手を次々と斬り倒していった。

「カイン！そんな無闇やたらに斬るってどういうことだ。」

「こいつら、みんなグルなんだ！手伝え！」

それを聞くと、隣に座っていたやつから次々とマグナムを放って倒していった。

「リーシャ立て！」

座っていたリーシャを無理やり立ち上がらせて、観客席から離れていった。アーガスも観客席に乱入し、観客席は混乱を起こした。いくらガンストとアーガスが参戦してくれても人数に大差がある。

「く、数が多すぎる！」

会場の様子はコチラに気づいてはなかった。シバートやライルのようになっってしまう。何か策がないかと思うと、誰かが後ろから話してきた。うつかり斬りそうになったが、クライシスの部下だった。

「カインさん。私が差し上げた盾が、有るではないか？それを使って戦えばよいのではないでしょうか？」

カインはその話を聞いて、斬鉄剣を戻し、船に走っていった。ライルは刀を構えた。声をあげながら、ディアツカに攻撃をした。耐えようとしたが、力の差が歴然で、はじかれて吹っ飛ばされてしまった。カインは船に到着して、盾を探した。

「あれ？どこに置いたっけな？」

カインは船の中人間まなく探した。見つからなかった。ギンのもとへカインは向かった。ギンに尋ねた。

「なあギン…盾知らないか？」

ギンはうなずいた。

「どこにあるんだ？」

カインが聞くと、ギンは指を指した。指した方向は、ゴレムだった。「なんでゴレムにあるんだ？」

「ゴレムが持つてるんだ。」

そういつてゴレムはカインに目掛けて、フリスビーのように盾を投げた。

「助かったよ。」

盾を受け取り装備すると、急いで会場に向かった。走りながら、カインは刀を抜いていた。右手に斬鉄剣、左手に盾を装備した。次々と敵をなぎ倒し、会場に入ると、そこでライルとシバートは、ディアツカに斬りつけられていた。カインは試合に乱入した。また実況に止められそうになったが、実況は盾を見るなり、下がっていった。「なんでそれをあなたが…」

「お前もグループの一人か？」

カインの気迫に恐怖を覚え、実況は逃げていった。ディアツカは、実況が逃げるのを見て、ライルたちへの攻撃をやめた。二人は倒れてしまった。ディアツカは、大きな爪をカインに向けた。

「お前……殺す……」

「お前が、機械だつて事はとづくに分かっている！その皮をはがしたらどうだい？」

カインは攻撃より先に防御した。ディアツカは、大きな爪で刺そうとしたが、盾により弾かれてしまった。

カインは、大きな爪を装備した腕を狙った。斬鉄剣で攻撃すると、思ったより硬かった。だが服が切れて、皮膚というより、装甲が丸見えになった。ディアツカは、武器を下ろし、話し始めた。先程とは声の高さが違っていた。

「貴様…その盾をどこで手に入れたんだい。」

口調が変わったことに気づいたがカインは答えた。

「昨日、クライシスがくれたんだ。それがなにか？」

さつきまでの声とは、違う声で笑い始めた。

「クライシスか……あの裏切り者め」

クライシスの事が出てきて、耳を疑った。

「なんで裏切り者なんだ。あなたは誰なんだ？」

何者かがディアツカに乗り移ったらしい、今までとは口調が違って
いた。会場からリーシャたちが、降りてきた。

「そうか……まだ私の名を覚えていなかったね……私の名は…セベルトリクス。この機械の反乱を起こした張本人だ。今はこいつの体を借りて、君と話している。クライシスは、私の仲間だった。その裏切り者は、その盾を持つて逃げたんだ……今その会場に向けて、龍を一匹行かせた。君のおかげで計画は、失敗に終わった。これから行かせた龍に、この会場を爆破させる。ディアツカもここまでだな。」

話を聞いて、カインとリーシャ、それにガンスト、アーガスは聞いて驚いた。

この？機械の反乱？を起こした張本人と話している。全てを聞くチャンスだ。だがセベルトリクスは、ここに向けて龍を出撃させたらしく、もうすぐ来るらしい。観客は意識を取り戻したようにパニックを起こしていた。またセベルトリクスは話してきた。

「盾を返せ……それはお前の持つべきものではない。返すんだ……」
カインは当然のように断った。

「この盾が、なんだか知らないが、お前に返すと大変なことになりそうだな。だから返さない。」

セベルトリクスは、にやりと笑った。

「あの時計が、試合の時間切れになったとき、龍はここに来る。」
指を指した。もう時間は五分もない。カインは急いで、斬鉄剣をしまい、アーガスとガンストと一緒にライルとシバートを背負い、外

に出ようとした。

「お前……両親に会いたいか？」

その言葉に足を止めてしまった。

「行くぞカイン！」

アーガスが話しかけるが、止まった足は動かない。

「だが残念だな……お前の母親はもう死んでいる……我が殺した。」
その言葉を聞くと、一瞬でカインの目には涙がたまった。左拳力が入り、力が入りすぎて、震え始めた。背中に背負ったライルを下ろすと、カインは斬鉄剣を取り、攻撃した。今度は腕を斬ることが出来た。そのままディアツカは倒れた。

「カインというのだな。君とはまた会いたいものだ！」

笑いながら、声は消えていった。カインは無償にも息が上がっていた。ガンストはカインに声をかけた。

「早くここから逃げるぞ。」

ガンストの声を聞くと、ジハードとライルを背負った。

「さあみんながんばれ！速く逃げるよ。」

リーシャが励ましながら会場をあとにした。船には、ギンとゴレムが甲板で待っていた。シバートを降ろすと、セベルトリクスが言ったように龍がやって来て、会場に向けて炎を吹いた。会場はどんどんこげていき、爆発した。そして黒い龍は、かなたへ飛んで行った。

「悪い……カイン。俺が弱えばかりに……」

「大丈夫だ。もうすぐ船だ」

カインたちは、ぎりぎり船に乗り込んで、出帆させた。進めている途中でファイス海賊団の船を見つけ、シバートを渡すと御礼をされた。二隻の船は別々の方向に進んだ。船の甲板でリーシャは、ライルに簡単な応急処置をしていた。しかし包帯を巻くのも、傷薬をつけるのも言っでは悪いが下手だった。

「あー。あの大会が、偽者だったなんてな。全く誰だあんなのに応募したやつは？」

ライルはアーガスに文句を言った。

「俺のせいだったのか？あゝ！」

二人はまた喧嘩を始めた。ガンストは、大砲の整備をしている。カインはクライシスにもらった盾を見ていた。裏には？斬鉄剣？？エクセルドライバー？と同じように彫られていた。だがカインたちの知らない文字で彫られていた。ギンにも見せたが、ちよつと物知りのギンでさえ、わからなかった。

「なんなんだこの文字？」

カインは疑問に思っている。そう思っていると次なる島？ジャケロ？に着いた。この島には、一つの高度の高い山があり、その周りに町がいくつもある島だ。ギンによると、この町には人間以外も住んでいるという。今回は、カインとアーガスとギンとリーシャが外へ行き、荷物の調達をする。この島には幾つか機械兵が来た形跡があった。二手に分かれ、町を歩いていると、肩を誰かにぶつけた。すぐに謝って顔を見ると、謝った相手は、フロウだった。

「フロウ！ここで何やってるの？」

「ちよつとおじいさん！ちゃんと前見てよね！」

リーシャはこの人がフロウだと、誰だかわかっていなかった。カインがこつそりと教えると、リーシャも謝った。

「いいんじゃないリーシャよ。そんなことより、おぬしらこの前は、散々だったようじゃな。」

「ちよつとなんで、あたしの名前を知ってるの！」

またカインが、リーシャにこつそりと教えた。魔法使いだと知って、そのあとは黙り込んでしまった。カインは、一人だけで考えていた。一つだけ思い付いた。

「大会のことですか？確かに大変でしたけど。」

フロウはあたりを確認すると、小声でカインの耳元で話した。

「そうじゃ……それにおぬしらに話がある。いったん船に戻るぞ。」
いわれるがままに、船に戻っていった。そして船の食堂にみんなを集めた。

「実はな、これは最近のものなんじゃが、まあ見るんじゃ。」

と、出したものは、懸賞金の張り紙だった。渡すとフロウは、懷にしまっていたキセルを吸いだした。みんなは開いた口がふさがらなくなってしまうた。それはなんとカインの懸賞金の張り紙だった。

アーガスが話した。

「カインのじゃねえか？なんでこうなったんだ？しかも相当な額だぜ。」

フロウが頭をかきながら、話してくれた。

「懸賞金は、機械皇帝が倒したいやつ及び、連邦警察が危ないと思つたものを中心に出るものじゃ。今回はカインが機械皇帝たちにとって、必要なものを持つとるからじゃ。」

みんなそろって、カインの方を向いた。それにカインは動揺してしまった。

「僕が持つてるものは、斬鉄剣とまだ調べ途中のあの盾ぐらいだ？」フロウが盾を見て、開いた口が塞がらなくなつた。

「おーこれは……なぜこれをおぬしがもっているのじゃ？」

カインは、フロウにことの全てを話した。もちろんセベルトリクスと話したことも……

「なるほど……クライシスから渡されたのか……」

フロウは考え込んで黙ってしまった。アーガスたちは、盛り上がっていた。

「それにしてもすげーなカイン。懸賞金がかかるとは、思つてなかつたぜ。しかも初頭の手配が、一、十、百、千……四千万」だなんて！おいおいたまげたよ。」

ガンストはギンと一緒に喜んでいた。

「酒はどこだ？酒！」

ライルは酒を探した。アーガスはご馳走の用意をし始めた。リーシヤは笑みをこぼしながら懸賞金の張り紙を見ている。ガンストとギンは、無理に踊り始めた。カインはフロウに盾に彫られている文字について聞いた。

「フロウ。この文字は、なんて書いてるの？」

フロウは、盾の文字を読んだ。

「この文字は古代ストラ文字で、セイントと書いてある。意味は聖なるという意味じゃ。つまりこれは聖なる盾じゃ。その盾は機械皇帝が、現在唯一恐れるものじゃ。」

カインは聞いてちよつと盾を手放したくなつた。機械の反乱を起こしたものが、この盾を恐れるなんて。

「なあフロウ。セベルトリクスのことをなんで機械皇帝って呼ぶんだ？それとなんでそんなに恐れられているの？」

カインは、セベルトリクスの事についてよく知らなかった。

「機械皇帝と呼ばれることを何にも知らんのか？」

誤りの表情を少し見せた。

「しょうがないのう。教えてやろうかの……機械皇帝と呼ばれているわけは、名前をみなが呼びたくないからじゃ。彼がなぜ恐れられたか。それは彼の強さにある。一つ一つ説明してやろう。彼の装甲は、無敵に程近い。大砲の攻撃ですら防ぐことができるのじゃ。走行のしたには、あらゆる重火器が備えられている。次に彼の左腕。

やつの左腕には、すべての攻撃を吸収することができるナヴァと呼ばれるものを持っている。右腕は、ビックバンという剣を装備しておる。とても大きな剣で、彼の力では斬るというより、殴り倒すじやな。続いて足は、高速に移動ができるブースターが取り付けられておる。最後に頭には、相手の攻撃を予測することができるサーチと呼ばれる機能がついておるのじゃ。そして、なぜやつがその聖なる盾を怖がるかというと、ビックバンの攻撃がすべて返ってきてしまう恐れがあるからじゃ。それ以外はまだ誰にも知られてはいない。」

その話を聞いてカインは、みんなの騒ぎの中、黙ってしまった。

第九章：機械皇帝（後書き）

まだまだ続いていきます。

首を長くして待っていたら幸いです。

第十章：フェニックス

日は暮れて夜になった……

相変わらず船の中の騒ぎは続いている。カインは、一人甲板に出ていた。フロウがゆっくり近づき、隣に座った。

「カインどうしたんじゃ？」

「いや……僕、セベルトリクスが恐れるものを持っているって事は、機械兵が、たくさん来るってことだろ。みんなを困らせるんじゃないかと思ってるんだ。」

カインは、このあとの未来について考えていた。

「そうじゃな、その考えを忘れるな。自分のことより、まずは人の心配をする。これこそが大切なのじゃ。」

フロウは、そういうと持ってきた飲み物を渡し、二人で乾杯をした。さらに二人は、話しを続けた。

「カイン。おぬしは歴史を変えられる力を持つておる。おぬしならできる。」

フロウは、顔を空に向け、夜空を見た。

「フロウ……ところで今日はなんで、この町に居たの？」

カインが話すとフロウの顔を見た。フロウは裾を上げた。

「それはな……この傷を治してもらうためじゃ。ここには、いい医者がいでの。いつも頼っているのじゃよ。確か名前は、ヨクというものじゃ。」

「ヨク!？」

ヨクと聞いて声を上げた。ヨクはこの前の大会で、スカイウィング海賊団の船長だった人だ。もうあれ以降海賊を続けていなかったのか。カインは、あるひらめきが浮かんだ。

「そうだ！ヨクを仲間にしよう。」

突然の提案にフロウもこれには驚いた。

「なぜじゃ？なぜ見たこともないやつを、仲間にしようとする？」

カインは立ち上がり、話した。

「いや僕は、一度話したことがあるんだ。あのときは、あっちが一方的に話してきたけど。あの大会のときにね。フロウ、あの人どこに住んでるの？」

聞かれるとフロウは指を指し答えた。

「あの山の上じゃ。わしもあの医者はいいい医者だと思うぞ。仲間に出来ればよいの。」

そう聞くと、片手に斬鉄剣を持ち、船を飛び降りた。走って、フロウの指さした山を目指した。フロウは、飲み物を飲みきると船内に戻った。船内では、男四人は酔いつぶれ、ゴレムは、充電で眠りかけている。まだリーシャは起きていた。

「ねえおじいさん。今カインがどっか行っただ見ただけけど、どこ行っただの？」

「知りたいのならリーシャ。おぬしも来るか？」

リーシャは良くわからないながらうなずいた。フロウがコップを流しに出すと、移動呪文で、二人ともどこかに行ってしまった。

カインは休むことなく走っている。町の途中、なにかに引っかかりこけてしまった。斬鉄剣はしっかり持っていたため、落としてはしなかった。町のヤクザに、足を引っ掛けられてしまった。

「よお兄ちゃんよ。ちょっと金くれないかな。」

ヤクザが近づいてきて、絡まれそうになった。カインは斬鉄剣で攻撃しようと、少し鞘から抜くと、ヤクザは斬鉄剣にビビリ、倒れて逃げてしまった。

「僕にかまうな。」

再びカインは走り出した。ついに山のふもとにたどり着いた。あとはこれを登りきるだけだった。だが、この山はほぼ垂直になっていて、あるいていけるものではなかった。それに山の頂上が雲まで届いている。山の下小屋の住人に話を聞いた。

「この山を登るのに、何か方法はありませんか？」

山小屋の住人は、首を横に振った。

「特にないな。ここを、まっすぐ上ることだ。途中で翼竜がおる。そいつを捕まえれば、早くいけるぞ。」

話を聞くと、カインは斬鉄剣を口にくわえ、山を登り始めた。一時間も登っていると、途中で手が汗ばんで滑ったりした。下を見下ろすと、まだ低かった。立てるところを見つけると、すぐに頂点を目指すことから、それで休んだ。

途中で翼竜と出くわしたが、睨み付けたらビビられ、翼竜が逃げた。

そのせいで、そのあと翼竜と出くわすことはなかった。休めるところで休んでいると、龍とは違う別の生き物がやってきた。炎に包まれている大きな鳥がやってきた。

炎に包まれている鳥が、話しかけてきた。

“ 汝よ。そなたは、どうしてそこにいるのだ ”

鳥が優しく話してきた。どういうことだ、鳥が話している。そう思いながら、カインは聞いた。

「なぜあなたは、喋れるのですか？」

炎に包まれている鳥は答えた。

“ 喋っているのではない。テレパシーといって、相手に考えていることを心に直接伝えているのだ。それと私のことをあなたではなく、フェニックスと呼んでほしい。それとおぬしの名は？ ”

テレパシーとか、わけのわからないことをいつてきた。

「カインです。カイン・F・ハルドです。」

フェニックスは、優しい顔でこちらを見ている。カインは、考えた。頂上へ連れて行けるように頼んだ。

「すいませんが、山の頂上まで連れて行ってもらえませんか？」

フェニックスは、話を聞いてくれた。

“ 良いぞよ。その代わり、私の背中に乗ればだが。私の炎が熱いと思ったら、乗れませんよ。よろしいですね ”

なにを言っているか良くわからないが、フェニックスの羽を恐る恐る触った。炎を熱いとは、思わず普通の毛を触っているようだった。

「熱くない……熱くないぞ！」

叫ぶと、フェニックスの背中に飛び乗った。やっぱり熱くない。そのまま、山頂を目指してとんだ。ものすごく速かった。飛びながら話してくれた。

“私の背中に、人が乗ったのはこれで、二回目ぞよ”

山頂に簡単についてしまった。山の頂上に、足がつくと、フェニックスは話してきた。

“その刀、斬鉄剣かな？”

カインは小さくうなずいた。

「なんで分かるんですか？」

フェニックスはそのわけを教えてくれた。

“昔乗せた者が、それを持っていたのだ。名人間ロド・F・シーラ”
“と言うものだ。”

その名を聞き、斬鉄剣の柄を確認した。そこにもその名が、書かれている。しかしカインはそのことをフェニックスに黙っていた。

「ここまで、運んでもらって、ありがとうございました。」

カインはお礼を言うと、山頂の山小屋に入ろうとした。

“待つのだ。”

カインは足を止めた。フェニックスは話を続けた。

“汝に、私の尾羽を授けよう。これは汝が死んだとき、一度蘇ることが出来るのだ。”

フェニックスが空高く飛び、飛んでいった。

“ではまた会おう、夢を追い求める「F」の名のものよ”

上から、ヒラヒラとフェニックスの尾羽が落ちてきた。それをつかむと、山小屋へ入っていった。入ってみると驚いた。なんとすでにフロウとリーシャが中にいたのだ。

「フロウ、リーシャ！なんでいるの？」

「おぬしが来るのを、待っていたんじゃない。」

「そうだよ。ずっと待ってたんだよ。」

カインは考えた。考えの答えを出した。

「そうか、フロウ！移動呪文を使っただね。あの時行ってくればよかったのに……」

フロウはうなずいた。後ろにいたヨクが気づいた。

「カイン君。久しぶり、ヨクです。」

「ヨクさん！久しぶりです。」

ヨクは、鳥人という種族だったがカインは、一度あっているのに驚きはしなかった。カインの手を見ると、すぐに手当てをしてくれた。「あ……ありがとうございます。」

ヨクは手当て中に、カインの手に持っている羽を見た。目が大きく開いている。

「その羽は、なんだい？」

ヨクが触ろうとした。触れたとたん、火傷してしまった。

「なんですその羽は？熱くないですか」

ヨクは、手を水で冷やした。次にリーシャが、普通に触った。火傷するなと思ったが、

「全然熱くないよ。どうして火傷したの？」

リーシャも何か特別な人なんだろうと、このときカインは思った。リーシャはカインに羽を返すとフロウが、羽のことについて聞いてきた。

「その羽は、いったい何の鳥の羽かな？」

カインは答えた。

「炎に包まれている鳥のものです。名前は、フェニックスです。」

フロウとヨクは、顔を見合わせた。リーシャはチンプンカンプンだった。ヨクは手を冷やしている水を止めて、ある辞典を探した。フロウは、それが何なのか教えてくれた。

「それは、三大聖獣の一体。不死鳥じゃな。聖者じゃないと会えない、幻の生き物なんじゃよ。」

「三大聖獣ってなに？」

みんなはリーシャを無視した。リーシャは怒って部屋の奥へ、入ってしまった。ヨクは、フロウの言葉のあとに辞典を持ってきて、話

してくれた。

「この辞典は、三大聖獣辞典。三体の聖獣について詳しく乗っているものだ。まずはこのページから。」
と言って、本を開いた。

この世には、三体の幻の聖獣。

大海獣リヴァイアサン

幻竜王ガルブレイ

不死鳥フェニックス

アイテムを持っている者は、そのアイテムで聖獣を呼ぶことができる。

この三匹が同時にあったとき、世界は滅びる。

ヨクが一通り読むと

「じゃあ次にフェニックスのところを読んでみよう。」

この聖獣は三体の中で、人を嫌う聖獣。会ったものは、今までに一人しかない。会ったものはこう話す。この生き物に触れられるのは、聖者だと答えた。不死鳥が尾羽を渡したものは、世界を救える力を持っている。尾羽を悪用したものは、罰が下る。

カインは、聞いて嬉しかった。フェニックスにあえて嬉しい。そしてフェニックスについての話を聞いて嬉しかった。フロウが話しかけてくれた。

「おぬし、そんなことより、ここに来た用事があるのでは？」
言葉を聞いてカインは思い出した。

「そつだそつだ。ヨクさん、僕たちの船の船医になつて欲しい。つまり仲間になつて欲しいんだ。」

突然の勧誘でヨクは考え込んでしまった。考えていると、後ろの部屋から、なにかしら訴える声が聞こえた。ヨクは急いで、声のなっているほうへ向かった。カインも一緒に行くと、ファイス海賊団の赤い服の男と青い服の男がいた。顔をよく見ると、二人とも右の眉毛が服の色と同じだ。

「おーカインちゃん！元氣してた？」

赤い服の男が叫んだ。青い服の男も続けて、

「カインちゃんどうしたの？君も入院かい？」

「いや違うよ。でもなんで君たちもここで入院しているんだい？」

赤い服の男と青い服の男が、急に肩を落とした。

「この前、海賊同士で戦つてたら、やられちゃつてさ……」

「で今、ここにいるわけ……」

赤い服の男と青い服の男を思い出したが、名前がよくわからない。

「そついえば、カインちゃん懸賞金つけられちゃつてたよね！」

「いくらだつて……そつだ四千万」だ！」

赤い服の男と青い服の男は、勝手に話を続けていた。ヨクが傷の手当てをしている。その近くにはリーシャもいた。

「そついえば……カイン。この人たち名前わかんないの？」

カインは、ゆっくりとうなずいた。

「えーと赤い服の人がエン。青い服の人がヒヨウ。覚えなさいよ。」

リーシャから自己紹介を受けると、再びぺちやくちや話し始めた。

話しの中には、自分達の仕事が大工だとか、自分の両親について話した。カインは聞いていられなく、フロウのいる所へ戻った。古びた木の椅子に座ると、フロウが話をしてきた。さっきの聖獣のことを再び話した。

「そついえば、フェニックスはどこにいたのかね？」

フロウが聞くと、

「この山の半分よりちよつと下くらいです。でも下を見たときには、

ものすごい高さだったから、正確にはわかりません。」

フロウは、考えて黙ってしまった。ヨクは、エンとヒョウの手当てが済むと、話に参加してきた。

「私も、会いたいものだな。」

ヨクは、とっても会いたがっていた。

「簡単には無理じゃ。自分から会いたいと思って、会えるものではない。だがなカインと一緒にいれば、会える確率が上がるかも知れんぞ。」

フロウが、カインにウィンクをした。ヨクが、何か考え込んでしまった。

そして立ち上がった。

「決めた！私はカインと一緒に行く。荷物をまとめてすぐ行く。」

後ろの方から、怒った声が聞こえた。

「おいっ！俺たちはどうなるんだ！」

「そうだ！俺たちはどうなるんだ！」

三人は考えた。フロウが提案をした。

「二人と一緒に連れて行つてはどうじゃ？治りさえすれば、どこかの島で、下ろしてあげばよい。」

カインとヨクもその意見に賛成した。ヨクは、結論が出るエンとヒョウに話した。

「二人とも、荷物をまとめろ！カインたちの船に、行くぞ！」

「イヤッホー！それって本当か？カインちゃん？」

エンが聞いた。カインはうなずいた。

「イヤッホー！また海賊が出来るぜ！」

ヒョウも大喜び、必要な荷物をカバンに詰めた。

「その前に三人に聞きたいことがある。」

いろいろと片付けていたり、準備していた手が止まった。

「三人のそれぞれ目指している夢を聞かして欲しい。」

ヨクは頭を悩ました。

「俺達は、親父を見つけることだ。どこかにいる伝説の大工なんだって話だ。」

エンとヒヨウの声が同時に鳴り響いた。エンとヒヨウの夢を聞くと、ヨクが口を開いた。

「私の夢は、見たことも無い三大聖獣すべてに会うこと。それとすべての病気を治せる万能薬を作り出すことだ。」

それぞれ言っと、そしてフロウの肩に手を置いた。最後にリーシャが手を置くと、フロウの移動呪文で、船へと戻っていった。

甲板にドタツと数名の足音が鳴る。もう日は昇り、朝になりかけていた。物音に、四人は目覚めた。四人のうち、ライルとアーガスは、二日酔いになっていた。ガnstが寝ぼけ眼でやってきた。

「どうして、そんなやつらがいるんだ？……ってヨク！？」

ガnstはヨクを見るなり、大声を上げた。

「おーガnstか。お前はこの船のクルーなのか？」

カインはヨクから体を少し離れた。なんでもお互いを知っているのか？あの時、カインとヨクで話していたところでガnstがいたか思いうせない。

「なんでヨクさ。ガnstの名前を知ってるの？」

「なんでって、ガnstと私は、古くからの友人だから。なっ！」

ヨクはガnstの肩叩いた。ヨクはガnstと一緒に、船室へ向かった。ライルとアーガスは、二日酔いで頭を抑えていた。アーガスは、水を飲んでいた。

「頭、痛え。」

「で、そちらの御二人のほうは？」

頭をかきながら、ギンが聞くと、

「良くぞ聞いてくれました。俺たち、エンとヒヨウは、それはそれは、もう長いことありましてね。それでね——」

「そうそうそうなんですよ。それでそれで——」

エンとヒヨウは、長々とギンに話している。ガnstは、ヨクと船

室で話している。船の誰一人、この羽のことを聞かれなくてよかったと思う。そう思っているときまたフロウは、羽のことで話してきた。「おぬしの尾羽のことなんじゃが、その尾羽には、どのような効果があるのじゃ？フェニックスに聞いたのではないのか？」

カインも話した。

「この尾羽は、一度死んでも、蘇ることが出来るんです。」

「魔法写真を撮らせてはもらえぬか？辞典の一ページになるぞ。」

カインは了承し、魔法で写真を撮らせた。

「ありがとうの。ではまた、しばらく会えないかもしれないが元気だな。」

カインに別れの挨拶をした。次はみんなに大声で言った。

「みなの方！しばらく会えないかもしれないが、また会えるときまで！」

フロウは移動呪文で、どこかへ飛んでいってしまった。リーシャが大きく欠伸をした。

「さあ、あたしは、マイルームで寝るかな。おやすみね。」

手を振ると、自分の部屋へ入った。カインは次に、ライルと話しに向かった。

「ライルどうしたんだ？まだ二日酔いか？」

ライルは立ち上がった。

「なに、二日酔いはもう直ったさ。そんなことよりカイン、釣りやろうぜ。釣り！」

二人は釣竿を出した。カインがアーガスに、釣りの餌になりそうなものをもらいに行った。

「これから釣りをやるんだ。餌になりそうなものないかい？」

アーガスは頭を押さえながら、パンのミミを一袋、カインに投げた。「それでやれ。」

「ありがとな！アーガス。」

アーガスは、まだ二日酔いが残っていそうだ。もらったパンの耳で、カインとライルは釣りを始めた。エンとヒョウは、包帯を取り、そ

のままガンストたちと遊んでいた。ヨクは、ギンの部屋に招待され、ゴレムをまじまじと眺めていた。

一方その頃黒く聳え立つ城の一室で……

「裏切り者は見つからないのか？早くやつを……見つけ次第殺せ……」

セベルトリクスは、部下に命令をしていた。続けて話した。

「最近甘くしすぎてたな……テラ、ドウリケラ、ゾアガル、ベリル、行け……機械兵をいくらでも使ってよい……町を破壊しろ……町のものを生け捕りにしろ……」

命令を聞くと部下の四人はすばやく城を出ていった。

「そうだ……カインに渡ってしまったあの盾を取り戻せ……そうだな……この任務にはラミンゴ行け！」

ラミンゴと呼ばれる男は、命令を受けると城の一室から飛び出した。この日を境に世界は、恐怖の世界となってしまった……

第十章：フェニックス（後書き）

少しでも読んでみて下さい！

3 / 2 3 / / ちょっと足りなかったのでプラスさせてもらいました。

第十一章：進撃（前書き）

前々回ぐらいから全く未編集なので
読みづらい箇所がたびたび出てくるかもしれません。
今後直していきますので。。。

第十一章：進撃

カインたちは次なる島？ルナファ？についた。この島は、無人島で機械兵も来ていない安全なところだった。それに今日は、特に暑かったので、みんなはバカンス気分で遊び始めた。

「あち、こういう日には、ばてないような飯がいいな。ビタミンを多くするか。メインはフレンチでいくかな。たまには……」

アーガスは船内で、今日の昼飯のことを考えていた。カインとガンスト、リーシャ、エン、ヒヨウの五人は、海で遊んでいた。ギンは新しいマシンのパーツの作成。ヨクは、なんにでもよく効く、万能薬を作っていた。ライルは日当たりのいい所で、上半身裸になって汗を流しながら、ゴレムの重いハンマーを使って素振りをしている。するとあたりの空がだんだん暗くなってきた。それに海で遊んでいた五人は気づいた。空を見ると、かなりの数の鳥が逃げている。後ろには、たくさん機械兵が飛んでいる。機械兵の中には、人らしきものに乗っているのを見た。だが、東と西の方向の二手に飛んでいってしまった。海で遊んでいるものは、すぐに上がり、服に着替えて、船に戻った。

「なんだあの大群は？」

「知るわけないだろ！とりあえず船で会議だ。」

船員を全員集めて、食事を含め会議を始めた。

「あの大群の機械兵について、セベルトリクスは、何をしたと思う？」

ガンストが議長となった。ギンは手を上げ、発言した。

「たぶん、支配の勢力をを、増さしたとおもいます。」

カインも同意見だ。次に、ヒヨウが、手を上げ発言した。

「たぶん俺らの町を、壊すつもりだと思うよ。ガンちゃん！」

「ガンちゃん！？できればガンストって呼んで欲しいんだけど……」

ガンストの声がどんどん小さくなっていく。少し黙り込んで、リー

シヤとカインが同時に手を上げ、先にカインが不安げに発言した。

「クライシスを殺す気じゃないのか？」

するとドアが急に開いた。カインたちは、みんな集まっているので、ゴレムかと思っていた。この時ゴレムには、見張りを頼んでいたのだ。だが入ってきたのは、見たこともない男だった。サングラスを掛けて、顔には正体をばれないようにマスクをしていて、マラカスや、タンバリンを使つて踊りながら答えた。

「正解だよ。皆さんの今言つたことは、正解だ。残念だがあともう二つ答えがある。ひとつは、町に残っている奴らを生け捕りにすること。そしてもうひとつの答えは、それは……カインに渡つた盾を回収するため。アーオー！」

突然現れた謎の踊り男は、なにかのリズムに合わせて言っていた。みんなはいっせいに武器を持った。そのままその男は勝手に自己紹介をし始めた。これもやっぱり踊りながらだった。

「どーもみなさん始めまして。私の名はラミング。機械皇帝様の部下のものです。人間でも選ばれれば、こういう扱いになるのだよ。

キヤーフォー！」

挨拶にさらにお辞儀までしてきた。ギンはこいつを見て、不安になったことを恐る恐る聞いた。

「おいゴレムはどうした？」

ラミングは、ギンの方を向いて話した。

「あのでかい子は、やつけさせて頂きました。ここに入ってくるのに、ジャマだったもので……外に倒れてるよ。ウーウィー！」

ギンは、ラミングの横を通り抜け、外に出て行つた。ゴレムを見つけると、急いで駆けよつた。ギンのあとを追うように、ラミングがステップよく甲板に向かつて歩き出した。カインは斬鉄剣を抜いた。ライルとアーガスも刀を抜いた。ガンストはマグナムを取り出した。他の三人も武器を取り出した。リーシヤは一番最後に出てきた。ヨクは、羽のような形をした剣を手にした。しかも二本も持つ二刀流だった。エンは炎の形をした刃の剣を持ち、対してヒヨウは氷の形

をした刃の剣を持った。この三人が武器を持つのを、カインらは初めてみた。

「なーカイン！盾はどこにあるんだい？フーツー！！」

カインはなんの行動も示さなかった。それにカインも聞きたいことがある。

「その前に、クライシスは、生きているのか？」

ラミンゴは軽々と答えた。

「あいつは、まだ見つかってねえからわからねえ。だがな機械皇帝様は、裏切り者を捕まえて、殺すと言っておられる。フーツー！！」

話しを聞くとラミンゴを全員で囲み、みんなは武器を構えた。ライルが、先手を打った。

「てめえ、くたばれ！」

刀を思いっきり振ると、よけられてしまった。

「なっ……」

よけたと思うと、振った自分の、刀の上に乗っていた。

「なにっ！？」

「リズムが遅いな。フオーツー！！」

そういうと足を振り上げた。そのままライルを、顔面めがけて蹴り飛ばそうとした。間一髪、ライルはよけた。

「今のリズム。グッド！イヤー！！」

ラミンゴが急に高くジャンプをすると、ライルはよろけてしまった。ヨクも翼を羽ばたかせ、空高く飛んだ。二本の羽剣で十字架を作り、切り捨てた。だがラミンゴは、ヨクの頭の上に立っていた。

「まだ遅いな。ジャーー！」

後ろにとび、ヨクの肩にかかと落としを食らわせた。ヨクは、気絶してしまったのか。船をよけ海に落ちていった。落ちるのを確認すると、リーシャはヨクを助けに船から海に飛んだ。下りてくるラミンゴに向かって、ガンストが、マグナムを撃った。だが全て回避され、降りてきた。着地するとにやりと笑った。そしてガンストの持つマグナムを蹴り飛ばした。カインは、目をつぶった。そして刀の構え

を少し変えた。静かに音を聴いていた。アーガスが、攻めようとすると、肩を抑えられ、アゴに膝蹴りを食らわされた。アーガスは、後ろに倒れてしまった。

「みんなダメダメ！リズムに乗らなきゃ。アーオー！」

ライルは歯を食いしばった。今まで青髪海賊団が、ここまでやられることはなかった。

エンとヒョウ二人は、互いに反対側に立って、両方から、攻撃をした。ラミンゴは、着ていたベストの内ポケットから、マラカスを二つ取り出して、防いでいた。ライルはがら空きの真正面から攻めたが、いとも簡単に蹴られてしまった。

何か無いかとカインは、黙って静かに考えていた。そしてカインは、気づいた。

カインはどう攻めればいいのか考えていて、こんなにも隙があるのにラミンゴは襲ってこない。それに気がつくと、カインは静かに、ラミンゴの後方へ回り、柄のところで、攻撃した。ラミンゴに攻撃は、簡単に当たった。そのままラミンゴは、倒れた。ここで戦いは終わった。

怪我をしている者を、医務室に運んだ。リーシャとかえって来たヨクは、幸いヨクは、強力なかかと落としを食らったのに肩を抑えながら、自分で歩いてきた。ラミンゴを、マストに縄で縛った。エンは、カインに聞いた。

「なんで、やられなかったんだ？」

カインは、わけを説明した。

「彼は、おそらく目が見えないみたいなんだ。みんなの足音や声を耳で聞いて全てを、こなしていたんだ。」

ヒョウが、さらに詳しく聞いた。

「でもさーなんで、攻撃を避けられたんだ？」

「刀を振ってみる。少しだが風の音が聞こえるだろ。それに切りかかるときに踏み込む靴音。多分それで、全てがわかったんだと思う。それだけ耳が良かったんだとおもうよ。」

エンがさらに聞いた。

「でもなんで、あいつが飛んだとき、ヨクが飛ぶってわかったんだ？」

「羽ばたく音さ。鳥人がいるっていう情報はもうどこかで手に入っていたのかもしれない。だから本人も空で戦うことも予想したんだと思う。彼が目覚めたら、話を聞こう。」

「けが人の応急処置を取っていると、何かが動いた音が聞こえた。みんなでマストに行くと、骨のように肌の白い男が立っていた。」

「誰だお前は！」

肌の色が白い男は、海へ飛び込み、逃げていってしまった。みんながラミングに声をかけるが、彼はすでに死んでいた。ヨクはすぐに駆け寄って、その死因を説明し始めた。

「きつと彼は、強力な猛毒で殺されたんだと思われる。死体にはカインがつけた外傷以外、外傷はない。今わかるのはこれくらいだ。たぶん間違えはないと思うが。」

アーガスは舌打ちをした。

「チッ。あいつがいれば、何でも聞けると思ったんだけどよ。機械皇帝がどこにいたのかよ。」

「多分それを、知られないために殺しにきたんだと思うよ。」

カインが答えだと思われる発言をした。船の裏で、ヨクが鳥人の仲間に、静かに連絡をした。

「誰でもいい。クライシスを助けるんだ。いいか？」

連絡が終わると再び話し合いに参加した。リーシャは、ヨクのこそそやっていることに気づいた。

「なにやってんの？」

ヨクは動揺して、すぐに連絡を遮断した。そして何もなかったように、口笛を吹きながらみんなのいるところへ戻っている

その頃、水の都？フォールン？という町では…

機械兵の大軍勢が、町を破壊し、町の人々を次々とコンテナに詰め

て、機械城へ運んだ。

「もつと捕まえる！機械皇帝様は、労働力を欲しがっている。」

誰かが機械兵に命令をしている。戦うものも少し入るが、全然歯がたたない。

そして機械城では……

「なに奴は、任務に失敗しただと……それで奴を……ラミンゴも堕ちたな……」

笑いながら、セベルトリクスは、オイル酒を飲んでいた。テラとその仲間たちがセベルトリクスに今の状況の話をした。

「機械皇帝様、この星の人間の半分ほどを捕らえました。あと半分ぐらいです。平和と言えるような島、街はほとんどありません。」

話を聞いて、セベルトリクスは、飲んでいたオイル酒を置いた。

「まだ平和な場所があるだと……テラ。君には失望したよ……こっちに来い……」

手招きをした。恐る恐るテラは歩き出した。

「しかし、機械皇帝様。あると言っても、本当にわずかでして……」

セベルトリクスの手がとどるところまで付くと、テラの頭を驚？みました。

「弱い犬ほど良く吠える。お前は、もう用なしだ……」

豆腐を握りつぶすように頭蓋骨を砕いてしまった。手を離すと、テラはバタツと倒れた。

「こいつを、焼却炉へ……。ドウリケラ！次は、貴様が指揮だ……テラの穴を、ナズマで埋める……次からはナズマを連れて行け……」

話がおわると、ドウリケラと言われる者は、すぐさま出て行った。

第十一章：進撃（後書き）

読んでいただいております。

もしよろしければ感想とか書いていただけるとありがたいです。

第十二章：二人目

そして、一夜が明けた船では…

カインが朝一番に起きていた。ギンの部屋から騒音に近い音が聞こえる。見てみると、ゴレムの修理をしていた。一晚掛けてやってい
ると思った。入るなといわれているので、部屋の中には入らなかつ
た。ラミンゴは昨日の夜、埋葬をした。カインは埋葬したところに行
き、手を合わせた。それが終わると、ゆっくり船に戻った。カイ
ンが船長に、就任したとき、船長室という事で、みんなから部屋を
もらっていた。部屋には、あの盾と不死鳥の尾羽を置いてある。あ
るのを確認すると、部屋を出て、みんなを起こした。朝の体操をす
ると、朝飯を食べ始めた。今日の朝食は、栄養配分の取れた和食だ。
エンが最初に食べ終わった。甲板に出ると、島の草が大きく揺れた。
この島は無人島のため、人間はいないはずだった。エンはヒヨウを
呼び、揺れたところをずっと見ていると、なにやら人間のような生
き物がいた。

「がっ！？でかトカゲだ！？」

二人の声は息がぴったり。あわてて二人は、他のみんなを連れて、
さっきの草のところを指さした。そこには、何もいなくなっていま
った。エンとヒヨウは、ライルに一発ずつ殴られた。たんこぶを押
さえていると、また出てきた。しかしリーシャは、見るのを楽しみ
にエンとヒヨウと一緒にいた。

「ねえエン、ヒヨウ！もしかしてあれモグラ？」

リーシャが指を刺すとエンとヒヨウは、船を飛び降りた。追うよう
にリーシャも飛び降りた。

「また出たぞ！」

「にげるなよ！」

また謎の生き物は、地中に戻ろうとしていた。エンとヒヨウは急い
で走り、謎の生き物の足をつかんだ。

「逃げんなって」

「もう逃がしやしねえ。」

捕まえたのはなんと、龍の顔した人だった。二人は、捕まえた龍の人に、殴られてしまった。痛がつていると、森の奥へと逃げられてしまった。そのあとすぐにリーシャが到着した。

「いたの？モグラは。」

声をかけるが、エンとヒヨウは無視をして、さらに走り続けた。リーシャも必死に追いかける。走り続けるとエンとヒヨウは、一見変わった町に着いた。町の中心で、フロウが待ちの者に大声で話をしていて。

「フロウ！」

「こんなとこで何やってんの？」

フロウは二人の声に気が付いた。フロウがエンとヒヨウのもとへ歩いてきた。

「おぬしら、ここで何をしとるのじゃ？」

フロウが馬鹿に小声で話してきた。

「バカンスにね。海賊だつて休みを取らなきゃ。」

「そうだよ。疲れちゃうもんね。でさ、ここはどこなの？」

フロウが二人に怒った。

「ばか者。ここで大声を出すのではない。竜人は耳がとってもいいのじゃ。小声でも聞かれてるかもしれんがの。ここは竜の神が住む島ラゴトと言う島じゃ。」

エンとヒヨウはそのことを聞き、小声で話し始めた。

「でさでさ、ここで何やってるの？」

「そうそう、なんでこんな所に？」

フロウがその詳細を教えてくれた。

「実はな、ここに大海獣の鱗を、持っているらしい者が居るのじゃが、わかんのじゃよ。大海獣とは知つとるじゃろ？あのとき三人で話していたのを、聞こえていたのじゃろ？」

二人は考えながらうなずいた。

「でその鱗がどうしたの？」

エンが聞くと、フロウはなにやら眼鏡と資料を取り出した。その資料のページをめくりめくり、簡単に説明し始める。

「わしの研究でだが、聖獣から物を受け取ったものは、その聖獣が呼べることが、判明したのじゃ。さらに、物をもらったものが三人そろつと、セベルトリクスを倒せる可能性があるのだ。これで、二人目。あと一人じゃ。誰かが、幻竜王ガルクライの力を、授かればの……」

ヒョウが、なんかうずうずしている。

「フロウ、なんか手伝えることない？」

フロウは考えるまもなく、答えた。

「大海獣の鱗を、持っている者を探して欲しいのじゃ。竜人が受け取ったのは、聞いておる。竜人は、この島にしか住んでいない。海に出たりしないのじゃよ。頼むぞ。わしは村のものに聞いてみるからの。」

エンとヒョウは指令を聞くと、探しに走った。すると森からリーシヤが出てきた。

「二人とも何やってんの？それにこの町はなに？モグラがいっぱいいるよ。」

リーシヤの目に白いひげが突然見えた。そのヒゲはもちろんフロウのものだった。

「彼らには、少し手伝ってもらっているのじゃ。二人目の選ばれし者の探索にな。それとここは、竜の住むの島『ゴラドン』」

リーシヤは、すごい息切れをしていて、聞くどころではなかった。エンとヒョウは、足が速いので、一軒一軒の間が時間の経過があまりない。最後に、二人が同じところで止まった。これで最後の一軒だ。二人はドアをノックした。中からはでかい竜人が出てきた。

「なんのようだ？そこのおぬしらは？」

エンとヒョウが、スパツと質問をした。

「すいませんが……お尋ねします。」

「大海獣の鱗を持っていませんか？」

その竜人は、目の色を変えた。

「おぬしたちどうしてだ？なぜそのことを？」

「よし。ちょっと待っていてくださいね。」

二人はフロウを大急ぎで呼んだ。フロウとリーシャはすぐに向かった。フロウは、すぐに聞いた。

「そなたが、大海獣の鱗を持っているのかの？名は？」

「我か？我の名は、メギラだ。メギラ・ドラゴ・バイス。この村一の格闘の達人だ。」

メギラは、身長が高く、長髪で、竜人ならではの皮膚と顔をしている。足も人間の足の倍はあるだろう。エンとヒョウが、疑問を抱いた。

「なんで一番の格闘の達人ってわかるの？」

「この前大会があつたからだ。」

メギラは軽々話してくれた。フロウが本題に入る。

「すまぬが、メギラよ。見せてもらえますかな？大海獣の鱗を。」

「よし、見せてやろう。少々待っておれ。」

部屋の奥へ行くと、キントレ道具がいっぱいあつた。この人は、ライルの二倍はキントレをしてるとみた。少しするとメギラは持ってきた。不死鳥の尾羽とは違って、青く輝いている。触ろうとしたが、いったんやめ、特殊な手袋をつけて触った。なぜかと言うと、カインの持つ不死鳥の尾羽でヨクが火傷をして、さわれなかったからだ。手袋をつけて、触って見ると、鱗が青く燃え始めた。聖なるもの以外が、触れるとこういう現象がおきてしまう。フロウが手放したのを見ると、すかさずリーシャが手に取った。フロウは止めようとしたが、問題はなかった。青い炎は出そうにもなかった。

「キレイだね、これ。いいなあ。」

リーシャは、様々な角度から鱗を見続ける。エンとヒョウも触ろうとしたが、フロウにとめられてしまった。

「どうした？」

メギラが心配そうに聞く。

「いや大丈夫じゃ。そうじゃおぬし、すまないがこの島を出てはくれぬか？そして、外に止まっておる海賊の一員になって欲しい。」
メギラは考えている。答えを出した。エンもヒヨウもときどきしていた。

「こいつらも仲間のか？」

メギラが横目で三人をにらみつけた。三人は、何度も早くうなずく。
「よかるう！ただし、私は船のことに關しては何もやらんぞ。船が沈没しそうなときぐらいは助けてやる。それでよいか？」

エンもヒヨウは手で尾互いに合図しあい、フロウはうなずいた。残念ながらリーシャは、話を聞いていなかった。

「トカゲさん。はいこれ返すね。」

鱗をメギラに返した。

「私はトカゲじゃない。龍だ。」

「そんなことより、荷物を準備するのじゃ。ここには当分戻つては来れぬ。」

メギラの準備は早かった。一枚の紙切れと、大海獣の鱗を持った。

「それだけでいいの？他にはなんも持っていないの？」

リーシャが心配そうに言った。

「これだけでいいのだ。私の宝物は、この二つ？大海蛇の鱗？と？
竜神様のお告げ？だ。」

「武器は？」

エンが聞くと、鼻で笑い、話してくれた。

「武器などは邪道だ。なんせ素手だからな。」

五人は、村を出た。

「さよならの挨拶はいいのか？」

エンが聞いた。

「挨拶をすると、別れにくくなる。だからしないのだ。」

さらに森を歩いてる途中、

「私は、なんという海賊団の一員になるのだ？」

ヒヨウが答えた。

「青髪海賊団です。船長はカインっています。」

メギラは、笑っているとすぐ森に入った。

「なんで笑うんだ？」

今度はエンが聞いた。

「なんでって、面白いやつのところの一員になったからだ！」

「トカゲさんなんで？そんな面白いの？」

リーシャが面白いということがわからなかった。メギラは、教えてくれた。

「それはな、最近その者の名が、有名だからだ。それに私は、トカゲじゃない。竜だ。しっかり覚えろ。」

「ハリー！トカゲさん。」

メギラは、一度怒りかけた。森を抜けると、大海獣の鱗が青く輝きだした。フロウは、その反応も調べていた。カインも同じことになっていると思う。

「なんだこの反応は？」

船の中のカインは気づいた。それを持ち、船の外へ出た。赤く輝いている。カインはエンとヒヨウの隣にいる大男について聞いた。

「リーシャ！エン、ヒヨウ。誰だその人は？」

メギラは、エンとヒヨウがしゃべりそうになったのを、口を押さえて話した。

「カイン殿！我が今日から仲間になる。メギラと言うものじゃ。あなたが不死鳥の羽を持っているように、私も大海獣の鱗を持っている。」

メギラは、鱗を高々と見せた。カインも羽を上げた。

「上げる意味ってなんか意味あるの？」

リーシャが、何で上げるかメギラに聞いた。

「いや特にないと思うが、なんとなくだ。」

リーシャとエンとヒヨウは悩んでしまった。カインの後ろからヨクが出てきて、すぐにメギラのもとへ寄った。

「君が、聖獣に選ばれし者の二人目か…」

カインは取り合えず船に誘った。握手しようとする、はじかれてしまった。

「おぬし、どうしたのじゃ？」

フロウが争いになるのではと思い、二人の間に入った。

「大丈夫じゃ、老人。ちと小手調べするつもりだ。よいかなカイン殿。」

「いいだろう。無条件で入るとは、思ってなかったしな。相手が素手ならこつちも素手だ。」

カインは自分の拳と拳を軽くぶつけあった。メギラも準備体操を始めた。

「立会人は、その鳥人頼む。」

ヨクはコクリとうなずいて、前に出た。

「では、はじめてください。危ないと、私が思えばすぐに止めさせてもらう。よろしいかな？」

二人はうなずいた。うなずくと、二人は無言で走り出した。戦いの状況は、メギラの攻撃とカインの攻撃がぶつかり、火花が散っているみたいだ。攻防の連続だった。終わりに近づくと、メギラの蹴りをカインの腕で防ぎ、もう片方の腕で、メギラの腹を殴った。その一撃の威力が強く、大木に背中をぶつけた。

「そこまで！お互いの力は分かっただろう。」

小手調べが終わると、すぐに船に乗ってくれた。

「なーカインちゃん、この人。」

「人間じゃないんだぜ、すごいよな。」

「あたしも初めて見た。こんなトカゲさんがいるなんて。」

リーシャはエンとヒヨウにかなり慣れていた。この船一番のおしゃべり3トリオだ。カイ

ンとメギラはリーシャたちを無視して、大きな船室へ連れて行くと、作業をしていたみんなの手が止まった。人間とは、別の種族を見て驚いていた。そのなかでヨクだけは手を止めずにいた。カインはメ

ギラの後ろから、部屋に向かった。

「新しい仲間のメギラだ！よろしくな。」

みんなの目は、変なものを見る目だった。一番最初に、ライルが口を開いてくれた。

「なんなんだそいつは。戦えんのか？」

エンとヒヨウが説明した。まずはエンから

「彼は、竜人界の中で、一、二を争う実力！しかもカインとさつき、戦ったのにこの元気。」

次にヒヨウが話した。

「彼は武器がないけど、ものすごいキック力がある。主に蹴りで、攻めるそう。そうは見

せてあげてよ！」

？力？と言う言葉にライルが反応した。最後にリーシャが話し始めた。

「そうだよ。このトカゲさん強いんだって！それに大海獣だっけ？その鱗だって持つ

てるんだよ。」

メギラは怒るにも諦めはじめた。メギラを含めるみんなは、甲板へ出た。ひとつの大

砲の弾を渡した。メギラは、大砲の弾を足元へ置くと、蹴り構えた。そして蹴っ飛ばした。

弾はみるみる遠くへ飛んでいった。何かにぶつかったのか爆発した。たぶん鳥に当たったらしい。

「すげーだろ。なっ！」

「これが、彼の実力なのだぞ！」

「なのだぞ！」

エンとヒヨウとリーシャが自慢げに話した。三人にアーガスが突っ込んだ。

「お前らの力じゃないだろ。」

「さようじゃ。おぬしら、彼に話をさせてやるうとは思わぬのか？」
三人はフロウの言葉を聞くと、後ろに下がった。カインは、メギラと一緒に、やりたいことをしに各自散った。ガnstは、部屋からいなくなるとがっくりとした。

「全く勝手に使うなよ。結構高いんだから。」

一時間もすると、もうみんなはメギラのことに慣れた。ライルは新しい攻撃方法を考えている。ヨクは、舵を取っていた。時々ギンに聞いて方角を確認する。エンとヒヨウは、船の整備をしている。アーガスはなにかしら食事の用意をした。たぶん歓迎パーティーだろうか。ガnstは、大砲の弾がとられたことがまだショックで立ち直れない。ヨクは当たった鳥が心配で、海で流れてる鳥を見つけると自分の薬で治療している。ギンは、ゴレムの修理中。リーシャは部屋で寝始めた。フロウは、カインとメギラと一緒に、船長室へ向かった。

第十二章：二人目（後書き）

長々と会話ばかりが多いですが、
完成したとほつとしてないで、たまには読みやすいように
書きたいことがかけるように編集したいと思います…！

第十三章：バイオモンスター

その頃セベルトリクスは……

「まだか……裏切り者すら見つからないのか？何をやっているんだ……そうだ……もうひとつ命令を出そう。儀式の準備をしろ…指示はレイル、お前が指示を出せ……生贄は、捕まえた人間どもだ……もし足りなかったら俺を呼べ……」

レイルは命令を聞くと、すぐに機械兵に準備させた。妙な形の鍋に、熱い不気味な湯を注いだ。その中に、さらに緑色の粉も入れた。入れると青色の泡が立ち始め、水温が一気に上昇した。そこに生け捕りにした人間を次々入れた。入れてよい数を入れるが、まだ何も起きない。

「機械皇帝様！あと少し足りません。」

城の部屋の奥にいた、セベルトリクスはレイルに言った。

「だったら……お前が使っただけだ……」

セベルトリクスは、機械兵に命令した。レイルを捕まえて、

「やめてください！」

助けを求めるが、無視され投げ入れられてしまった。入れると泡が、紫色の泡が立ち赤い湯となった。セベルトリクスが、誕生に必要なスペルを唱えた。すると、中から巨大な化け物が立ち上がった。

「完成だ…悪魔の化身…名はそうだな…レイルが最後の生贄なのだから……そうだなデビルレイラー…なかなかいい響きだ。」

デビルレイラーは、鳥に似たような顔をしていて、腕が大きく長い。背中には、巨大な羽が生えていた。身長十メートルから、二十メートルはありそうだ。機械兵が、ありくらいに見える。

「行け…デビルレイラー…あらゆるものを抹殺しろ……」

「お待ちください。」

大きな剣を持った男とマグナムみたいな銃を持った男が出てきた。

「どうした、フリード、ドレイク……」

「私らの案なんです、最近見つかった聖獣からもらったアイテムを狙うというのはどうでしょう？ 気に入らなければ、先程のことでも。」

二人の意見をフリードが話した。

「良いな…その作戦は…デビルレイラーよ…聖獣から授かったアイテムを持っていく者を、捕らえる。」

大声で命令すると、デビルレイラーは、吠えてどこかへと飛んで行った。

「おい！ドレイク、フリード…」

二人が皇帝の元へ来た。

「何の用でしょう？ 皇帝様」

「あいつ一人では心配だ…お前ら二人も行け…」
命令を受けるとすぐに走って追いかけた。

「待っておれ…カイン…お前を殺してやる…」

その頃青髪一味の船では…

「よし船を、出港させるぞ！」

碇を揚げて、帆を広げた。船はゆっくりと進み始めた。

「ではまたわしは、行かねばならぬ用事があるので、失礼させてもらうぞ。また会おう。」

フロウは、また魔法で消えてしまった。みんなはフロウを見送ると、それぞれのやるべきことをやり始めた。

ギンは、ラミングに破壊されたゴレムの修理。これがなかなか直らない。アーガスは、夕飯の献立を考えている。ガンストは買った新聞を読んでいて、エンとヒヨウは、船の整備をしている。ライルは甲板でキントレ、ヨクは大砲に運悪く当たってしまった鳥の看護。

リーシャは自分の部屋でまだ寝ている。メギラとカインは一緒に釣りをやっている。メギラは釣りがともうまく、じゃんじゃん釣りあげていた。カインが一尾釣るのに、メギラは四尾釣り上げている。釣りのうまさに啞然していた。

「なんでそんなに釣れるんだ？ 餌は何を使ってるの？」

カインが聞くと、釣竿をあげて見せてくれた。釣り針には何の餌も付いていなかった。カインは聞いた。

「餌がない…捕られちゃったのかい？」

メギラは、教えてくれた。

「餌などそんなものはつけておらん。私は海の中に一人だけだが、仲のよい魚人がいるのだ。そのものがつけてくれている。」

魚人のことをさらに詳しく聞いた。

「ぎよ、魚人！？ちよつと待ってくれ。この世にはどれくらいの種族がいるんですか？それにどうしてその人は、それにつけるってわかるんですか？」

メギラは詳しく教えてくれた。

「種族は……全部で六種類。人間、竜人、魚人、鳥人、エルフ、そして儀式によって人工的に作られるバイオモンスター。この六つだ。六つの中で、一番危険なのが最後に言ったバイオモンスターだ。とてつもなく力が強い。まともに戦ったらお陀仏だ。さらに動きも早くなり、一体のバイオモンスターを倒すのにかなりの犠牲が出る。」

それで砂漠の国は壊滅したと聞いたことがある。人間が、この星の五割に住み、あとはエルフが二割、あとは残りを分け合う。魚人は、海全域だ。」

カインは釣りをしていることを忘れ、腕組みして感心した。そのままメギラは話を続けた。

「私の釣竿が、なぜわかるかというと、この釣竿から私は、特殊なおいが海の中で発生するものをつけておる。私と仲のよいものは、そのにおいをつりの印だと話した。それで糸にくくりつけてもらう。だから私は、いつでも釣りをやるときは、大量なんだ。」

「ずるいぞ。正々堂々やれよ」

メギラは軽く笑ってごまかした。

「それはそれでいいけど、メギラ、一つ聞きたいことがある。君の夢は何だい？」

メギラは腕を組み、カインを横目で見た。

「私の夢は、おぬしと本気でぶつかり、勝利をすることだ。」

その後も十分ほど話し合い、カインたちは釣りをやめて、アーガスに大量に連れた魚を渡した。

「おつ大量だな。今日は、新鮮な魚のフルコースだな。夜を楽しみに！」

話すとアーガスはフライパンを暖め、魚をさばきはじめた。調理室を出て、甲板に向かった。エンとヒヨウがつかれた顔をしている。やっと船の整備が終わったようだ。ヨクは、回復した鳥を逃がし、今度はラミングにやられた傷の手当てをしている。ライルは相変わらず汗をたらしながら、ハンマーを振っている。リーシャは、やっと起床したらしく甲板に寝ぼけ眼でいる。カインとメギラは話しを続けようとすると、空が急に暗くなった。空を見上げると、なにやら巨大な生き物が空を飛んでいる。その後ろに飛行機が二機飛んでいる。メギラは今までであった中で、一番動揺している。

「カイン。さっき話したよな、最も危険のはバイオモンスターだと……」

カインはうなずいた。

「あれがそのバイオモンスターの一種だ……」

指を刺す先は、巨大な生き物だ。だが今は、攻撃はしてこなく、通り過ぎて行った。メギラの振るえが止まったと思うと、後ろの方から爆発音が聞こえた。爆発がしたのはメギラのいた島だった。その音でみんなが甲板に集まった。ガンストが、みんなに聞いた。

「なんで、あの島は爆破したんだ？」

ヨクが答えた。

「たぶん理由は……メギラの持つ大海獣の鱗だと思う。島を出て、正解だったかもしれない。爆破したわけは、用済みとかなんやらじゃないか。」

またあの化け物は空を飛んだ。島から三十キロ以上はなれていても、簡単に見えてしまう。それは、カインたちの船に向かって、飛んできた。船を見つけると、飛びながら船の上に留まった。みんなは、

武器を構えた。今回カインは盾を手にしている。後ろから、飛行機に乗ったものが、声をかけてきた。

「ヒャーハッハ！お前ら、武器を下ろせ！さもないとこの化け物、デビルレイラーに業火の炎を吹かせるぞ。分かったな。」

もう一人の男が、

「おいっ！ドレイク！あそこに竜人がいるぞ！もしかして奴が……」指を刺されたのは、もちろんメギラだ。

「ヒャーハッハ！きつと奴だ。他の竜人は持つてる形跡がなかった。それに斬鉄剣を持っている男は、カインだぜ。こりゃラッキーだぜ。」

浮かれている鳥の鳥人と鋼鉄な鎧を装備している人間が、二人で話し合っている。

「確か奴は、裏切り者からもらった盾を持っているはずだ。本当に運がいいぞ。我らはな。」

化け物は、ウーウーうなっている。カインは、みんなに大声で宣言した。

「構えを下げるな！攻撃態勢は取っておけ。こいつは僕たちで倒すんだ。あの化け物を……」

みんなその言葉を聞き、武器を下ろすことはなくなった。ドレイクが上機嫌に高い声で、笑い始めた。

「ヒャーハッハ。いいのか？そんなことを言って、デビルレイラーよ。業火の火炎を吹け！奴らの船を沈めろ！」

デビルレイラーは思いきり息を吸い込み、口から炎を吹いた。みんなは、目をつぶった。先頭に立ったカインもビクビクしながら、盾を持つ腕を伸ばした。目をつぶっていても、赤い炎の色が見える。

死んだなと誰もが思ったとき、盾が急に眩い白い光を放ち船全体を、光の膜で包み込んだ。相手の炎の火花も通さないほどの完璧な守りだった。ドレイクとフリードは、その光の膜に目を疑った。だがそのこと以外にも驚いていたことがありそうだ。

「あいつは……本物だ！あいつは——」

おびえていると、バイオモンスターが吹き続けている炎が、跳ね返ってきた。デビルレイラーは鳴きながら、自分の炎を食らってしまい、溶けていった。

「まさか……バイオモンスターが、やられるとは……」

メギラは目に写っている光景が、本当だとは思えなかった。ライルは、相手の怪物が死んだことで、なぜか涙がこぼれていた。

第十三章：バイオモンスター（後書き）

二作出しているんですが、今まで片方の更新ばかりで申し訳ないです。

なんか子供っぽい名前が出てきますか、気にしないで読んでください

第十四章：儀式

「くっ！覚えてろよ。」

「今度は、我らが倒す。しかし皇帝の命令がこない限りやれんな。」

飛行機が動き出すと遠くへ飛んでいってしまった。みんなは息が上がっていた。盾の出した光は、だんだん消えていった。みんなは武器をしまった。

ライルは、まだ涙を流していた。

「その力がありや、俺の国が……」

ライルは泣きながらつぶやいた。その場に座り込み、目を隠した。

「どうしたライル？泣くななんて珍しい。」

アーガスが、おちゃらかに言った。時間を明けて、ライルは泣いていたわけを話してくれた。

「実は、あんまり話したことがねえんだが、俺の国はああいうやつによってやられたんだ。てめえなら、やれるかも知れねえー」

ライルの話を聞いて、みんなが黙ってしまった。ギンは、それを聞いて、大急ぎで部屋に戻った。

「なーに、黙ることはねえ！みんな盛り上がっていこうぜ！」

無理に盛り上げようとしていた。ライルはそう言つと、一人で大部屋に戻ってしまった。そのあとエンとヒョウが、寂しかった甲板を盛り上げた。

「みんな！盛り上がっていこうぜ！」

「そうだぜ！カインちゃん。」

アーガスは調理場へ行き、今まで作っていた魚のフルコースを運んできた。

「だったらおめえらも手伝え！俺が作ったやつをどんどんもっていけ！」

エンとヒョウは、調理場に駆け込み、アーガスの作った料理を持つ

て行った。

「では、外でのディナーとするかな。食うぞ！」

みんなは、食事があまり進まなかった。一番食べていたのは、エンとヒヨウだった。エンとヒヨウは周りを見ると、箸をおき食べるのをやめた。一番元気のリーシャも話そうとはしなかった。みんなが黙っている中、ヨクが話をした。

「この黙っている中、失礼するが、さっきの光について話をしたいと思ってな。なんでさっき盾が急に光りだしたか？フロウがいれば早いんだけどな。」

急に調理場で、どたばたと大きな音がした。いつものことだと思い、みんなは動こうとしなかった。ドアが開くと、やっぱりフロウが出てきた。

「また失敗してしまったの。みんなどうした？いつもの元気は？」
ヨクが説明をした。

「実は、バイオモンスターがやられたときに、ライルが泣いてしまつて……話を聞いたら、自分の国が似たやつに殺されたと……それで部屋に。」

いつもは良く驚かすフロウが逆に驚いている。

「バイオモンスター！？そいつはどうしたのじゃ？」

今度はヒヨウが説明をした。

「カインの持つていた盾が光って、相手の攻撃が跳ね返った。で死んじゃったんだ。」

それを聞き入れるとフロウは、カインを呼んだ。フロウはカインと一緒に、船長室へ向かった。中には誰も入れなかった。

「盾が光っただと？」

カインは何度もうなずいた。

「何処を目指しているか知らぬが、今すぐにエルフの里へ向かえ！
わしも同行する。」

「な、なぜですか？」

カインが聞くと、フロウがわけを話してくれた。

「おぬしは真の選ばれし者なのじゃ、よいか？この盾が光るのは、今回で二人目じゃ。この前はざっと……今が、千二百二十年じゃから。三百年前かの？あの時は、二十六の戦士の中から七人の戦士が選ばれ、悪魔を倒したのじゃ。じゃから今回はあの機械を倒すのだ。まさに歴史は繰り返されておる。」

聞きたいことがちよつと違った。

「あのですね、僕が聞きたいのは、なぜエルフの里へ行くのか、ということです。」

フロウはキセルをすい始めた。それで話を続けた。

「エルフの里に行くわけはな、エルフの里にテンペンキラというものがおる。そのものに話を聞き、これからのことについて話し合う。それに真の選ばれしものはあるものを授かるのじゃ。」

「あるもの？」

カインが？あるもの？について話してもらおうとしたが、断られてしまった。

「ここではその話はしない。そんなことよりエルフの里へはここから七十キロぐらいあ

るじゃろう。みんなに言うのじゃ。今回は戦うことより、目的地を目指すのじゃと。ギンにもいうのじゃ、直すことよりも先に、ちゃんと航海をさせるのじゃ。」

すべて聞き入れるとカインは甲板にでて、フロウに聞いたことを話した。ギンにもちゃんと航海させることができた。カインの呼びかけで、船の中は騒がしくなった。ヨクは、再びこの前連絡した仲間

に連絡をしている。リーシャは、またそのことに気づいた。
「もしクライシスを助けることが出来たら、エルフの里へ連れて行

つてくれ。頼むぞ。」

謎の連絡をきり、すぐに自分の作業に戻った。

一方……

フリードとドレイクは機械城についていた。セベルトリクスが話をした。

「お前ら…成功しただろうな…まさか…失敗したとは言わせん。」
二人は自分たちの顔を一度見て、おそろおそろ話し始めた。まずドレイクが話した。

「実は、持っているものは、カインの船に乗っており、失敗してしまいました。」

次にフリードが話をした。

「さらにデビレイラーまでも破壊されてしまいました。」

セベルトリクスは、怒りに達した。

「なぜだ！なぜお前らはそんなに弱いのだ！なぜバイオモンスターがやられるんだ！お前らの指示ミスではないか？」

フリードが話した。

「私たちの指示ミスかもしれませんが……」

「盾が光らなければ攻撃はちゃんと……」

セベルトリクスもフロウと同じように、話しが一瞬止まった。

「なんだと盾が光っただと……その盾は取り返したのか？」

二人が話そうとしたときドアが開いた。ドウリケラが部屋に入ってきた。

「機械皇帝様。裏切り者を捕まえてきました。」

縄で両腕を縛られているクライシスを投げた。セベルトリクスは、その姿を見ると少し怒りが落ち着いたのがわかった。

「それは本当か……」

セベルトリクスが歩き、クライシスの顔を上げる。見ると突然笑い出し、思い切り顔を蹴り飛ばした。

「裏切り者よ……会いたかったぞ。お前を次の儀式の生贄にささげてやる……それまで牢獄に入れて置け。」

そのままドウリケラに命令をして、牢屋に連れて行った。大笑いをした。笑っているが、今度その目は、殺しをするときの目をしている。そのまま二人に命令をした。

「今度は失敗するなよ。また同じ命令を出す。次失敗したら、どうなるかわかっているな。」

こくりとうなずき、さっきの飛行機の元へ向かった。乗るとすぐさま発進した。発信したと思うと、ドウリケラたちを呼んだ。

「お前らに告ぐ。儀式の準備をしる。今回は竜人もいる。今回のベースはクライシスだ！」

命令を聞くとすぐに準備を始めた。クライシスは縛られていたため、動くことが出来なかった。今回は竜人をドバドバと入れた。二十人ぐらい入れ、最後はクライシスの番だ。機械兵につかまれ、放り投げられてしまった。すると空から、女性の鳥人が飛んできて、落ちるすれすれのクライシスを救出した。救うと空のかなたへと飛んでいった。儀式の時間がどんどん過ぎてゆく。

「機械皇帝様！裏切り者をさらわれてしまいました。」

セベルトリクスは落ち着いていた。

「ならば少し力不足だが…やつのチームのやつを入れればいい。デИАツカ達に捕まえさせておいてよかった…二人とも入れる！」

あの時消えたと思っていた、ベガとデИАツカをゾアガルが連れてきた。そのまま機械兵が

二人をつかみ、儀式の鍋の中に入れた。ボチャツと鍋の湯の中に入れた。湯の色は前とは違

って、深緑色になった。中から新しいバイオモンスターが出てきた。大きな刀を持ち、足は

四本あった。だが上半身は人間でケンタウロスみたいだ。顔は龍の顔になっていた。

「いい出来だ……名はジャキラ……。ドウリケラよ……こいつを使って、鳥人たちの町を

破壊しろ……」

ドウリケラたちは、ジャキラを連れて鳥人の町へ向かった。

第十四章：儀式（後書き）

溜まっていたので一気に放出します。
一気に読んでみてください

第十五章：到着！エルフの里（前書き）

読みづらい箇所等がありましたら、コメントにでもなんでもいいので教えてください。

これより前の作品も随時待ってます。

第十五章：到着！エルフの里

一向はエルフの里まであと五キロまでに近づいて行った。ここまで全快で、船の進行をしていたため、みんなは寒い中手足が凍傷しそうだ。みんなは毛布に包まりながら、辺りを見ていたり、活動している。エンが寒くて怒り出した。

「寒い！暖を取ろうでみなさん。」

エンは寒がっている。それもそのはず気温は、なんと一度なのだ。この中唯一元気なのがヒヨウだ。

「ヒヨウ、黙らせろ」

アーガスがヒヨウにエンを黙らせるよういった。ヒヨウが、エンに騒ぐなと呼びかけた。エンは無視して騒いでいる。部屋の奥からライルが出てきた。気分は、見た感じでは、人を一人二人は当たり前前に殺しそうなくらいだ。

「エン！今まで気持ちよく寝てたのによ！おめえのせいで、目が覚めちゃったよ。次、騒い

だら、容赦ねえぞ！」

今の声で、エンが騒ぐのをやめた。そしてフロウが大声で呼びかけた。

「みなものあと少しの辛抱じゃ。見えてきたぞ。」

「ホント？どこにあるの？」

リーシャがフロウに聞こうとするとエルフの里の入り口らしいものが見えた。森の付近で、誰かが手を振っている。

「おーい！こっちだ。」

誰かは声までかけてきた。

「あの人？」

フロウは説明してくれた。

「あいつはジクルドというものじゃ、エルフのものじゃ。エルフに

は悪しき者はおらんから安心して、過ごしてくれ。」

みんなはカインの指示で、ジクルトがいるところまで船を進めた。そしてやっと地面足を着く事が出来た。必要な荷物だけを降ろし、船を下りた。ギンは休憩時間に、少しでも直しておこうとゴレムを直し続け、この前修理がやっと完了していた。みんなで、そろそろと歩いていると、入り口が見えてきた。古びた木の入り口だった。

「さあついたぞ！」

「ここが、かの有名な木材加工の文化がすごそうだ。ゴレムとよってくるかな。」

ギンが、ゴレムと話をしながら入り口を潜ると、エルフのみんなが出迎えてくれた。

「カインさん！握手してください。」

「ライルさん！カッコイイ！」

「アーガスさん！おいしいご飯作って！」

「リーシャちゃん可愛い！！」

スターのような歓迎だ。カインたちは少し照れくさかった。でもなんでこんな知名度が高いのか、フロウに聞いた。

「フロウ。なんでエルフの人は、僕らのことを知ってるの？」

フロウはこっそり教えてくれた。

「わしがちよくちよく移動呪文で動いていただろ。わしは、いつもここに来ていたのじゃ。」

「なんでだ？」

今度は、ライルが聞いた。

「なんでって、わしもエルフじゃからだよ。ほら。耳が長いじゃろ。故郷が一番住み心地が良い。」

入り口で盛り上がっていると、奥から鳥人が一人やってきた。

「ヨク！こつちこつち！！」

ヨクは気づいた。

「ジェファ！」

ヨクが走ってジェファの所へ向かった。青髪海賊団のみんなが考え

た。

「ヨク。誰だそいつは？」

メギラが聞いた。ヨクがすぐに答えてくれた。

「誰って覚えてない？　そうかメギラは知らないか。ガnstなら知ってるはずだ。大会のとき、うちの海賊団の狙撃主として出てもらったんだ。覚えてないか？」

みんながうなずいた。ガnstは、話を聞かなくてもわかっていった。メギラは首をかしげた。それはしかたがないあのときあの場には、まだいなかったからだ。ジェファはヨクとカインの手を引っ張った。

「なんで引っ張るんだ？」

走りながらヨクが説明した。リーシャも走って後追う。

「今まで船の中から、ジェファと連絡を取り合ってたんだ。クライシスを探してくれて、見つけたらエルフの里で落ち合おうって、約束したんだ。」

クライシスという言葉聞いて、カインも走り出した。だが、鳥人の二人が空を飛び、カインの手をすっかり掴みながら、エルフの里の奥へ向かった。そしてエルフの里の奥にある、エルフの里の王宮タルスについた。ヨクとジェファは外で待つことにした。そのあと走ってきたリーシャは、ヨクとジェファによって止められた。カインは走り続け、その医務室に向かった。中には包帯だらけのクライシスを見た。

「クライシス！！」

思わず叫んでしまった。クライシスは手を上げて、挨拶してくれた。そのままベッドの方へ走って、ベッドの横にあるイス座った。初めてあったときに比べて、クライシスが弱弱しく、かすり気味の声で話してきた。

「カインか…元気か？」

「はい、元気です。クライシスさんは？」

カインは、クライシスを見ると、義足は折れていて、鼻は曲がって

いた。さらに体中瘧だらけだ。元氣のない弱弱しい声で話し続けた。
「わたしは、元氣とはいえない。そういえば、あのあげた盾は、し
っかり持っているか？」

「ちゃんと持ってます。もらった盾で結構助かっています。あなた
は、なぜ裏切り者と呼ばれているのですか？」

本当に元氣は全くといっていいほどなく、この前にあったときより
二十歳は老けて見えてしまう。カインは怪我を心配して聞いた。

「だいじょうぶですか？」

クライシスの目から涙が出てきた。

「ありがとよ…でも私はここで、死んでしまいかもしれない。会い
にくてくれただけでも嬉しいよ。」

カインも涙がこぼれてきた。

「死ぬとか言うなよ！僕が、世界を救うまでは絶対に生きていてく
れ。見届けて欲しいんだ。」

そのままカインは完全に泣いてしまった。声は上げず、少しずつ涙
をこぼしている。クライシスも泣いてしまった

「ほんとにありがとよ…我もがんばるよ…」

涙が落ち着くまで、カインはその場から動こうとしなかった。やっ
と涙が止まり、外に出ると、みんなはもう宮殿の前にいた。

この宮殿の食堂を借りた。テンペンキラとこれからのことについて
話し合った。ゴレムは宮殿の外で、待つことにした。テンペンキラ
が話し合いを開始した。テンペンキラは、フロウと同じくらいのお
じいさんだった。身長もフロウと同じくらいだ。唯一違うのは白髭
の長さくらいだ。その後にはカインたちと同じぐらいの年の人がい
た。

「彼は？」

「ああ。この子はわしの孫のジハームだ。じゃが彼はまだ修行の身
じゃ。知識も数知れておるぐらい。ではしっかりがんばってくるの
じゃ。」

ジハームは頷き、宮殿を出て行った。

「では話し合いを始める。今回の議題は、セベルトリクスを倒すためにどうするかという議題だ。」

一番初めにギンが意見を出した。

「あなたは、この作戦会議に加わるだけですか？それで決まったらあなたは何をしてくれるんですか？」

テンペンキラが質問に答えた。

「決まったことで準備が必要ならば、用意しよう。そういう風に対処しようと考えておる。」

ギンは納得した。ライルはいびきをかいて寝てしまった。うるさいので廊下に出されてしまった。

「では続ける。やつを倒すには、何が必要だと思うか？」

メギラが手を上げた。

「やはり人材だろ。奴らは、一日に十万という機械兵を製造している。兵士一機一機は弱いが、束になるとこちらが不利だ。こちらの仲間の人数を増やすべきだ。」

テンペンキラは深くうなずいた。

「でどのような人種がいいと思う？」

これにヨクが答えた。

「やはり全種族をなるべくとっていいほど、そろえた方がいいと思う。これにはかなりの費用がかかるかもしれませんが……」

エンが意見を出した。

「ガルクライのアイテムを持っている人を探せばいいんじゃない？」

ヒヨウが意見を出した。

「二手に分かれて、戦うものと探すものと……じゃん！」

ヒヨウの話の途中から、ガンストが次に意見を出した。

「敵を潰すんだったらな、大量の大砲を用意してだな、一斉に撃てば、――」

その後続々と、話しだし、辺りが騒がしくなったとき、カインは思いきり机をたたいた。一瞬みんなの話が止まった。

「やめろ！そんなにうるさくやっては、いい意見も聞こえやしない。」

「カインの言葉を聞いて、みんなは俯いた。テンペンキラがみんなに話した。」

「船長さんのいう通りじゃ。みんな冷静に、意見がある人は拳手をお願いします。」

ゆつくりとエンが手を上げた。同時にヒヨウも手を上げていた。先にヒヨウを選んだ。

「手が上がったの。ではまずヒヨウ君。エン君、発言をどうぞ。」

「僕の意見は、二手に分かれるって作戦がいいと思います。例えば戦闘の者たちと、ガルクライを探す組という風に別れたらどうかと思います。」

「なかなかいい作戦だ。しかし人次第だな。人数がそろえばそういう作戦も出来る。」

リーシャが初めて手を上げた。

「あのーあたしは…やっぱいいです。難しい話なので終わるまで外にいますから。」

リーシャは、扉を開けて外に出た。ガンストが手を上げた。エンも負けずに上げている。

「ガンスト君はどうかね？」

ガンストは立ち上がりはなし始めた。

「相手の基地を見つけたらの話なんだが、大量の大砲を高いところへ設置して、大量に撃てば、爆発でかなりの数を倒せると思います。」

「

そんなこんなで話は二時間も続いたが、結論は出なかった。一度食事の休憩が入り、みんなばらになつて、外の風景を見ながら食べている。カインは、ひさびさにガンストとリーシャと三人で食べた。英雄が使ったといわれる剣を見ながら、食事をした。

「たまにはこういうのもいいね！」

リーシャは、遠足のように楽しんでいる。カインがずっと剣を見ていると光ったように見えた。ガンストとリーシャに聞いた。

「今、あの剣光らなかった？」

ガンストはサンドウィッチを飲み込み、話した。

「光ってないけどどうした？」

「どうして？」

ガンストに続いてリーシャが不思議そうに言う。

「いや別に……」

その言葉を聞くとガンストとリーシャはまた食べ始めた。カインはまた見ていると再び光った。ガンストのほうを向くと、気になっていないみたいだ。剣をまた見ると、光はどんどん輝きを増している。剣に気を吸い取られそうなる。そしていつの間にか気を失ってしまった。ガンストがそれにいち早く気づき、医務室へ運んだ。

第十五章：到着！エルフの里（後書き）

もう一つの連載作品？ETHICS？に追いつくようになりたい早く更新して行きます。

どちらにも応援してくださいね！

第十六章：時空剣（前書き）

だんだんとオリジナルの言葉が増えてきて、
わかりづらいかもしれないですが、楽しく読んでみてください！

第十六章：時空剣

カインは自然と目覚めた。辺りをうかがって、すぐにわかったことは、どこかの異世界に飛んでいる。周りを見ると見たことない景色だった。急に誰かの声が聞こえた。

「初めて見た景色だろう。」

誰かがカインに話しかけてきた。

「誰だ！」

カインが辺りを見回しながら大声で叫んだ。

「私が……私の名前は……そうだな……この剣の主とでも名乗っておこう。今お前は、我が体内にいる。外のお前は、気絶している。」

カインはこんな現象が起きたことについて聞いて聞いてみた。

「なぜこんなことが起きたんだ。君がやったのか？」

剣の主が薄い肌色の体を作り話してきた。

「私もこんなことが起きたのは初めてだ。あなたは、何か聖なる力を持つ物を持っているだろう、あるんだったら教えてくれ。」

カインは言われたことを話してみた。

「僕が持っているものは、聖なる盾と不死鳥の尾羽です。」

剣の主は人間の姿になって話してきた。

「お前不死鳥の尾羽を持っているのか？ だけど反応したのはこっちだな。これでわかった。お前は、この剣を継ぐ権利を持っている。目を覚ましたら、この剣を抜いてみる。絶対だ。いいな！」

またまぶしい光が輝き、再び気を失った。目が覚めると、医務室にいた。あれは夢だったのか。周りを見たらあたり暗くなっていた。ベットの隣には、クライシスが寝ていた。さらにベッドに寄りかかって、リーシャが寝ている。ベッドから降りた。そのときリーシャが起きてしまった。

「カインだいじょうぶ？ 痛いところとかない？」

カインは、リーシャと一緒にさっきの剣のあるところまで向かった。

「どうしたのカイン……何がしたいの？」

夜寒い中リーシャは、毛布にくるまりながら、一緒に来てくれた。廊下を歩いていると、途中でジクルドと出会った。そこでジクルドに頼み事をした。

「何かなカイン君？」

「テンペンキラとフロウを呼んでほしい。頼む。」

「なんだか知らないけどわかった。今呼んでくる。」

ジクルドは走って呼びに行った。カインとリーシャは、英雄の剣の前で待っていた。

「どうして？こんなとこ来たの？」

「リーシャごめんな。ちょっと待っててくれ。」

待っていると、フロウの移動呪文で、フロウとテンペンキラ。続いてジクルドがやってきた。

「こんな時間にどうしたのじゃカイン。何をしたいのじゃ」

フロウが聞くと、カインは、英雄の剣に指を指して話した。

「エルフの人とかって、この剣を抜くことできるの？」

テンペンキラが説明をした。

「それは絶対無理だ。いくら魔法を使っても、抜くことは出来ない。あのガウベルが死ぬ間際に、ここに刺した。どんな人がやっても抜くことは出来なかった。もちろんエルフ以外もな。それで君は何をしたいのだ？」

テンペンキラがカインに聞いた。

「見ていてください。」

カインが、片手で剣の柄のところを握った。思いつきり力を込めて剣を抜いた。

「だから無理だと今説明したばかりじゃろ。」

テンペンキラが発言をして、後ろを向いたとたん奇跡が起きた。なんと様々な人が抜くことに挑戦して、抜くことが出来なかった剣を糸も簡単に抜いてしまった。フロウたち三人は、驚きのあまり腰を抜かしてしまった。抜いた剣を構えた。

「僕すごいだろ。」

テンペンキラが話した。

「この剣を使えるのは、真の選ばれし者のみ。ぬしは一体何者なんだ？」

カインはこう答えた。

「誰もが笑って暮らせる世界を創るものだ。」

この場にいた誰もが共感をした。

「まあ、僕一人では、できないけど……」

テンペンキラとフロウが立ち上がって、この剣の使い方を教えてくれた。

「この剣は、？時空剣？といって、先程言ったように真の選ばれしものしか持てない物だ。三大聖獣に匹敵する力を持っている。さらに三大聖獣のアイテムを三つを揃えると、強力な力を発揮する。誰もが見たことのない力だ。時空剣は、まだほとんど資料はないが力は強大だ。気をつけて使うのだ。また明日会議をやる。そのときまた話し合おう。今日はまだ医務室で寝なさい。それでは。」

カインとリーシャは医務室へ、他の三人は、自分らの部屋へ向かった。カインとリーシャは医務室につくと、リーシャは一介欠伸をし、すぐに寝てしまいった。カインは少し剣を見て、眠りについた。しばらくすると誰かが医務室に入ってきた。そしてその男は、剣を盗もうとしていた。剣に触れたとたん、急に悲鳴を上げた。

「なんだ。なんなんだこれは！」

医務室に寝ていたカインとリーシャは、目を覚ました。と同時にフロウとテンペンキラがやってきた。明かりをつけると、誰かが時空剣を触って悲鳴を上げている。

触っていたのは、なんとジクルドだ。

「悪に満ちたようだな。一日牢獄へ入れて頭を冷やさせろ。」

テンペンキラは、警備員を呼びジクルドを牢獄に入れた。さらにフロウがカインに話かけた。

「おぬしは、この武器を守らなければならぬのじゃ。わかったか

？この剣にはこういうシステムが、ついているから良かったがの…
もう今日は、夜遅いしっかり寝るのじゃ。」

そういうとテンペンキラと一緒に医務室を出て行った。

夜が明け、まぶしい日を光を指す朝、早朝から会議は始まった。

今度はカインを中心とした会議が始まった。

テンペンキラの一言から始まる。

「では会議の続きを。その前に昨日の夜遅くに、カイン君が抜いた
時空剣の話をしよう。」

みんなはざわざわ騒ぎをせず、ただ黙って話を聞いている。やっぱりこの会議にもライルはいなかった。まだ寝ているらしい。

「本で調べたのだが、時空剣とは漢字で‘時の空の剣’と書く。真の選ばれしものは、剣によって時の空へ一度飛ばされる。体は飛ばされず魂だけを飛ばされる。そこで何かと話し合っらしい。それでその話し合いで選ばれると、その者は、剣を抜くことが出来る。それが現世のカインだ。」

半分は理解したが、半分は話がよく理解していない。フロウが簡単に説明をした。

「つまりじゃ。つまり剣に選ばれし者が、カインじゃ。」

みんなある程度納得した。たぶん理解したようだ。

「では会議を始める。」

テンペンキラが宣言した。カインが手を上げた。カインは、選ばれ
意見を出した。

「実行してほしいともらいます。仲間を増やしてもらいたいです。
割合は、人間が二十パーセント、鳥人が二十パーセント、魚人が四十パーセント、竜人が二十パーセント。それぞれに行動をしてもらいたいと思います。鳥人の仕事は、相手の基地を見つけること、つかまった人を助けること、魚人には、水中からの攻撃の準備と食料を集めてほしい、人には敵が多かったときのために、突進して、道を作ってほしいと思う。竜人は、兵士や幹部らを潰す。そして今この場にいるわれわれは、ボスを倒す。あとは状況に応じて戦略を作

る。これでどうでしょう？」

みんなが納得するとガンストが反論を出した。

「今思っただけだよ。俺達は海賊だ。そんな余計な計画なんてなくていいだろう。海賊には海賊、連邦警察には連邦警察のやり方があるだろう。」

その意見には半数は同意見だ。

「確かにそうだ。海賊には海賊、警察には警察のやり方がある。でもな僕のやりたいことは、世界を救うことなんだ。海賊の道理が通じないかもしれないが、やりたいんだ。」

今度はアーガスがタバコを吸いながら答えた。

「んじゃ、この会議は中止だな。海賊のやり方があるんだろ。」

カインは黙ってしまった。テンペンキラアーガスにが怒った。

「ここでタバコを吸うのはやめてくれないか？吸うのであれば、外で。」

「チッわかったよ。」

アーガスは怒って外に出た。会議は続けられた。エンが手を上げた。

「話は戻るけど、時空剣ってさなに？」

メギラは下を向いてしまった。ヒョウが説明した。エンにだけ小声で話した。エンは話を聞くと黙ってしまった。

「では他に意見のあるものはないか？」

みんなは回りを見た。他に誰もいないそうだ。

「では他に反論もなさそうなので、カインの言った意見に決まりだ。ではヨクとジェファで鳥人を集めてくれ、漁人と人間は……どうする？」

メギラが立ち上がった。

「私は、一人だけ仲の良い魚人がいる。会えればその者に頼もうと思う。」

「それではお願いする。」

テンペンキラが頼んだ。人間のことで頭を抱えている。ライルが急に入ってきた。テンペンキラに話した。

「人間なら任しとけ。俺の故郷にいつぱいいる。向こうに着いたら頼んでみる。」

「では頼む。」

テンペンキラが頼んだ。フロウは新聞を読んでいたら、恐ろしい記事が乗っていた。

「カインよ。作戦は失敗じゃ。」

「なんでだい？また未来でも？」

フロウは驚いた新聞の一面をバツと見せた。カインは新聞を見ると、そこにはこう書いてあった。

——昨日、鳥人たちの住む都市ウッドシティーが、何者かの手によって破壊されてしまいました。鳥人達の住んでいたウッドシティーの木は、とても太く大きい木で、なかなか切れるものではありません。ですが、今回のケースは一度で真つ二つにされています。

何度も切った形跡はありません。さらに誰かいないかと探してみると、死体だらけで、生きている人はこの辺りにはいませんでした。

地面を見ると、巨大な足跡があります。たぶんこの足跡の主が木を切ったと思われます。足跡の大きさは縦二メートル、横一メートルかなり大きい生き物だと思われます。さらにその者が書いたと思われる機械文字があります。これを訳しますと、

？カインとその仲間へ告ぐ。これ以上、人々を殺されたくなければ、進行をやめる。やめなければ、次はエルフの里を破壊する？とこう書いてあります。カインとは、今非常に有名な青髪海賊団の船長で、現在懸賞金は五千万を超えております。——

ここで文は終わっていた。

カインは、他にニュースはないかと新聞人間まなく読んだ。そこである情報を目にした。

——ヘイド村に住んでいたセザブル・マツクルは何者かに銃殺さ

れた。犯人はまだ逃走しているもよう。現在警察は、別のことで動けないみたいです。

我々が調べたところ、この男の親戚には、青髪海賊団の船長カイン・F・ハルドと連邦警察本部大将のクロド・F・シーラーがいます。しかし二人はこの場にはいませんでした。私達は青髪海賊団の船長カイン・F・ハルドを犯人だと思っています。――

それらを読んでいたカインは、新聞をフロウに返した。目を手のひらで隠してこういった。

「みんな、作戦がずれた。大半の鳥人がやられてしまったらしい。しかも次の狙いはこのエルフの里だ。」

おじさんのことは黙っていた。

「久々に戦えんのか、今度はやられねえ。」

ライルが準備体操をしていた。メギラが叫んだ！

「みな武器を持って！いつ襲ってきても良いように外で待っているんだ。」

みんなは、武器を持ってエルフの里の入り口に出た。敵がいつ来てもいいように構えていた。カインは今二本の剣を持っている。

？斬鉄剣？

？時空剣？

今回カインが選んだのは、斬鉄剣だった。カインは斬鉄剣と聖なる盾を持って、みんなのいるところに出た。フロウとテンペンキラ一緒に来てくれた。さらに聞いた。

「そういえばあれっていつの新聞？」

フロウは新聞の日付を見ると、

「これは、三日前の新聞じゃ。」

カインはなお急いで、入り口へと向かった。みんなは武器を構えて静かにしていた。入り口を出ると、目の前は高地と森だらけだった。もう修理完了したゴレムもいた。向こうのほうから、足音が聞こえる。遠くだったが、相手が大きくて、すぐ見えた。

第十七章：ガンストとギンの戦い：（前書き）

エルフの里にて戦いが始まりました。

最初はガンストとギンのタッグによる戦いです。

第十七章：ガンストとギンの戦い：

やけに涼しい風が吹いてくる。カインたちは息を落ち着かせようとしていた。

「あのでかいのがバイオモンスターだ……あいつでかい刀持っているやがる。多分あれで切ったんだろう。」

メギラがいち早く気づいた。ガンストは、マグナムで狙いを定めていた。距離としてはまだ二百キロもある。相手はどんどこつちに向かってきた。ガンストは相手が近くなったところで狙撃した。やつぱり遠くて当たらなかった。相手はどんどん加速してこちらに向かってきた。相手が五十キロぐらいに近づいて来ると、こちらもライルを先頭にこちらにも走り出した。巨大な生き物の後ろには、四人の人らしき人物がいた。その中の一人、人間の大男がカインたちを見つけたらしく、大声で叫んできた。

「初めてだな、青髪海賊団！俺はドウリケラだ。あの新聞に書いてあることは、俺たちがやったことだ。読んだかしらねえがな。もう期限はとくに過ぎてんだ！もう無駄だぜ。止まりやしないぞ。行けジャキラよ！」

そういうとジャキラの背中から飛び降りた。ジャキラの姿は、ケンタウロスのように足が四本あり、右腕は剣なっていた。そのままジャキラは、剣を構えて走り続ける。狙いはエルフの里だ。

「負けるなよ！絶対死ぬなよ！分かったか！」

ライルが、大声で叫んだ。みんなは吠えた。そして全体が走り始めた。怪物ジャキラは、急に止まった。そして剣を振り上げている。エルフの里まで距離はまだ三十キロはある。全体は一度止まった。怪物ジャキラは剣を振った。それとともに、鯨の背びれのような力ツター攻撃が飛んでくる。

ものすごい風圧で、みんなは吹き飛ばされてしまった。カインはみ

んなの前に出て、デビルレイザーのときと同じように、盾を構えた。すると盾もあのかのときにように輝き始めた。バリアが張られた。なかなかはじき返すことができず、どんどん押されてしまう。

「なんて力だ……」

後ろでリーシャが押されないように抑えている。やっとの思いで弾いたが、攻撃を相手に跳ね返すことは出来なかった。カインは一回の攻撃で、息が上がっていた。

ライルたちはその光景を見届けると、ドウリケラたちに、攻撃を仕掛けた。ライルとメギラはドウリケラに攻撃を仕掛ける。ギンとゴレムとガンストで釜を持った男に攻撃を仕掛け、鉄のグローブをつけてる男には、アーガスとヨクで仕掛けた。最後の男は、エンとヒヨウで仕掛けた。ドウリケラの武器は、サイの頭から首までの形をした武器を使っていた。ライルは、勢いよく振ったが、初めてみる武器に守られて防がれてしまった。

「人間の癖に、守るとはな。」

「それでは私が、ただの人間ではないことを分かったかな？」

話をし終えると、殴るように攻撃してきた。間一髪その攻撃を、メギラが蹴り飛ばして、方向を変えた。

「竜人が……」

ドウリケラは、かなり怒りながら話した。

「まだ生きていたとはな……あの島の竜人の生き残りか？」

メギラはにらみつけて、言い返した

「うるさい。お前を蹴り倒してやる。」

着地するとすぐに飛び、とび蹴りをかました。だが回避されてしまった。

「あぶないあぶない。竜人はすぐキレル。」

メギラは、すでに頭に血が上っていて、何も聞こえていなかった。今度は、連続に攻撃をした。キック、パンチを繰り返すが、一発も当たらない。すべて回避されている。ライルは、相手が攻撃をなぜしないかを考えていた。答えはすぐに見つかった。相手は疲れたと

ころを狙うつもりだ。答えを見つけたと思うと、すぐに声をかけた。
「メギラ！攻撃をやめろ！やめるんだ！」

だがむなしくも声は届かず、相手の思惑通りに大量の体力を使ってしまった。息が上がっているところをつかれ、攻撃されてしまった。しばしと殴られていく、よろけたところをアップパーされ、そのまま倒れてしまった。体中血だらけで、顔にはあざも出来ていた。ライルは、倒れたメギラを見て、刀を思いっきり力強く握った。

「てめえだけは、絶対に許せねえ。」

剣を構えて、相手に向かって走った。武器同士でぶつかり、音が鳴り響いた。

一方ギンたちは…

「初めまして。私はゾアガルと申します。今回あなたたちのお相手は、この私と決まりました。どうぞ宜しく。」

大鎌を持ったゾアガルは礼儀正しく、敵だというのにお辞儀までしてきた。二人と一機は、念のため木の後ろに隠れた。ゴレムだけは五歩ぐらい下がっていた。ゾアガルは、お辞儀をし終わると、大きな鎌を両手で持ち、一振りした。木がスパツと簡単に切れてしまった。

「この鎌の切れ味は並大抵じゃないんですよ。よけないと死んでしまいますよ。死んでよいのなら、そこに止まっていなさい。」

「けっ奇麗事抜かしやがって」

ガンストは、引き金を引いて、相手の頭に狙い、マグナムを構えた。
「動くと撃つぞ。」

ギンは後ろの方で、よくやったと手で合図した。だが、そんなには甘くはなかった。ゾアガルは思いつきり動いた。とても長い鎌を、鉛筆を手の中で、回しているような感覚で振り回した。ガンストも撃ったが、攻撃は外れてしまった。攻撃の標的は、ガンストに絞り込まれてしまった。

「まずは、あなたからです。さようなら。」

鎌を高く掲げて、振り落とした。二人は目を瞑ってしまった。音と

共に、相手の攻撃は止められた。ゴレムがハンマーで相手の攻撃を抑えた。

「なんだね、君は……」

「私は、正義のアンドロイド。ゴレムだ。」

ゾアガルは、あまり気に入らないらしい。

「君たちは、抹消させてもらう。私の手によってね。別に誰からでもいいのですが。」

戦い始めて二十分もすると、ガンストとギンはゾアガルによって、かなりの重傷を負っていた。今一番頑張っているのはゴレムだった。ハンマーを振り回すが、リーチが短く、なかなか当たらない。

「あなたたち、私は本気をまだ出していませんよ。」

下の者を見るような言葉使いで、二人と一機に言う。ガンストのマグナムも、無駄に撃ってしまいあと三発となってしまった。ギンは、距離が近くなったところで、槍を投げようとしている。ゾアガルは、ゴレムを思い切り吹っ飛ばした。ゴレムは倒れて、もう動かなくなってしまった。

「その機械もダメですね。あとは君たちだけです。どうします？」
ガンストは残りの弾丸をまた確認した。ギンは、槍を力強く握っている。ゾアガルは、一步一步近づいていく。二人は、木の裏に隠れて息を呑む。ゾアガルは、鎌を大きく振り構える。ガンストは、ゾアガルに向かって、残りの三発のうちまず一発目を撃った。その弾はゾアガルの右目に当たった。

「君は絶対に許しませんよ。覚悟……！」

右目を撃たれ、ガンストに完全にキレてしまった。振り上げた手は、そのままガンストに、振り下ろした。

「当たれ！」

振り下ろしている途中に、ギンは夢中になって槍を投げた。両手で持っている鎌の右腕に刺さった。続けてガンストは、銃弾をさらに一発撃った。ゾアガルは撃たれて、鎌を落としてしまった。ゾアガルは、力を振り絞りギンの刺した槍を抜こうとしていた。

「ありがとな。ギン。まさかお前に助けられるとはな。」
ガンストは残りの一発を撃った。その一発は心臓に当たった。ギンの槍を左手で持ちながら倒れてしまった。ギンは、ゆっくりと自分の指した槍を抜いた。抜いた瞬間、恐ろしいあまりに後ろに座り込んでしまった。ガンストは、ギンの隣に座り、無言の硬い握手を交わした。

第十七章：ガnstとギンの戦い：（後書き）

感想・読みにくい箇所などありましたら、迷うことなく、教えて下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1392c/>

PIRATES OF STORY ~ Grant Realization For Dream ~

2011年10月3日22時43分発行